

五十年の歩み

麻布学園チェス部
設立五十周年記念誌

麻布学園チェス部

巻頭言

1972年に設立された麻布学園チェス部は、2022年に設立50周年を迎えました。

この大きな節目に際して何らかの記念イベントを開催しようという話は既に40周年記念イベントのときからあったのですが、その後の各種の混迷、とりわけ新型コロナウイルス感染症の蔓延に伴いこの話はなかなか始動されることがなく、Facebookのチェス部OBグループ上での議論を経てやっと幹事団が結成されたのが2022年6月。その後、記念イベントを「記念誌発行」「現役・OBの交流会」「顧問の先生方への謝恩会」の三本柱として企画を進めたものの、残念ながら長引くコロナ禍のために「交流会」の開催は早い段階で断念せざるを得なくなり、ようやくここにこの「記念誌」の発刊の日を迎えることができました。また「謝恩会」の方も本誌発刊の2日後である2023年2月25日に、東京都内において70名ほどの参加者を得て開催される予定です。

しかしこの1年間の遅れは返す返すも痛恨事で、この間の2022年8月25日にチェス部初代顧問であられた近藤祐康先生が鬼籍に入られ、同年11月10日には麻布学園OBで日本のチェス界のレジェンドと言われた権田源太郎氏も亡くなくなられました。お二方とも草創期のチェス部を支えて下さった恩人であり、この50周年記念イベントがそのことへのご恩返しともなればと思っただけに、これら二つの訃報は私たち幹事団にとって大きな衝撃でした。ここにあらためて近藤先生と権田さん（と呼ばせていただきます）のご冥福をお祈りするとともに、この記念誌の記事の中に登場いただいていることについて彼岸からご了承を賜りますようお願い申し上げます。

今回、この記念誌は時代を反映して紙媒体での発行は行わず、電子版としてまとめることとしました。これにあわせて、過去3回発行されている記念誌（20周年・25周年・30周年）もスキャンし、同じく電子版として参照可能なかたちとしています。これらの中でも特に20周年記念誌の出来は素晴らしく、今回の50周年記念誌を制作する際の手本としましたが、私の力不足もあってこの手本ほどには意欲的な紙面構成とすることができず、シンプルに歴代顧問の先生方からのご寄稿、代々の部員による50年の歩みの概観、チェス部OBの中でとりわけ国際的な活躍をされている方々からのご寄稿、現役とOBの声、そして資料編という建て付けとしました。内容の不十分さや不正確さについては、電子版として制作したことの利点を生かし、いったん初版として刊行した本書が今後さらに第二版、第三版と版を重ねてゆく中であるべき姿に近づいてゆくことを期待します。

イギリスの歴史家E.H.カーは、その著書『歴史とは何か』（1961年）の中で「歴史は、現在と過去との対話である」と語りました。そして同書の訳者・清水幾太郎は、この言葉の意味を「過去は、過去のゆえに問題となるのではなく、私たちが生きる現在にとっての意味のゆえに問題になるのであり、他方、現在というものの意味は、孤立した現在においてでなく、過去との関係を通じて明らかになるものである」と説明しています。この記念誌のよう

な「過去を振り返る書」の意義もまた、その過去に生きていた人々が懐旧に浸るためではなく、現在を生きる若い世代の人たちを主たる読者と想定して、皆さんが青春の一部をなぜ・なんのためにチェスとチェス部に捧げているのかという疑問や探究心を持ったときに答を見出すためのヒントを提供しようとする点にあります。本誌がこの企図を多少なりとも果たし得たかどうか、後日の率直なご意見を待ちたいと思います。

なお、本誌に掲載した近藤祐康先生のプロフィールについては麻布学園卒業生である坂本衛氏（1977年卒）と池澤和人氏（1983年卒・書道部）から、権田源太郎氏のプロフィールについては権田金属工業株式会社総務部の清水宏一様から、それぞれ懇切丁寧な情報提供をいただきました。また、資料編の作成にあたっては日本チェス連盟（一般社団法人 National Chess Society of Japan）の理事・真鍋浩様から貴重なご助言を賜りました。ここに感謝の念と共にご報告します。

最後に、本誌に寄稿して下さった先生方・OB諸氏・現役の皆さんにこの場を借りて厚く御礼申し上げると共に、本誌の刊行実現には幹事団の皆さん＝金子寛明さん（1979年卒）、吉田哲郎さん（1983年卒）、高田善雄さん（2016年卒）、森安悠一郎さん（2021年卒）の並々ならぬ献身があったことを記しておきます。

2023年2月23日
安藤 信之（1978年卒）

目次

巻頭言

先生方からのご祝辞

- 麻布学園チェス部設立50周年に寄せて〔平秀明校長先生〕
- 2010年からチェス部の顧問になって〔重田大輔先生〕
- チェス部顧問として「チャッカマンには負けれない」〔高橋諒先生〕
- チェス部50周年に寄せて〔平野博志先生〕
- チェス部創部50周年記念に寄せて〔廣瀬武久先生〕
- 五十年という歲月〔加藤史朗先生〕

二人の恩人を偲ぶ

近藤祐康先生

- 近藤祐康先生の思い出〔小林正純〕
- 近藤祐康先生の教え〔安藤信之〕
- 恩師近藤祐康先生から頂いたお手紙〔山岡和純〕

権田源太郎氏

- 偉大なる先輩、権田源太郎さんを偲ぶ〔吉田哲郎〕

あの頃のチェス部 一部員の回想で綴る五十年の歩み

- チェス部黎明期〔安藤信之〕
- 存亡の危機を乗り越えて〔吉田哲郎〕
- チェス、サッカー、マラソンそして将棋〔小野瀬裕之〕
- チェスを長く続ける秘訣〔東芝輝臣〕
- チェス部に入ってよかったこと〔松尾朋彦〕
- チェス部の1回目の厄年〔赤塚威夫〕
- チェス部の思い出（1995－1999）〔益本宇一郎〕
- なぜオレはあんなムダな時間を・・・〔篠田太郎〕
- 青春時代の思い出（+やらかし）〔小林厚彦〕
- 谷間の代から見る麻布学園チェス部史〔堀翔太〕
- チェス部の歴史 2010年代後半編〔松山紘也〕
- チェス部の回想〔栃久保仁〕

特集「麻布の丘から世界へ飛び立つ」

- 麻布チェス部とチェスとロシア〔中村龍二〕
- チェス部創立50周年を祝して〔小島慎也〕

チェス部の今とこれから

チェス部の現在〔栃久保仁〕

現役部員一言集

OBからのメッセージ

資料編

年表で見るチェス部の歩み

日本チェス協会主催公式戦記録（優勝者）

全日本選手権（参加者）

全日本ジュニア選手権（参加者）

海外遠征記録

編集後記

先生方からのご祝辞

まず最初に、チェス部50周年に対して頂戴した平校長先生と歴代の顧問の先生方からのご祝辞を紹介する。

麻布学園チェス部設立50周年に寄せて

平 秀明（麻布学園校長）

このたびは麻布学園チェス部設立50周年まことにおめでとうございます。学校長として心よりお祝いを申し上げます。

さて、皆さまご承知のように本校では生徒の自主活動、分けても様々なクラブ活動が活発に行われていることが大きな特徴となっています。放課後ともなれば、グラウンドで、中庭で、部室や教室、実験室で、はたまた多摩川グラウンドでというように、生徒は拡散し、それぞれの趣味やスポーツに没頭しています。魅力的なクラブがたくさんあり、中学一年生の入部率は90%を超えています。なかには2つも3つも掛け持ちして、夏休みも合宿や練習でほとんど家にいないといった生徒もいます。また、文化祭の展示や企画で感銘を受け、「〇〇部に入りたいから麻布を志望しました」という受験生もいます。

チェス部についても毎年、文化祭では素敵な飾り付けで教室をしつらえて多くの小学生を呼び込み、部員と対戦しています。また、ホーム・カミング・デイでもちびっ子相手に対戦したり、優しく手ほどきしたりといった地道な活動を続けられ、チェスプレイヤーの裾野を広げる取り組みをしています。そんなチェス部の優しいお兄さんに憧れて麻布の門を叩いてくる受験生も少なくないのではと思う次第です。

長く学校に勤めていると様々な気付きがあります。クラブに関して言えば、現在、麻布には20の文化部と25の運動部がありますが、長年の歴史と伝統があるクラブ、たくさんの新入生が入部するクラブ、少人数だが息の長く続くクラブ等々それぞれ特徴があり、また、新しく設立されるクラブがある一方で、人気がなくなったり、指導者がいなくなって部員が減るなどして休部や廃部の憂き目に遭うクラブもあります。世の中のいろいろな組織の栄枯盛衰を見るかのようなようです。ここ麻布学園でも同様な事由で休・廃部に至ったクラブはこの50年間で十指に余ります。

そのようななかであって、チェス部という日本国内の中学高校では極めてユニークなクラブが連綿と存続してきたことは一つの奇跡であると思うとともに、これまでに成し遂げられてきた輝かしい戦績の数々はまさに麻布学園の至宝とも言えるものであり、たいへん誇らし

く思います。これらの戦績については、毎年皆さまのお手元に届く学園広報誌「麻布の丘に」に掲載していますが、2000年代以降で見ても、

2000年：全日本ジュニア選手権優勝

2001年：全日本選手権第3位、全日本チーム選手権優勝

2002年：全日本チーム選手権優勝、チェスオリンピック出場

2003年：全日本ジュニア選手権優勝

2004年：全日本ジュニア選手権優勝、チェスオリンピック出場

2005年：全日本選手権優勝、全日本ジュニア選手権優勝

2006年：全日本選手権優勝・第3位、全日本ジュニア選手権優勝、チェスオリンピック出場

2018年：東アジアユース大会U16第6位

2019年：全日本ユース選手権U18優勝

等枚挙に暇がありません。そして、麻布を卒業した後もチェスで活躍されている方々のニュースが耳に入ってまいります。

これまでチェス部の活動を半世紀にわたり担ってきた生徒諸君、そしてそれを支えられてきた多くのOBの方々や顧問の先生方の情熱とご努力に心より敬意を表します。

これからも、ボード上の熱い戦いに多くの麻布生を引きつけ、魅了し、輝き続けるクラブであってほしいと真に願っています。

2010年からチェス部の顧問になって

重田 大輔（チェス部顧問）

チェス部創立50周年おめでとうございます。私がチェス部の顧問として関わっているのは、13年ほどで、50年という歴史に圧倒される思いですが、ここで私とチェス部との思い出を振り返ってみようと思います。

私は1995年4月から2001年3月まで麻布に在学していました。在学中は将棋部に所属していて、下手の横好きではあったけれど将棋に熱中していました。当時将棋部は高校1年で引退になり、暇になった私は同級生の黒川くんに誘われてチェス部に入部しました。高校2年の方はもう引退した後に入った新参者でしたが、同輩はもちろん後輩からも暖かく接してもらいました。

ルールと、初歩的なエンディングや簡単なプロブレムを教わり、そしてオープニングを習いました。罨が多いからとルイ・ロペスを教えてもらいました。なんとなく分かったような気分になってすぐに大会に参加し、私が白番になったときは全てシシリアンになりました。

普段の部活も合宿も将棋部とは少し雰囲気違って新鮮でした。他の中学高校にチェス部がなく、大会は自分たち以外ほとんどが大人。同年代の競う相手はほぼチェス仲間という状況の中で、真面目にトーナメントを組み、真剣にチェスに臨んでいたのが印象的で、非常に濃密な1年を過ごすことができました。

卒業して8年経った2009年。麻布の専任教員になりました。同じ数学科でチェス部の顧問でもあった平野先生が2009年度いっぱい定年退職されるので、チェス部の顧問見習いのような感じで一年目から合宿に引率したりしていました。次の年から廣瀬先生と2人でチェス部の顧問として関わることになりました。

実を言うと、顧問になってチェス部の様子を見ていて、私が部員だったときとチェス部の雰囲気が変わっていると感じました。そのことで一度、執行部の生徒たちを呼んで話をしました。話をしただけではなく、悪いことに、部活動のやり方に口を出してしまいました。当時の部長には、申し訳ないことをしたと思います。

その後、10人以上の部長を見てきました。色々なタイプの部長がもちろんいたのですが、「もっとみんなに、真面目にチェスをして欲しい」と悩んでいた部長もいました。冷静に考えてみると、私が高校生だった頃に比べて状況は変化しました。インターネットでチェスの情報が得られるようになり、まずルールを簡単に調べられるようになりました。今ならYouTubeで大会の対局が見られたり、コンピュータや人と自宅にいながら対局したりすることができます。「チェスができる」というのが特別なことではなくなったのです。

そういった難しい状況で、「チェスを好き」あるいは「チェス部が好き」という少し緩めの繋がりの中で、彼らが楽しんだり悩んだりするのを見守ったり、アドバイスをするようにしたいと今では考えています。

あまり生徒の顔が見えないような話をしてしまいましたので、今度は逆に、顧問として主に関わる合宿の様子を、写真を交えながらお伝えしたいと思います。

合宿初日。上野駅や浅草駅などに集合し、合宿係に連れられて特急に乗り、ホテルへ。顧問は全く関与せず、全て生徒にお任せ。合宿係が毎年頼もしいです。部員は興奮気味で、ピコピコハンマーなどの明らかにチェスと関係なさそうなものも見えます。



ホテルに着くと荷物を置いて開会式。中学1年の部員に棋譜の書き方を説明したりもします。この合宿の目標を言うのが恒例で、これは少なくとも私が部員だった頃から続いていた気がします。合宿のメインはスイス式のトーナメントですが、その1回戦の組み合わせも発表されます。TDという役職は現在もありますが、今は手計算せずパソコンのソフトを使っています。



対局が始まると、外の大会と同様、私語はなくなり、静かで緊張感のある空気になります。



最近では、チェスクロックが足りなくなるとスマホで代用しています（将棋や囲碁のメジャーな対局時計「ザ・名人戦」も販売が終了するようですが、どうなっていくんでしょうね）。



朝、7時半頃から恒例の朝の体操と灯台守が始まります。朝の体操は寝ぼけ眼で緩慢な動きであることも多いですが、灯台守は毎回盛り上がっています。私が部員の頃には既にありましたが、いつ頃からあるのでしょうか。部員の名前も覚えられて良いゲームだと思います。



対局以外ですとここ数年、OBの小島さんにチェス講座を開いてもらっています。部員も熱心に次の一手などを考えています。最後には部員全員と小島さんの同時対局も行われます。



帰る日の前日の午後の後半はトーナメントがありません。元々はTDが集計作業をするためだったはずですが、今ではパソコンが順位を出してくれるのでTDの負担はほぼなくなったと思うのですが、対局はないまま。今の部員からすると「謎の空白」である時間を、ボードゲームなどの親睦を深めるために使っているようです。

その夜は、閉会式と引退式（夏合宿の場合）が行われます。最高学年の部員が引退の挨拶をし、新執行部の挨拶があります。5年間の思い出、あるいは先輩との思い出があふれて感極まる生徒も出ます。その後、新体制で討論会が行われますが、このときには顧問はもちろん高校2年の引退した部員も席を外します。



最終日はチェックアウトして帰るだけです。毎回手際よくやってくれるので、とてもスムーズです。



2020年からコロナ禍によって部活が大きく制限されています。100周年記念棟にある部室は実質使えない状態が続き、普段の部活さえできない状態も度々ありました。「オンラインでも活動はできる」とは言っても、チェス部の楽しさとオンラインの活動は相性が悪い様で、当時の部長たちも随分悩んだようです。徐々に部活の規制も解かれてきて、2022年の夏には2019年夏以来の合宿ができました。チェス部が永く活躍できるよう願っています。

チェス部顧問として ―チャッカマンには負けられない―

高橋 諒（チェス部顧問）

早いもので、チェス部の顧問になってから十年が経とうとしている。チェスのことなど、駒の名前とボビー・フィッシャー（偶々ドキュメンタリー番組を観た）くらいしか知らなかった私であったが、重田先生からお声がけいただき、顧問を引き受けることになった。顧問になった以上、ルールくらいは覚えておこうということで、重田先生から丁寧なご指導を賜り、駒の点数やいくつかのエンドゲームを知ること、夏合宿前には終盤戦ならどちらが優勢なのかくらいは判断できるようになった。だが、その努力の甲斐もなく、合宿で必要とされたのは、ちくわパフェなるものを作るために竹輪を奢ってほしいとコンビニでたかられた時と、花火をする際にライターで火をつけられる部員がおらず、喫煙者であった私が火付け係に任命された時だけであった。その結果、最初は意気込んでいた私も次第に読書や別の仕事をして過ごすだけになっていく（しかも、途中からチェス部OBの小島慎也さんが指南して下さるようになり、ますます読書時間が増えた）。当時はスキー部の顧問を兼任していたのだが、こちらの合宿は監督責任の関係で、練習を生徒達が滑り始める地点から見ていないといけないうので、山頂で何時間も突っ立ったまま、寒さに耐える必要があった。言うまでもなく、チェス部の合宿とは雲泥の差である。重田先生のお陰で、まったりと過ごせる時間を手に入れることができたのであった。

こうして花火の際に活躍するだけの合宿（しかし、ここ暫くは部員の準備がよく、チャッカマンを持ってくることが多くなった。由々しき事態である）であったのだが、その合宿も長期の中止を余儀なくされる。新型コロナウイルスの蔓延である。

2020年3月に臨時休校が要請され、オンラインによる学習指導が開始されたのが5月。そして、6月から分散登校が始まり、7月に期末試験。通常授業が再開されたのは9月からであった。部活動に関しては顧問が監督することを条件に、夏休みから活動が認められたが、感染症対策として、チェス盤は用いず、スマートフォンのアプリを利用した対局であった。また、部室の利用は荷物の持ち運びのみで、活動は禁じられた（これは現在も続いている）。この体制は2学期も続くが、その後も緊急事態宣言の影響で活動を停止せざるを得ないことがあった（緊急事態宣言下でも部活動が行えるようになったのは2021年7月からであった）。

こうして、少しずつ通常の学校生活が送れるようになり、2022年7月に遂に合宿を行うことが認められた。ただ、麻布らしいと言えらしいのであるが、合宿日数は3泊4日を上限とすることが決められただけで、具体的な感染症対策はそれぞれの部活に任せるというものであった。重田先生と他の部活がどのような形で合宿をするのか情報収集にあたったのだが、困っていたのは他の教員も同様で、結局のところ、皆で相談して以下の形で合宿を行うようにした。

- ① 合宿3日前から検温し、合宿期間中は体温表を顧問に提出する。
- ② 合宿3、4日前にPCR検査を受ける。
- ③ 宿泊部屋は最大人数で割り振らない（今回は5人部屋を2-3人で利用した）。
- ④ 2つの会議室を対局部屋と検討部屋とに分け、22時まで解放する。22時以降は宿泊部屋から出ない。
- ⑤ 対局部屋、検討部屋では常時マスク着用。
- ⑥ 黙食の徹底。テーブルは部屋ごとに分ける。
- ⑦ 浴場は部屋ごとに時間をずらす。

基本的に同部屋でなければ、濃厚接触者にならないように心がけた。これは罹患者が出た場合、合宿を即中止するのではなく、同部屋の部員達を隔離することで、合宿を継続させることを目指したためだ。上記のことを合宿担当の部員に了承してもらい、麻布OBでキャラバンツアーの岡部潤さんに宿泊地を見繕っていただき、志賀高原で合宿が行われることとなった。③、④、⑥や、そもそも宿泊地を自分たちで決められないなど、従来のチェス部からすれば、かなりの制限をかけられた中での合宿であったが、それでも部員達が文句も言わず、こちらの指導に従ってくれたのには、頭が下がる思いであった。

各部屋がボードゲームやら菓子やら、何に使用するのか分からないピコピコハンマーやらで散らかっており、最終日には寝不足でゾンビのような部員がいる、あの懐かしい…と言っていいものか分からないが、あの光景が見られるまで、まだ時間はかかるかもしれない。ただ、いずれは花火の時しか活躍の場がない合宿へと戻ってくれるであろう（チャッカマンの存在が気がりではあるが…）。この状況が一日でも早く終息へ向かうことと、チェス部の今後の発展を祈るばかりである。

チェス部50周年に寄せて

平野 博志（元チェス部顧問）

チェス部創立50周年おめでとうございます。

今年（2022年）が50周年ということは、1972年に創部されたことになります。私は1970年4月～2010年3月まで40年間数学科の教員として勤務しました。私が麻布に勤めて3年目にチェス部はできたわけですね。退職して12年が経ち麻布時代の様々なこと、往時茫茫です。

クラブ活動については、勤めた最初の8月、生物部の合宿が八ヶ岳で行われ、顧問の先生がお年寄りということもあり、若いということで付き添いました。生物部の合宿には、その後20年以上途中抜けたこともありましたが付いていったと思います。

クラブ顧問は1971年から10年余り山岳部の顧問をしました。部員は少なく、合宿には必ずO.B.が来て指導してくれましたので、楽でした。その後、山の経験がある増子先生、野本先生が来てくれるようになり、私は辞めました。その後顧問は20年間程していませんでした（生物部には顧問でなく付き添いましたが）。

ところが、加藤先生が大学の方へ転出することになり、廣瀬先生と2人体制でやっていたチェス部の顧問をチェスはやらなくていいからしてくれとのことで引き受けました。チェスの指導はしなくてよく（チェスのルールもわかりません）合宿についていっただけで、山岳部のように体力は使いませんでしたからもっと楽でした。

チェス部の合宿での思い出はいろいろあります。先ず合宿の始めに亡くなった生徒の黙禱をすることを知り、部員同士の絆を感じました。

あと2、3思い出を書きます。

ひとつは、どこの合宿地でしたか（茫茫としています）、かわいい中学一年生部員（名前は忘れましたが）、お風呂ではしゃいだのか、ころんで頭を打つ怪我をしました。打ちどころが悪かったらと思いひやっとしました。もっと生徒に声をかけて、注意をしなければと感じました。

もうひとつは、どこの合宿でしたか、合宿の終りであと片付けをしているとき枕投げなどして騒いでいた生徒、小林君（これは名前を覚えています）にビンタをくれました。そんなことをなぜ覚えているかといいますと、後に、地域のだったかチェス部のだったか（これも茫茫としています）の保護者会に伺った時、司会をしていたのが小林君のお母さんで、私を紹介するのに、これまで夫婦でもぶつたことなどなかった我がかわいい息子にビンタをくれた先生です、と紹介したのです。びっくりしました。

私事になりますが、私の孫（男の子2人ですが）のうちの1人が現在（2022年）麻布中の2年生です。硬式テニス同好会と卓球部に入っていますが、もし顧問の先生が孫にビンタをくれたら自分はどんな風を感じるのだろうと、わからない状態です。

その後、小林君のお母さんからは、何人かの保護者の方々とワインを飲む会という食事会に廣瀬先生と一緒に何回かお誘いを受け参りました。更に私が退職してから小林君のお父さんが亡くなって、葬儀に伺った際、お父さんも麻布の卒業生だったことがわかりました。縁を感じました。

もうひとつ。

小川洋子さんという作家が麻布のチェス部取材したことがあります。相模湖記念室で部員達と色々話し部室にも案内したように記憶してます。丁度山賀先生がいて写真を取りホームページにも出したのではなかったかしら。これは後に「猫を抱いて象と泳ぐ」という作品になり寄贈され、チェス部の部室にあるはずです。



現在、麻布の数学科の教員の重田さんはチェス部出身です（将棋部でもあったらしい）。これからもチェス部が、部員同士の交流を通じてその奥深さを追求し各人が成長する場になっていくことを祈ります。

¹ 小川洋子著『猫を抱いて象と泳ぐ』（文藝春秋 2009年）

チェス部創部50周年記念に寄せて

廣瀬 武久（元チェス部顧問）

近藤裕康先生が立ち上げた麻布学園チェス部が早くも50周年を迎えたとは感激に堪えません。心からお喜びを申し上げますと共に、記念にこの文章を寄稿します。とは言え、近藤先生が他界されたと彦坂先生から伺った時は本当に驚きました。そこで先ず近藤先生に感謝すると共にご冥福を深くお祈り申し上げます。先生の思い出から入ります。

或る時、「フランスに出掛けて行ってフランス人に日本の書道とはどういうものを教えてやろうと思うのだ。その為には自分に付いてフランスまで一緒に行ってくれる人間が必要だ。通訳だけで良いのだが、Z君などどうかね」と私のクラスの生徒だった者の名前を挙げた。彼はその当時大学生だったが、フランス語とは無縁の男だった。そう私は言って反対したのだが、近藤先生はどう言って納得させたのか、暫くしてからにこにこ笑いながら「一緒に行ってくれるそうさ」「さあフランスに突撃だ」と張り切った様子で拳をつくった手を振り上げて叫んだのです。何とも可愛らしくエネルギッシュに見えたことでした。先生は、文字表記を歴史的仮名遣いであることを提唱していらっしやった。そのことを私は、知り合いの極右の人間から聞いたことがありました。然し歴史的仮名遣いで表記したからと言って右翼の人間と言うわけでもない。たまたま私の知り合いが極右の集団に属していたからそんな風に感じてしまったのかもしれません。²



さて次は小島慎也君について思い出します。或る時相談があると。言う。「チェスで生活を成り立たせていきたいがどうでしょう」と言うものだった。その時は進学と進路のことで苦しんでいるのだなと私は想像し、チェスを職業として希望を持って、現在の日本ではチェスの世界で職を得ることは至難の業だと言い、私はその時彼がチェスで生きようとするのを押し留めたのです。ところが後で知ったのですが小島君は狭い日本でのチェスなどは考えていなかったのです。チェスの高段者と呼ばれる「グランドマスター」の称号を日本人として初めて獲得しようとして決意していたのです。見ている視線は世界だったのです。世界だったら食っていけると見越していたのだと思います。

² 写真は近藤裕康先生編著『国語国字今昔争論』（近藤裕康・朝日新聞社書籍制作支援システム 2018年）。
〔池澤和人氏提供〕

チェス日本一を目指す
東京・麻布中3年
南條 遼介君 15



「チェスには新しい発見が無限にある」と魅力を語る南條君

米で腕磨いた「日本代表」

世界でも腕技人口が多いといわれるチェス。将棋や囲碁の人気が押され気味の日本にも、将棋が楽しみな逸材がいる。



昨年、スロベニアで開かれたチェスオリンピックスに史上最年少の日本

代表として出場。世界の強豪と互角に戦い、四勝五敗の成績を収めた。

「勝つという気持ちが強」と目下、家族で米コネチカット州に住んでいた六歳の誕生日に、チェス盤と駒を買ってもらった。現地の小学校のチェスクラブで対戦を重ねるも、腕を上げ、小学四年の時、日本代表候補の大会を六戦全勝制した。

「まずは日本チャンピオン」といつかの目標。六年間の米国生活から帰国後、二

〇〇二年のジャパンオープンで優勝、チェス日本一を決める今年の全日本選手権でも三十四人中五位の好成績だった。国内大会での快進撃は、目標達成は遠くないという声も上がる。その先に狙うのは日本人初の世界王者への道だ。

「でも、妹の時織さん(13)に勝負を挑まれると、つい手加減してしまう。」「ボロボロになるのはかわいそうだから。はじめて口づいて心優しいお兄ちゃんの手加減がぞいいた。



チェスの最年少
全日本チャンピオン

小島 慎也さん

た第38回全日本チェス選オになつたからだと、中手権で優勝し、従来の最年少優勝記録の19歳を大幅のチェスソフトで驚き更新した。麻布高校 入部したと聞。

多くの外国人と知り合えるのが楽しい

チェスの世界王者、ボビーフィッシャー氏が日本からオーストラリアに出国した後、「日本のボビー」が誕生した。5月の連休、東京で行われ

13戦で7勝6引き分けと、毎日がはねになった。無敵。一気に締まる攻め。また、同じチェス部の同級生、南條遼介さん(16)は3位、直接対決は引き分けだった。



神奈川県生まれ。趣味は読書。麻布中学入学後、チェスに熱中。好きな学科は物理。

でもプレーしている、ラッシュは上。負けなかつた」と話す。将棋はやらない。「チェスは日本ではマイナーだけど、海外ではメジャー。多くの外国人と知り合えるのが楽しい」

チェスの高段者の目標となる「グランドマスター」は、世界にさつと100人。ながいまた日本人はいない。日本人初のグランドマスターが世間の目標だ。文・田嶋徳弘 写真・尾崎幸裕

次は小島君と同様にチェス部を牽引してくれた南條遼介君の思い出です。南條君は、中学3年の時と高校1年の時に海外遠征をしています。スロベニアとスペインだったと記憶していますが国名が定かではありません。間違いかもしれません。中3時の記事が読売新聞に載っているので添付します。高1時は私と平野先生とで教員間を廻ってカンパを募りました。麻布の教員の何と優しいことでしょう。

南條達介君へ
 此度は海外遠征、誠に
 お目出とうございませう。
 つきましては、ここに麻布の
 教員から、貴君への壮行の
 気持を込めてほんの些少
 ではありますが、心ばかりの
 ものを送りたいと思います。
 カシハ者氏名

一 天野 崇 参所内
 一 杉山 雅彦 式所内
 一 袖崎 俊敬 参所内
 一 滝口 正晴 式所内
 一 鳥越 泰考 式所内
 一 平野 博志 伍所内
 一 廣瀬 武久 伍所内
 一 松田 隆 伍所内
 一 南 孝信 式所内
 一 諸橋 万里 式所内
 以上

ご健闘を祈り申
 上げます。
 平成十六年十月十二日
 代表 廣瀬武久
 平野博志

まだまだチェス部での思い出は沢山あります。夏合宿中川に入って蛭に食われ、血が止まらなくなった吉田君とか、名前は失念したが、合宿中に食事で魚の骨が喉につかえて病院まで送り迎えした生徒とか思い出したら限りありません。兎に角部員が元気でいてくれることが何よりです。50周年とは凄い。

五十年という歲月

加藤 史朗（元チェス部顧問 1975-1998）

チェス部創立50周年おめでとうございます。「人間五十年下天の内をくらぶれば、夢幻の如くなり」とはご存じ幸若舞「敦盛」の一節。それは人生の儚さを謡うが、「チェス部五十年」となれば歴史の重みをもつ道標であり、軽々に「夢か幻」だと言い放つことなどできない。半世紀の歴史の中に数百人に及ぶ人びとの息吹が詰まっているからだ。私が顧問を務めた23年を振り返ってみても多彩な部員たちの相貌が走馬灯のように脳裏をよぎり、懐かしさが溢れ出て收拾がつかなくなってしまう。とくに色濃く見えるのは逝きし人びとの面影である。初めは1993年春、中3の終わりに不慮の死により「永久チェス部員」となった斎藤孝祐君である。部員たちと一緒に大田区北千束の斎藤君宅を弔問したが、彼の遺影とともに悲しみに打ちひしがれたご両親のお姿が臉の奥から消え去ったことはない。1995年の夏、前年に卒業したばかりの毛塚雄介君、同年10月28日に1987年卒の石塚靖貴君、2000年5月11日に1990年卒の毛塚浩之君、2016年11月に1986年卒の小林中君と相次いで五人のチェス部員が彼岸の人となった。さらにチェス部創立50周年を迎えた2022年8月初代顧問の近藤祐康先生が他界され、同年11月には1968年に麻布高校を卒業後チェス全日本チャンピオンとなった権田源太郎さんが亡くなられた。権田さんは高校在学中に10人余の同級生とチェスサークル（顧問は数学科の大澤敏行先生）を結成されたという。この場を借りて衷心より物故された方々のご冥福をお祈りしたい。

私は1971年4月に紛争渦中の麻布学園社会科の非常勤講師となった。採用時の麻布学園理事長・校長代行はかの山内一郎氏。山内氏は早稲田大学政経学部の先輩であるばかりか、同学部でロシア語を習った佐藤勇先生と日ソ交流協会の理事長・副理事長の間柄であった。代行からは専任で採用すると言われたが、当時の私は大学院に進みロシア史を研究したいと考えていたので、非常勤講師での採用をお願いした。それまで非常勤講師だった近藤祐康先生は、同年専任教諭となられ、チェス部創立の種が蒔かれたのであった。1972年に担任された中学1年5組の生徒たちに先生は「この学校では自由にクラブをつくることができる」と話された。するとたちまち小林正純君らがチェス部を設立し、初代顧問を近藤先生にお願いした。1975年に私も麻布の専任教諭となり、夏合宿を機に近藤先生からチェス部顧問就任を懇請されたのであった。学園紛争の混乱がやっと収まり、学園が平常へと戻り始めたころである。紛争の渦中で大変なご苦勞をなさった近藤先生の依頼をお断りすることは出来なかった。このように私とチェス部との関わりは、その第一歩からまさに受動的なものであった。それはその後もチェス部と私の関係の基本となった。私はチェスを学ばず、「見ているだけ」の横着な顧問であり続けたのである

しかし例外的に私が積極的にチェス部員と行動を共にしたことが二度ほどあった。いずれも1994年、ソ連崩壊（1991）後間もないロシアに関連した出来事。一つは「チェスは世界語」をキャッチフレーズにロシア大使館との親善試合を実現したことである。あらましを当

時の『麻布PTA』に寄稿したのでご覧いただきたい。当時私は「麻布にいると世界が見える」と題して麻布界限の大使館見学を学年行事として企画したが、その一環として中学1年生を引率しソ連大使館を訪ね、後に札幌総領事を務めたシェフチューク氏や昨年秋まで駐日大使を務めたガルージン氏（現在本国に戻り外務次官）からペレストロイカに関する話を聞いた。シェフチューク氏はその後、三度にわたり麻布学園で講演もしてくれた。もう一つは、1994年に卒業したばかりの松尾朋彦君と高2の中村龍二君が参加した同年末のモスクワ・チェスオリンピックに同道したことである。いずれにしろ、コロナ禍とロシア禍の下で世界が分断され、現在の冷え込んだ日露関係からは想像もできない友好的な雰囲気の下で行われたイベントであった。

1994年(平成6年)3月18日

麻布PTA

チェスは世界語

第一回露麻(ローマ)戦記

加藤史朗
(社会)



二月二十六日(土)放課後、相模湖記念室でロシア大使館チェス部と本校チェス部の親善試合が行われた。

ロシア代表は、シネーリニコフ氏を筆頭に大人五人、同氏のお嬢さん二人を含め少年・少女七人の総勢十二人であった。つたないロシア語で歓迎の辞を述べた。「チェスは、世界語です。この世界語で今日は語りあげよう」と。ラヴレンチェフ氏が兄事な日本語で挨拶され、部長の中村龍二君(高一)にチェスの本と海洋写真集を贈呈して下さった。扉には「ロシア大使館チェス部より心をこめて」と日本語で書いてあった。「心」という文字がこころなしか「愛」とも読めた。親善試合に勝ち負けは、野暮かもしれない。だが、チェス王国ロシアと麻布チ

エス部の実力のほどを示す結果はぜひ報告しておきたい。大人との対戦は五戦全敗、少年・少女との対戦は七戦全勝であった。

ソ連時代との決定的な差異は、大人たちが、少年・少女を日本に溶けこませようとしている点だ。今までのないことであるが、三河台中学校や麻布小学校に通っている子供たちもいた。我がチェス部の連中も、にわか学習のロシア語や英語をしゃべっていたが、ロシアの子供たちの日本語は、舌を巻くうまさだった。私がロシア語で演説しようとして緊張しているのに、おしゃべりをやめないロシアの少年たちもいた。「おい、ちょっと静かにしろ」と麻布生に対するように日本語で注意してしまった。自分の名札にブルース・リーと書く

剽軽な少年もいた。彼らは、負けたのが、よほど悔しかったのか「今度はサツカーで勝負だ!」と言っていた。チェスが世界語であるだけではなく、若者文化が世界的なのだとも痛感した。

ロシア大使館と麻布との交流の歩みは、かれこれ六六年余になる。これまで何度か大使館見学を行ったり、一等書記官のシェフチューク氏が三度も麻布に来て講演して下さった。そんな縁で、かねてからチェス王国ロシアの胸を借りたいと何度も申し入れていたのだが、諸事情で実現の機会に恵まれなかった。たまたま今年一月、大使館で行われた新年会に出た。シェフチューク氏は既に帰国されていて会えなかったが、思いがけず旧知の人物に出会った。最初に大使館訪問をした時、二等書記官として我々に応対してくれたフアブリチニコフ氏である。氏の口添えて大使館付属のロシア人学校校長夫妻を紹介してもらい、親善試合を申し入れ、長年の夢が実現した。ロシアの変化の悲しい面ばかりが報道される中で、その喜ばしい一面を麻布において体験でき、幸せな一日であった。生徒たちにとっても等身大の国際交流であったと思っている。

1995年6月14日付で当時のロシア大使ルドヴィグ・A・チジヨフ氏から麻布学園宛にチェス親善試合などに関して丁寧な礼状が届いた。同氏は1960年以来書記官・参事官として駐日ソ連大使館に勤務。1990年8月駐日大使となり、翌年12月にソ連が崩壊するとロシア大使として1996年9月まで在任。この間、麻布生の数度にわたる大使館訪問やシェフチューク氏の麻布における講演などで大変お世話になった。ネット情報によれば、同氏は本年1月1日に86歳の天寿を全うされたという。ここに謹んで哀悼の意を表します。



1994年12月1日オリンピック会場に現れた世界チャンピオンのガルリ・カスパロフ
(早くからプーチン体制を批判し、ロシアのウクライナ侵攻を警告した。現在アメリカ在住)



ホテル「コスモス」でコーチと棋譜を検討する松尾君と中村君 右端は東大の渡辺暁さん
なお中村龍二さんによればコーチのアレクサンドル・ルイセンコさんは「ルイセンコ論争」
で有名なトロフィム・ルイセンコの甥だという。ちなみに紛争後の麻布学園で理事長を務め
られた植物遺伝学の権威、木原均博士は京都大学教授時代にルイセンコ学説のイデオロギー
性と非科学性を批判された。



物理学者コンスタンチン・ヴォリャーク博士の家を訪ねる 1994.12.04
左から娘ヴェーラ、コースチャ、中村君、奥さんのターニャ、松尾君、手前は息子のペーチャ

大会期間中の12月4日コンスタンチン・ヴォリャーク氏の家でおもてなしをうけた。彼とは私が1988年モスクワ大学夏期語学セミナーに参加するために成田から乗り込んだエアロフロートの機内で隣り合わせたのが縁で意気投合、一か月半のモスクワ滞在中に二度も自宅に呼んでご馳走してくれた。1996年夏、国語科の安東守仁先生と一緒にロシアを旅行した際にもお世話になった。しかし2002年一年間のロシア研修の機会が与えられ再会を楽しみにしていた矢先の2001年2月、ターニャからコースチャが心臓麻痺で急逝したという思いもよらぬ訃報が届いた。55歳という若さであった。専門を同じくする物理学者のターニャは私と同年である。今も科学アカデミー専門学術誌の責任編集者として孤軍奮闘している。

傲慢にも「チェスには関心がないが、チェス部員には興味がある」と公言して長年チェス部顧問を続けてきた私だが、いま自らその功罪を振り返ると「罪」の意識に囚われることが多い。「永久チェス部員」の斎藤幸祐君など幽冥境を分かťことになった元チェス部員たちや今後とも再会は叶わないであろう旧縁の人びとについて、「チェス」を知らずして思いを深くめぐらすことは不可能だと思うからだ。ここにチェス部50周年の祝辞とともにチェス部ゆかりの皆さんに平身低頭お詫びいたします。

1998年9月私は非常識にも学期途中で麻布学園を辞め、愛知県立大学に転職した。すでに前年から顧問を引き受け下さっていた広瀬武久先生、転職が決まり急遽顧問就任を懇請した私を非難することなく申し出を快諾して下さった平野博志先生のお二人に末筆ながら改めて御礼を申し上げます。

我儘ばかりの顧問で誠に相済みませんでした。それにしてもチェス部が50年も続くなんて奇跡です。チェス部と様々なご縁で結びついた一人一人に敬意を表します。チェス部のさらなる発展と皆様のご多幸を陰ながら祈念しております。ありがとうございました。

2023年1月10日 北海道岩内町にて



若い時もありました（1978年12月伊豆河津で冬合宿 中1の郷範行君とお揃いのベストで）



まだまだ若かった（1987年4月戸隠で春合宿 中2の伊藤哲也君と戸隠山を背景に）

二人の恩人を偲ぶ

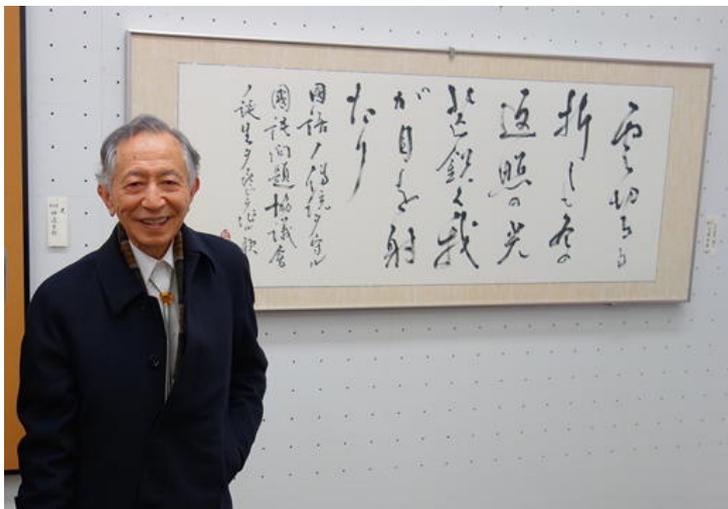
「巻頭言」にも記した通り、チェス部は設立50周年のその年（2022年）に二人の恩人を失った。一人は部の発足に際し初代顧問を引き受けて下さった近藤祐康先生であり、もう一人は麻布学園の先輩にして部の設立当時から近年に至るまで日本のチェス界の第一人者であられた権田源太郎氏である。ここでは、お二人に接した者による回想を掲載し、在りし日のお二人を偲ぶこととする。

近藤祐康先生（1931.12.11 - 2022.08.25）

麻布学園には1960年4月から週2回勤務の講師（書道担当）として勤務し、1971年4月に専任教員（1973年に国語科→芸術科）となられて、1995年3月まで四半世紀を麻布学園にて過ごされた。

1972年度に先生が担任されていた中学1年5組がチェス部の母体であり、先生が初代顧問を引き受けて下さったことでサークルの体裁を樹立できたことにより、その後の文化祭参加や部室獲得の実現につながった。折しも麻布学園を揺り動かした学園紛争の真っ只中であつての先生のご苦勞は『麻布学園チェス部設立三十周年記念誌』（2022年11月発行）の中にご自身の言葉で綴られている。

なお、先生は書道一元會³で要職を務められると共に数次にわたる個展を含む各種書画展に出展される書画家であられたほか、国語問題協議會⁴ほかの活動に参画されて国語分野でも活発に発言⁵しておられた。⁶



³ <http://shodoichigenkai.com/>

⁴ <http://kokugomondaikyo.sakura.ne.jp/>

⁵ 廣瀬武久先生のご寄稿参照。

⁶ 写真は在りし日の近藤祐康先生とのお墓。墓碑銘はご自身の揮毫で王守仁（王陽明）『山中示諸生』より「心共閑（こころともにしずかなり）」。「池澤和人氏提供」

近藤祐康先生の思い出

小林 正純（1978年卒）

近藤祐康先生は、私の中1時代のクラス担任であり、私が発起人となって活動を始めたチェス部（発足当初は「チェス・チェッカー同好会」）の顧問にもなって頂きました。先生ご自身はチェスをなさるわけではなかったのですが、顧問を引き受けていただいたのには、クラス担任という以外に、もう一つ理由がありました。

二学期が始まってしばらくした頃、おそらく誰かが「部活に入るべきか否か」というような質問をしたからだと思いますが、「自分がやりたいと思うことが大事なことであり、そういう部、同好会があれば入ればよい。やりたいことはあるが、それをやっている部、同好会がなければ自分で作って始めてもよい」という趣旨のお話をされました。

この話に触発された形でチェス部の前身であるチェス・チェッカー同好会の活動を開始し、その運営について近藤先生に相談し、顧問をお願いしたという経緯です。

近藤先生は、麻布では書道を指導されていましたが、その特徴はまずほめ上手であること、そして生徒の主体性を尊重してくださること、この二点が特徴でした。生徒の作品を見て「良く書けているねえ」、「このところは特に素晴らしいねえ」と褒めちぎって、「ここを直せ」というようなことを仰ったのは記憶にないくらいです。また夏休みの課題として「何でもよいから作品を一つ出しなさい」といわれて魚拓を提出したときも、「いい拓本だねえ」と認めてくださったのを覚えています。

近藤先生は書だけでなく水墨画もお描きになり、卒業後も個展のご案内を頂いて何度か見に行きました。その中で、山に挟まれた谷の部分が真っ白の絵が目にとまり、「この真っ白の部分は氷河ですか」と質問をしたところ、「わざと描かないで省略することで、観る人に想像してもらう技法」を使ってみた作品であることを説明して下さり、「そうか、小林はここに氷河を見たか」と楽しそうに笑っていらっしゃいました。

非常識で突拍子もない行動の多い自分を肯定的に、温かく見守ってくださった近藤先生に人一倍お世話になった教え子の一人として感謝するとともに、先生自ら浅からぬかわりをお持ちいただいたチェス部の50年目の昨年にご逝去されたと伺い、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

近藤祐康先生の教え

安藤 信之（1978年卒）

近藤祐康先生からは、いくつかの大きな「教え」を賜りました。先生の薫陶を示すエピソードを三つご紹介して、先生を偲ぶよすがとしたいと思います。

まず、「悪事は必ず露見する」という教えです。先生に担任をしていただいていた中学1年生の頃は学園紛争末期にあたり、入学式が混乱したり全校集会が開かれて授業がなくなったりと大変な時期で、放課後ならずとも教室ががらんとしていることが少なくなかったのですが、そんな中、ノンポリな私はよく黒板にチョークででかでかと落書きを記すという悪戯を行っていました。何と書いていたかは恥ずかしくてとてもここに書けないのですが、ある日のホームルーム(?)で先生は生徒たちを前に「私は字を見れば誰が書いたかすぐわかる。心当たりがある者は落書きをやめるように」と諭すようにおっしゃったのです。先生が「字」の専門家であることを忘れていた中坊の私は震え上がり、以後落書きを止めたことは言うまでもありません。その後数十年を経て企業人となった私が法務・コンプライアンスの専門家となり、最後は監査役を務めることになった原点には、もしかすると自分自身を反面教師とするこの体験が横たわっていたかもしれません。

次は、「慈愛の目を持って叱る」という教えです。日頃温和でありながら激情家の一面も持ち合わせておられた先生は、時折教員室の端の方で生徒を叱責しながら「チクショウ！」（違う言葉だったかな?）と叫んでご自身も目を真っ赤にしておられました。私自身は直接このような叱られ方をしたことはなかったのですが、それでもこうした場面に遭遇した体験が私の中に残した強烈な印象は、その後職場で部下を持つようになってからの私を「パロマ安藤」（瞬間湯沸かし器、の意）と異名をとる上司にしてしまっていました。ただ、さすがに40代に差しかかる頃になると「これはイカン。先生の教えを間違えて受け止めているに違いない」と自制の心が生まれ、おかげで「パワハラ安藤」と指弾される一歩手前で踏みとどまることができたのですが、考えてみると「チクショウ！」は生徒にではなくご自身に対して向けられたものだったのかもしれないし、そもそも先生の赤い目の中には生徒に対する慈愛の気持ちが溢れていたのに、そこに気づくのに時間がかかり過ぎていたのです。

最後は、私の生涯の趣味となった登山への道を開いて下さったことです。ここでは、最初に先生が我々を連れ出して下さった奥多摩ハイキングの模様を先生の文章で紹介します。

「昭和四十八年七月、学園理事会は学園財政の都合により学費の値上げを発表したことから紛争はまたまた再燃。〔中略〕学校は七月十六日（月）より臨時休校とし、一学期期末テストは二学期はじめの九月四日（火）から八日（土）に延期となる。チェス部は臨時休校第一日目の七月十六日（月）部員の懇親、結束を目的に日原鍾乳洞行きを決行。参加者二十一名。洞窟内散策と附近の溪谷での石投げ堰止めのうち興じた。この少年達は本来、学園紛争

には関係の無い人々であった。しかし、紛争と真っ向からぶつかって行った。そうして、その中で遊び心も忘れなかった。」（『麻布学園チェス部設立三十周年記念誌』より抜粋）

この日原鍾乳洞行きのことは、今でも鮮明に覚えています。そしてこれが遠い原体験となり、社会人になってから本格的に登山に取り組み始めた私は、この20年ほど国内外でのアルパインクライミングを自分の主たるフィールドとするようになりました。



左：2度目の奥多摩ハイキング（左から2人目が近藤先生・右端は筆者） / 右：40年後の筆者

ひとつの趣味に生涯をかけて取り組み続けられるというのは幸福なことであり、おそらく幸運なことでもあります。この記念誌の読者のうちの何人かにとってそれはチェスであるはずですが、私の場合は登山でした。しかし、還暦を越えて体力と判断力の衰えを自覚するようになってきた昨今の私は、リスクの高いクライミングから身を引いて、ほのぼのと山野の風情を楽しむハイキングの世界へと回帰する日が遠くないことを予感しています。そしていつの日にかきっと、近藤先生に引率していただいたあの時のことを思い出しながら、とことと電車とバスを乗り継いで日原鍾乳洞を訪れることになるだろうと思っています。

恩師近藤祐康先生から頂いたお手紙

山岡 和純（1978年卒）

近藤先生は、チェス部の顧問でいらっしゃる前に、私が麻布中学に入学した時のクラス（M1-5）担任でした。10歳の時に家業が破綻、両親が離婚し、母親に引き取られ育てられた私は、母子家庭の経済力に見合う第一志望の国立大学付属中に力及ばず不合格。麻布は前年に、中学校では史上初のロックアウトで生徒を締め出し、大荒れの学園紛争の真只中。ヘルメット姿の高校生のアジ演説で騒然とする中での入学式は、つい数日前まで小学生だった自分には、別世界の強烈な印象を残しました。

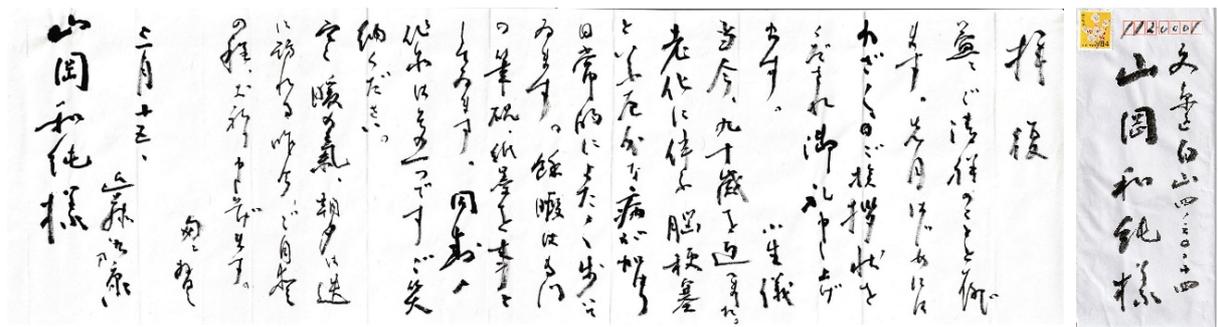
私の記憶では前年に、近藤先生は紛争時の暴動に巻き込まれ、お怪我をなさったと伺いました。それでも一番神経を使うであろう新入生の担任を引き受けられて、教え子とその家

族に不安を生じさせないように腐心なされていたお姿が今でも目に焼き付いています。親の離婚や学園紛争は、大人になっても多少のことでは驚かない凶太さを身につける経験になると、むしろポジティブに捉える術を教わった気がします。

私は麻布高校卒業後、近藤先生と毎年欠かさず年賀状のやり取りを続け、先生からはいつも達筆の賀状を拝領し、私からは家族の写真で近況をお知らせしてきました。去年は初めて年賀状を出すのが遅れて、2月に「余寒お見舞い」の葉書をお送りしましたところ、3月に近藤先生からお返事を賜りました。その封書に同封されておりましたが「源遠流長」の揮毫です。この言葉は、歴史の悠久なさまを表しますが、私には「お前も随分遠くまで来たが、まだまだ先は長いぞ」という先生からの叱咤激励の言葉に感じました。



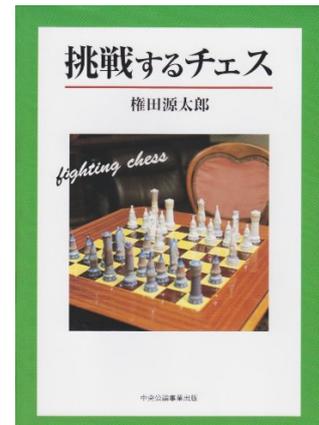
和紙の巻紙に筆を走らせたお手紙からは、脑梗塞とのご闘病の中で書を嗜んでいらっしやるご様子が伺えました。とても卒寿を超えた方の筆とは思えない文字の勢いを拝見して、まだまだお元気で目に掛れるものと信じて疑わなかっただけに、悲報は青天の霹靂でした。私達のことをいつも温かく見守ってくださり、お心を寄せてくださいました恩師の近藤先生に、言葉に尽くせない感謝の気持ちをお届け申し上げる機会を逸したことが、本当に悔やまれます。



権田源太郎氏 (1950.02.06 - 2022.11.10)

麻布学園及び慶應義塾大学卒業。1972年以来通算12回の全日本チェスチャンピオン（戦績は本誌の資料編「日本チェス協会主催公式戦記録（優勝者）」を参照）。権田金属工業（株）社長として多忙な日々を送りながらも、近年に至るまで日本のチェス界のレジェンドとして各種棋戦に参加し好成績を維持し続け、さらにチェス入門書の執筆もこなしてこられた。

麻布学園チェス部との関わりは、日本チェス協会を通じてご縁を頂戴し、1974年5月の文化祭にお越しいたいで5面指しの同時対局を行っていただいたところから始まる。なお、氏の在学中にも短期間ながら麻布学園にチェスサークルが存在した由。



CHESST通信 1751-1766
 JCA 機関紙 2012.03.25
 日本チェス協会事業部
 〒144-0051 大田区西蒲田 7-7-7-504
 E-mail info@jca-chess.com
 HP http://www.jca-chess.com
 編集・発行 渡井美代子・羽野忍

CHESST通信

全日本チェス百傑戦

羽生善治六段が優勝

3月17・18日、大田区民センター。参加者48名、1日コース8名。スイス式6回戦(60分+30秒/手)。

将棋の羽生二冠、羽生善治六段が久しぶりに出場。羽生六段は1998年と2004年に百傑戦に参加して2回の優勝を飾った。参加選手トップの羽生六段のレーティング2484から860までの45名とUR3名。レーティング1600以上の選手が35名でレベルの高い大会となった。

左より古谷初段、権田八段、南條五段、
羽生六段、小島六段、外尾初段

日本チェス協会機関紙『CHESST通信』p.1751 (2012年3月25日) より抜粋。
 左から二人目が権田源太郎氏。なお羽生善治氏の「六段」は将棋の段位ではなくJCA段位。

偉大なる先輩、権田源太郎さんを偲ぶ

吉田 哲郎 (1983年卒)

私の中1でチェス部に入りチェスを始めた1977年、権田さんは日本チャンピオンを何連覇かされていた雲の上の憧れの方でした。先輩方より、権田さんは麻布のOBで少し前にも文化祭にもいらしたとうかがい、急に親近感と誇らしさを覚えた記憶があります。初めてお目にかかったのは先輩について青山のアジア会館でのチェス協会の公式戦に参加した時だと思

いますが、声をかけていただき非常に緊張しつつも嬉しかったことを覚えています。その後、中3でジュニア選手権で優勝するなどして親しくお話させていただくようになりました。添付はその頃の写真ですが、個性の強いプレーヤーが多かった中で権田さんは誰に対しても優しく、笑顔を絶やさず感想戦をされていたのが目に浮かびます。公式戦でも数回当たる機会があり、殆ど歯が立ちませんでした。一度だけ高2の百傑戦だったか比較的大きな大会で権田さんの非常に珍しい見落としで一手メイトで勝ちを拾わせていただきました。信じられない気持ちで、何やら申し訳ない気もしましたが、嬉しかったので、しっかりチェス部の部報にその時の棋譜を載せてしまったのをはつきり覚えています。



チェス通信No.15（1980年5-6月号）P.329より 右端が権田さん、左端が筆者。

私は大学院に進む頃にはチェスからすっかり離れてしまいましたが、1992年にチェス部20年史をまとめる際に、思い立って図々しくもご寄稿をお願いしたところ、ご快諾いただき後輩への温かいメッセージをいただき感激致しました。それから30年、今回50年記念史をまとめるにあたり、もう一度ご寄稿をお願いしようと思っていたところに今回の訃報に接し、愕然と致しました。今回改めて日本チェス界の記録をまとめる過程で、つい数年前の大会上位者のお名前に60歳を過ぎた権田さんのお名前を発見し、改めて日本チェス界のレジェンドでいらしたと認識を新たに致しました。

私もそうですが社会人になって様々な理由でチェスから離れてしまうOBが多い中で、社長業の激務の中、半世紀に渡ってトッププレーヤーとして活躍された権田さんの日本チェス界に対する貢献は測り知れないものがあります。我々は偉大な先輩をもったことを幸せに思います。安らかに眠りいただき、天国でも国内外のプレーヤーとチェスを存分にお楽しみ下さい。

あの頃のチェス部 一部員の回想で綴る五十年の歩み

チェス部の歴史は過去の記念誌（20周年・25周年・30周年）の中で振り返りとその後の加筆が行われているが、今回、50年間のそれぞれの場面で部の歩みに立ち会った歴代部員による分担執筆のかたちで、あらためて50年全体を通観することとした。編年体の史書に求められる一貫した記述指針はあえて立てず、執筆者それぞれが見ていた風景をそれぞれの感性で叙述しているので、まとまりのなさは否めないが、むしろその多様性を楽しんでいただければ幸いである。

なお、歴史を記述することの宿命として文中に事実誤認や解釈の相違が含まれる可能性を否定できない。そうした点があれば指摘いただき、第2版・第3版……と改訂を重ねて内容の精度を高めてゆくこととしたい。

チェス部黎明期

安藤 信之（1978年卒）

麻布学園チェス部の設立学年に属し、2代目部長を務めた安藤です。「あの頃のチェス部」の冒頭にあたり、チェス部が生まれた頃を振り返るパートを担当します。

もともと、この時代のことは大和田哲生（1978年卒）・吉田哲郎（1983年卒）・佐野喜彦（1990年卒）の3氏による力作『二十年のあゆみ 麻布学園チェス部設立二十周年記念誌』に掲載された「試論 麻布学園チェス部の歩み」の中に詳細に記されていますので、ここではその中から私自身が直接関わっていた1972～1976年頃の歴史を叙述する部分をダイジェストして紹介すると共に、そこに私事も交えた若干の加筆を試みたいと思います。

1. チェス部誕生（1972）

麻布学園チェス部は、1972年10月に中学1年5組（M1-5）のメンバーをかき集める形で「麻布チェス・チェッカー同好会」として始まりました。その中心にいたのは同クラスの一員であり不思議な牽引力を備えていた小林正純君で、クラス担任だった近藤祐康先生に顧問を引き受けていただいたの発足です。なぜチェスだったのかというと、小林君の言によれば当時囲碁部が全国大会で団体優勝したニュースを見て「麻布でチェス部をつくれれば囲碁部のように日本一になれるかも」と考えたことがきっかけだったそうです⁷。さらに『二十年のあゆみ』に掲載されている近藤先生のご寄稿の中に書かれているとおり、先生がクラスのメンバーに対して「諸君の何人かが集まればこの学校では自由にクラブをつくることができる」と語りかけられたことも、この考えを後押ししたようです。

⁷ そのような崇高な目標があったとは、本稿執筆のために小林君に教えてもらうまで知りませんでした。

書道とハイキングをこよなく愛される近藤先生に西洋将棋の同好会の顧問が似合っていたとは思えませんが、しかし今にして思えば、この先生のご発言の「自由に」という言葉の背景には私たち設立年代が入学した年まで続いていた学園紛争の余波の中での先生ご自身の苦悩が隠されていたように思います。ともあれ、こうして顧問就任を快諾された近藤先生のお導きを受けながら、その後半世紀にわたり続くことになるチェス部の歴史が始まったのでした。

2. 同好会としての枠組み (1973)

M1-5のメンバーを基盤に始まったチェス部の歴史は、設立後半年で行われたクラス替えでクラスの枠組みを取り払い、さらに5月の文化祭での展示⁸を通じて後輩を獲得することによって学年の枠組みも越えることになりました。つまり、M1-5というクラスのサブセットに過ぎなかったこの集まりが、自立した同好会としての人格を持ち始めたということです。

この文化祭の参加に伴う後輩の加入と同年のサークル連合加入による活動費及び部室の獲得はチェス部に永続性の希望を与えるものでしたが、そうは言っても当事者たちの意識は「同好会」のまま。つまり、その時点で組織としての未来展望を持っているわけではなく、趣味を同じくする者同士が集まってその趣味に興じることができればOKという状態です。

したがって、大枠としてのチェスは共通言語としつつ、そこに象棋（シャンチー）も入れれば野球も入り、時には近藤祐康先生に率いていただいてハイキング⁹にも赴くという次第。組織としての器はできたものの、まだ模索の時期だったと言えるでしょう。それもそのはず、設立年代はまだ中学2年生です。



3. チェスへのフォーカス (1974)

「麻布チェスクラブ」という名称を採用し、チェッカーや象棋を冠から外して純粋にチェスを行うサークルであると宣言したのは1974年4月のことだと記録されていますが、その少し前に、当時日本チェス協会（JCA）の会長代行だった松本康司氏が書いた『図解チェス入門』の巻末に記載されていた著者の住所に小林君が手紙を出したところ、青山のアジア会館で開催されるJCA主催試合の案内をもらったことから同年3月に小林君、大和田君、そして私がJCA主催の試合に初めて参加しました。その影響は計り知れないもので、冒頭に紹介した『二十年のあゆみ』には「棋譜をつけること、チェスクロックを使用すること、大会の運

⁸ この文化祭のときにあてがわれていたスペース（1教室の3分の1）が同じ年の11月にチェス部最初の部室となり、そこで毎日のようにラジカセから流れていたKing Crimsonの音楽に感化されたことが、今日まで続く私のプログレ愛の原点となりました。おそらく私以外のメンバーの何人かも、この1-2年の中で触れたものがその後の一生の方向性を決めたという体験をしているのではないかと思います。

⁹ 写真は奥多摩ハイキングの様様。中央で腰に手を当てているのは近藤祐康先生。

営方式を知ること、レイティングの存在を知ることなど（中略）当時としては文明開花を感じるものがあった」と記されています。

また、松本氏から慶應義塾大学の米田俊彦氏¹⁰を紹介され、さらに米田氏から紹介を受けたのが麻布学園OBであり慶應OBでもあった当時日本チャンピオンの権田源太郎氏です。かくして1974年5月のチェス部にとっては2回目の文化祭に権田氏をお招きして同時対局（5面）をしていただいたことも、この年の大きなトピックです。



11

さらに1974年11月に同期の喜多見淳一君と私の2名で立教大学の文化祭に赴き、そこで展示を行っていた立教大学チェスキャスルクラブのメンバーを相手に善戦したことで、自分たちの力量を内輪の競い合いではなく客観的に評価する機会としての対外試合の重要性を再認識するに至ります。この「道場破り」は、当時さまざまなイベントを紹介していた雑誌『月刊ぴあ』の文化祭情報をチェックして乗り込んだものだったと思いますが、自分たちの腕を試してみたいという機運が高まっていたことのあらわれです。

このようにして、チェス部のメンバーたちは従来の同好会の枠を飛び越えて「外の世界」との接点を持つようになっていきました。

とはいえ我々が一人前のチェスプレイヤーになるためには、力量の面でも意識の面でも、まだまだ越えなければならないハードルがいくつもありました。たとえば定跡ひとつとっても、東公平氏の入門書で学び一応は必要最低限のレベルのオープニングをこなせるようにしてはいたものの、1974年秋から始まったテレビアニメ『宇宙戦艦ヤマト』が部内でも話題になったときには左右どちらかのルークを3段目に浮かせてからクイーンの前に転回して「波動砲定跡」などと呼んで



¹⁰ その頃（1973年）「日本学生チェス連盟」を結成する機運が生じ、米田俊彦氏はその理事長に就任していた模様。設立時加盟校は立教大学、慶應義塾大学、青山学院大学、東京学芸大学、名古屋大学、同志社大学の6校。

¹¹ 写真は1974年5月の文化祭の展示の様子。

ウケていたのですから、そのいい加減さは推して知るべし。当然この定跡(?)は、いたずらに相手からの攻撃対象を作るだけで勝率には寄与しませんでした。

4. 幼年期の終わりの始まり (1975)

設立年代が高校生になった1975年の夏、長野県上松の寝覚めの床で初めての合宿が行われました。父上の海外赴任のために麻布学園を一時休学した小林君の後を継いで2代目の部長になっていた私にとってはまったく手探りのイベントであり、一方、この年から近藤先生に変わって顧問を引き受けられた加藤先生にとってもチェス部のメンバーとの初めての本格的な共同生活でした。このときの模様は『二十年のあゆみ』に寄稿された加藤先生の「チェスの出来ない顧問として」の中に具体的に記されています。

「チェス部最初の合宿は、それはそれはひどいものであった。犬玉こと安藤が部長だったが、まるで子犬のように、柴柳と戯れている。自由時間になると松永は近くのゲームセンターへ出かけ、外国タバコを幾箱も取って来る始末¹²。(中略)夜になると枕投げや布団蒸して大騒ぎである。不機嫌な私はついに怒鳴った。『こんな合宿があるか!』と。」

今の自分が顧問をしていたら、やはり「こんな合宿があるか!」と怒鳴っていただろうと思います。組織としてどういうタイムスパンでいかなるゴールイメージを持つか、そこに向けてどのように短期目標を設定し、ステップアップのための活動計画を組み立て、実行を管理していくか。こうしたマネジメントの要素のすべてが欠如した合宿でしたから。それもそのはず、設立年代はまだ高校1年生……とはならないわけで、高校生ともなればいっばしの大人予備軍。しかし問題はそこ(マネジメントスキル)ではなく、そもそも、先に書いた「趣味を同じくする者同士が集まってその趣味に興じることができればOK」という段階にとどまるか、そこより一段高いところから見える新しい景色を見に行こうとする組織になるのか、という点を決めかねていたことにあったようです。

この合宿の最終日に急遽組織され、その後の合宿でも繰り返されることになった合宿最後の夜の討論会では、この「古典的テーマ」(加藤先生談)がたびたび取り上げられたそうですから、チェス部が設立以来の同好会の殻を脱ぎ捨てるためにはその後何世代かを必要としたようですが、少なくともこの合宿の結論の一つとして、先輩たちが培った組織運営のノウハウを有するサッカー部に属していた松永保君にそのノウハウをチェス部へ移植してもらうことを期待して3代目の部長を引き受けてもらったことから、その晩の議論の方向性を推し量ることができるでしょう。

¹² もちろん松永君自身がタバコを吸うわけではありません。この合宿に参加している唯一の大人に安く買い叩かれることで、価格は需要と供給の関係で決まるというマイクロ経済学の初歩を学ぶことになるわけです。

5. それから (1976-)

この後、チェス部は松永君のバランスのとれた運営のもとで安定した活動を継続していくのですが、そろそろ紙幅が尽きてきました。それでもここでどうしても言及しなければならない重要な事柄は、チェス部の設立の経緯からの必然として設立学年の人数が多くそれ以下の世代の人数が少ない極端な人口構成の中で、設立学年がごっそり抜けた後の部の運営を引き受けざるを得なかった4代目部長の篠原研一君（我々の1学年下）と、続く5代目部長の片山拓史君（3学年下）の苦悩です。この点に関しては容易に語り尽くせるものではありませんが、今回、この50周年記念誌をまとめるにあたり過去の記念誌のデジタル化も進めたので、彼らの奮闘ぶりについては『二十年のあゆみ』に書かれた大和田君・吉田君の手になる「正史」と片山君執筆の「風俗史」を併せお読み下さい。



13

こうしてチェス部が半世紀にわたる歴史を積み重ねていくことができた理由の一つは、設立者である小林君の種蒔きもさることながら、我々設立学年からバトンを託され、これを取り落とすことなくその後の世代へと引き継いでくれた篠原・片山両君の働きにあったことをここに特に記して、本稿の筆を擱きたいと思います。

存亡の危機を乗り越えて

吉田 哲郎 (1983年卒)

私が麻布にそしてチェス部に入ったのは1977年、チェス部は創立5年目で安藤さん達創立学年が部は引退したものの高3に在籍中、といった時期でした。今の若い方々から見れば「同じアラ還世代のおじさん」だと思いますが、創立学年の先輩方の存在は色々な意味で非常に大きく、例えば安藤さんの見ていたチェス部と、私に見えていたチェス部、そして例えば3年下の小林中君（早世されたと今回伺い、言葉を失いました。ご冥福をお祈り致します。）の見たチェス部は大分違うものだったと思います。私から見た当時のチェス部については編集人を務めた1992年発刊『麻布学園チェス部設立二十周年記念誌 二十年のあゆみ』

¹³ 写真は1977年頃の部員たち。左から篠原君、私、1人おいて喜多見君。

に詳細に記載したので、興味のある奇特な方がもしいらしたら、そちらを御覧いただければ幸いです（今回電子化され、30年前の記録ですが、容易に見られるようになりました）。同書中の「試論－麻布学園チェス部の歩み」中の「4. 存亡の危機（1977.4-78.3）」「5. 復興から発展へ（1978.4-79.8）」「6. 体制の確立（1979.9-81.3）」「7. 大型化と新たな課題（1981.4-84.3）」が中1～OB1年目までの7年間のチェス部を「卒業から9年たった目で」振り返った文です。今から見ると小見出しの大仰さに恥ずかしさを覚えますが、その位チェス部にとっては激動の時代だったと思います。その危機を部長（2年間）として乗り切った最大の立役者の片山さん（私の2年上）の視点も同書中「麻布チェス部風俗史 1975－1979」にあるので、そちらも合わせて御覧下さい。この『20周年記念誌』を作ったことで、私にとってのチェス部は「確定した思い出」として封印されたはずでした。あれから30年、めぐり合わせで50周年イベントに携わることになっても、自分で記念誌に何か書くつもりは全くなかったのですが、せっかく機会をいただいたので、「卒業40年後の今の視点」で在籍当時のチェス部と自分をもう一度振り返ってみて、若い方へのメッセージとしたいと思います。

1. 死守した部室から麻布の外へ（1977-78）

1977年私が入部した時の部員の構成は高2：3名、高1：1名、中3：2名、中2：1名、中1：2名。その合計を超える人数を誇る「チェス部団塊の世代」の創立学年の先輩方は、高3になっても昼休み等に部室に顔を出す方も多く、1977年秋の「創立学年送別大会」は6名の方が参加されそれなりに盛り上がりました。しかし、秋も深まり受験期に入って高3の先輩も姿を見せなくなると、部室は一気に寂しくなります。冬合宿もできず、「次の年に新入部員が入らなければ部の存続は危うい」という意識は中1だった私の中にもありました。そんな危機感の中で行った1978年4月の新人勧誘活動は予想以上の成果を挙げ、一時は20人近くの新入部員を迎えることになりました。今思えばここが大きな転換点で、彼らの入部がなければチェス部は幾多の同好会と同様に、「創立学年の卒業からほどなく自然消滅」の道を辿っていた可能性が高かったと思います。それを回避して、逆ピラミッド型に一気に変わったチェス部を率いた片山・長岡執行部の手腕は素晴らしかったのですが、特に部が消滅を免れた大きな原因の一つとして、（サークル連合等とのロビー活動を駆使して？）部員の居場所としての部室を死守したことは大きかったと思います。当時の部室は教室棟の2Fの角というアクセスしやすい場所にあり、昼休みや放課後はもとより10分の休み時間や自習時間等にも頻繁に足を運び、ブリッツをしたりチェスの洋書を背伸びして読んだり、弁当を食べたり様々な話を学年を超えてしたりしたのは良い思い出です。現在、新しい建物に移っている部室がコロナ禍で使えないとうかがいしましたが、やむを得ないこととは言え、残念に思います。もうすぐコロナの制限も緩和されるでしょうから、現役諸君は先輩の死守した部室を最大限活用して、チェスに触れる時間を多く持ち、先輩後輩と色々話し、チェスの腕を磨くと共に様々なことを学んで欲しいと思います。

もう一つこの時代に起きた大きなことは、「学外への活動の広がり」でしょう。チェスは今よりももっとマイナーでチェス部のある中高は麻布の他には（知る限りでは）ありませんでしたし、インターネットができるはるか前の時代ですから、学外の相手との対局の機会は極めて少なかったのです。創立学年の先輩方も立教大との対抗戦や1976年の全日本ジュニア選手権参加等、一定の対外試合は行っていらしたようですが、私が入った頃には全く途絶えてしまっていました。部員が多かった頃は部内でも実力者が複数いて切磋琢磨する状況がある程度作れますが、部員の絶対数が数人（+新入部員の初心者多数）で対局していると、「棋力の向上」という点でも限界が来ますし、第一面白くありません。日本チェス協会（JCA）の公式戦が気軽に指せる機会としては、青山に今もあるアジア会館で毎週日曜に開かれていたサンデーターナメント（ST）というものがありました。1978年12月に片山部長以下4名がJCAに加盟しSTに参加、私も中2の終盤にして初めてJCAレーティングを貰いました。翌1979年1月には長岡さんが全日本ジュニアで3位入賞、3月の関東百傑戦には中1を含め5名が参加しましたが、これがJCAのオープントーナメントの部員のおそらく初めての参加です。私も4/7ポイントでしたが、社会人や大学生の強い方と盤を挟み、三十何位かの賞状をいただいて嬉しかった覚えがあります。

もう一つの「身近な学外」として、この時期チェス部に初めてOBが生まれたということがあります。大学生となった創立学年の方がOBとして、合宿に初めて参加されたのが1978年夏合宿。この時のエピソードは前述の20年史の片山さんの原稿に譲りますが、これ以降、OBの方とチェスができ色々な話ができる場所として、年2回の合宿は貴重な機会となったと思います。少し先に行く先輩との交流というのは、中高生にとって（時には親や先生よりも）大きな意味を持つことがありますし、自分がOBになってからも後を追ってくる後輩（例えば小林君との対局）との交流から様々な刺激をもらった覚えがあります。チェス部が「厚み」をもった部として一定の歴史をもち始めたのがこの頃だと思います。その意味でそれから45年も経ちOBの厚みも随分増したチェス部ですが、残念ながらせつかくのその資源を十分に活かせていないように思います。我々年長OBの責任も大きいと思いますが、50周年を機にOB会組織も部を応援する組織としてもう少し整備できればと思います。

話が少しそれましたが、創立学年のうち東大に進んだ方々が設立した「東大チェスクラブ」との対抗戦「東麻戦（とんません）」が始まったのも1978年6月です。これも貴重な「学外との活動」です。予想に反して第一回は麻布が3-2で勝利、私も安藤さんとの初対戦で勝利し非常に嬉しく自信になった思い出があります。この時の模様は片山部長が『あざぶPTA』に執筆し、保護者間へのチェス部の認知度を高めたのも「存亡の危機」の克服の一助になったのかも知れません。その後も東麻戦は両校のクラブの栄枯盛衰に伴い形を変えながらも年に2回のペースで長く続けました。他校出身のジュニアの強豪で後に日本を代表するプレーヤーとなった西村博之さん、鈴木知道さん、渡辺暁さん等との交流も東麻戦を通じて深まりました。東麻戦は残念ながらなくなってしまったようですが、チーム戦の面白さというのも中高の部活動の醍醐味の一つだと思いますので、そうした機会も是非積極的に作って

いって貰えればと思います。手近なところでOBチームとの対抗戦や、今ならネット対局で海外の学校に挑戦しても面白いかも知れません。



2. 世界へ開かれたチェス、チェスのもつ多様な魅力（1979-81）

上で「海外の学校」と書きましたが、「世界に繋がっている」という点がチェスの大きな特徴であり、素晴らしい点の一つです。私自身は入部した頃は特に意識はしていませんでしたが、部室には「打倒カルポフ」の落書きがあり、少ないながら英語で書かれたチェスの本もあったので、中1にとっての海外への窓ではありました。当時は洋書の入手も今ほど簡単ではなく、新宿の紀伊国屋や銀座のイエナにチェスの洋書が揃っていると先輩に教わり、散々悩んで購入した本を辞書を引きながら読んだのも懐かしい思い出です

翌1979年の新入部員は2名と少なかったですが、前年に大量入部した中1は7,8人が残ってくれ、次の「団塊の世代」が形成されました。「麻布マスター戦」「麻布オープン選手権」「麻布ブリッツ選手権」等の部内の大会の運営方法もこの頃整備され、JCAの大会に部員が出るのも普通のことになっていました。「存亡の危機」は回避され、チェス部が「普通の」クラブになったのはこの頃と言えましょう。私はこの頃チェスの面白さに目覚めてJCAの大会にも出まくってました。1980年1月の全日本ジュニアは麻布から4人が出場、1,3,4,5位を占めるという成果を挙げました。私は幸いにも優勝することができ、5月の全日本選手権と夏の世界ジュニア選手権の代表権を得ることができました。どちらもチェス部にとっては初めてのことで「世界への繋がり」が一気に現実のものとなり、とても嬉しかった覚えがあります。チェス部とJCAとの関係も密になり、JCA公認サークルとして部内の大会の一部をJCA公式戦にした、全日本チーム選手権へ初参加したのもこの頃です。

1980年夏の世界大会（17歳未満選手権（仏ルアーブル）、世界ジュニア選手権（独ドルトムント））の参加は、忘れがたい思い出です。この時の海外遠征には顧問の加藤先生をはじめとする麻布の先生方、OBを含むチェス部の皆様に大変お世話になりました。チェス部から初の海外遠征ということで、盛大な壮行会まで開いていただきました。

初めての海外で英語も殆どわからない中、同世代の世界の代表と寝食を共にして戦った高1の夏の日々はあれから40年経っても色褪せません。成績は17歳未満で50人中34位、世界

ジュニアで58人中56位とふるいませんでしたが、下位ボードで争った中南米やアフリカの選手と片言の英語で感想戦をしたのは、加藤先生の良くおっしゃる「チェスは世界語」を実感する貴重な体験でした。この時の世界ジュニアの優勝は後の世界チャンピオンのカスパロフ（ソ連）、2位が（後の世界チャンピオン挑戦者で、32年後に来日し小島慎也さんや将棋の羽生さんと公開対局した）ショート（英）、17歳以下選手権の3位が（後の全米チャンピオンで、IBMのDeepBlue陣営に入りコンピュータとして世界チャンピオンのカスパロフを初めて破った）ベンジャミン（米）という凄いメンバーでした。こうした人達と同じ大会に出たというのも今では信じられませんが、忘れ難い思い出です¹⁴¹⁵。

9月海外遠征から帰国した私は、直後の夏合宿で新部長となりますが、本当に競技としてのチェスに全力で取り組んだのはここまでだったかも知れません。燃え尽きたつもりはありませんでしたが、世界とのレベルの違いを目の当たりにして、プレーヤーとしての限界を無意識に感じてしまったのでしょうか。ここからは同期の渡會君と一緒に”Wood Pushers”と名付けた部報を復刊するなど、チェス部の運営の方に力を入れることになりました。

翌1981年も前年に続いて多くの中1の入部があり、2年続けて人数の多い学年が揃ってチェス部は完全に「存亡の危機」を脱し、安定状態を迎えたように思えました。私は5月に出場資格のあった全日本選手権と部長としての文化祭展示のどちらをとるか悩みましたが、結局文化祭をとりました。後年、「あの時全日本を選んでいたら、また違ったチェス人生があったのでは」と思ったこともありましたが、「それも一局」というところでしょう。一方、夏合宿は初めて民宿的な宿に代って「赤城青年の家」という規律を重んじる宿泊所で実施し、「競技としてのチェス」「運動部的なチェス部」の側面も大事にしようと試みました。評価は様々でしょうが、この夏合宿で我々は引退し執行部のバトンを「新・団塊の世代」に渡すこととなります。以降の話は部長を引き継いだ小野瀬君の寄稿に譲ります。

”Chess is everything: art, science and sport.”というのはカルポフの言葉だそうですが、こうした多面性こそがチェスの魅力でしょう。様々な側面に惹かれてチェス部に入る部員がいることが、チェス部を多様性豊かな部にしてきたと思います。チェスの魅力の中で、私が後輩の皆様に特に強調したいことは「チェスは世界に開かれている」ということです。小島慎也さんをはじめとして麻布から世界に挑戦するプレーヤーが増えることも素晴らしいです

¹⁴ 写真左は1980年7月麻布で開催いただいた世界ジュニア大会壮行会。2列目中央の筆者の左に故 大賀毅校長、その左に前顧問の故 近藤祐康先生、筆者の右に寄せ書きをもつ顧問の加藤史朗先生、その右が担任の原芳典先生、その右に初代部長のOB小林正純さん、左の方で紙をもつのが片山拓史部長。前列右端が当時中1で3年後に世界ジュニアに出る故 小林中君。

¹⁵ 写真右は世界ジュニア選手権で優勝したカスパロフ氏と閉会式でとってもらった1枚。彼は当時17歳で既にグランドマスターで大スターだった。この5年後に彼はカルポフを破り（当時歴代最年少の）世界チャンピオンになり、15年間君臨する。1997年にベンジャミンらの率いるIBMのDeepBlueに破れ、2005年にトーナメントプレーヤーを引退。以後、ロシアの反プーチンの政治家として活動しており、ロシアのウクライナ侵攻に関しても色々発言している。（Wikipedia等）

が、世界の人々とチェスを楽しむにはそこまでの棋力は必要ありません。是非、チェス部在籍中、そして卒業して大学生、社会人になってからも、「世界語」たるチェスを通じて世界の人々と積極的に交流して行って欲しいと思います。

チェス、サッカー、マラソンそして将棋

小野瀬 裕之 (1984年卒)

チェス部創立50周年おめでとうございます。第8代部長の小野瀬と申します。卒業後は日本医科大学に進学し、現在は駒込の甲状腺専門病院に勤務しています。チェス部とはすっかり疎遠になっていましたが、今回、吉田先輩にお声がけいただき、過去のかすかな記憶をたどり当時のチェス部に思いをはせてみたいと思います。

受験競争をなんとか勝ち抜き麻布学園に入学した私ですが、今となっては入部の動機をはっきりと思い出すことはできません。記憶の片隅にあるのはトイレ横の階段を上がってすぐの薄暗い落書きだらけの小さな部室。チェス部の並びに、将棋部、囲碁部もあったと記憶しています。将棋は強い人がたくさんいるけれど、チェスなら初心者の私でも勝負できるかも、世界の人ともできるから面白そうなどといった漠然とした興味だったのでしょうか。当時の部室には、なぜかチェッカーやシャンチーという中国将棋も置いてありました。

同期は菱川君、染谷君、乾君、郷君、石田君、横堀君らが入部しました。それから、麻布に途中編入した泉君もいました。創立学年が抜けた後の危機を乗り切るための懸命な勧誘のおかげで、我々はチェス部の約半分をしめる一大勢力でした。部室のラジカセから流れる菱川君のイーグルスの名アルバムのロング・ランやビリジョエルのオネスティを聞きながらBLITZに興じていました。今振り返るとそれはこれから始まる長い旅路の序章にすぎませんでした。

皆様も同じだと思いますが、チェス部の記憶で残っているのは何と言っても合宿です。朝から晩まで対局に明け暮れ、最終日前日はハイキングと称する登山。夜は顧問の加藤先生を囲んでの討論会。加藤先生は合宿に必ず顔を出されていました。先生とチェスを指したことも、授業で教わったこともありませんが麻布で一番印象の強い方です。ひとり人間としての付き合いがあるのは、クラス担任より部活の顧問の先生ですね。最近麻布OBのグループに登録したところ思いがけず先生から友達申請を頂きfacebookを拝見しています。いつまでたっても恩師は恩師、記事を拝見すると嬉しくなります。先生が過去の記念誌に書かれていましたが、中学1年の初合宿で先輩方の熱い討論を聞いているうちに胸がいっぱいとなり泣き出してしまったのは私です。自分の意見を人前で話せなかった自分の未熟さを感じてのことでした。幹部学年として飛騨高山で合宿した際は、宿舍の真上を台風が通過し東海道新幹線が止まってしまい富山回りで帰宅したのを覚えています。

当時の私は学校の授業が終わると部室に行き、暗くなるまで冗談を言いながらチェスを指して帰るといった生活を繰り返していました。ご存じの通り日本語のチェス書籍は多くありません。今でこそネットで簡単に洋書の電子書籍が購入できますが、当時銀座にあったイエナという洋書専門店でチェス専門書を購入して勉強していました。洋書なので完全には理解できませんが、そこは国際ゲームのチェス。棋譜をみれば対局の様子はわかります。当時の私の初手は世界チャンピオンのフィッシャーの好むe4（オープンゲーム）一択でした。得意戦法はルイロペス、黒番ではシシリアンドラゴンバリエーションでした。ちなみに、チェス部創部の1972年は、世紀の対決と呼ばれたフィッシャー対スパスキー戦が行われた年になります。創部学年の皆様はそれに多大な影響を受けられたに違いありません。

話は変わりますが先輩の長岡さん、同期の郷くんを中心に行っていた課外活動のオリエンテーリングも大変楽しかったと記憶しています。どこに行ったかすっかり忘れてしまいましたが、チェスの駒の代わりに地図とコンパスを片手になるべく最短距離でルートで完走を目指す。部員との何気ない語らいも何とも言えない魅力がありました。部員同志の親睦を深めるにはチェスとは一見関係のない遊びの活動も必要だったと感じています。

今でこそAbemaTVの将棋中継のコンピューターの形勢判断、予想手の精度には目を見張るものがありますが、麻布祭で展示した後輩の伊藤君のappleコンピューターのチェスソフトは、私でも簡単に勝つことができるほど弱いものでした。渋谷のセンター街にあったJCAのチェスセンターにも当時はしりのチェスコンピューターセットが置いてありましたが高価で学生の手にはいるようなものではありませんでした。今やスマホのアプリを使った将棋、チェスの八百長事件のニュースが流れる時代です。ある意味でまだ平和な時代でした。

部の大会では、上には片山さん、吉田さん、渡会さんという強い先輩方、下には小林君というこれまた強い後輩がいたため残念ながら準優勝どまりでした。今でもそうだと思いますが先輩に勝つのは難しく、渡会先輩に一度だけ勝って大変嬉しかった記憶があります。JCAの大会ではジャパンオープンジェネラル3位に入賞しそのとき頂いた盾がいまも本棚に飾ってあります。東麻戦では麻布が唯一全勝を飾った試合で幸運にも全日本チャンピオンの西村さんに勝利を飾れたのも良い思い出です。無理なサクリファイスを仕掛けてこられたので運良く勝利を手に入れました。西村さんもよほど悔しかったのでしょうか。すぐもう一局指してボコボコにされました。

たいして強くなかった私が部長になったのには深い理由はありません。部長を決める会に一番最後に顔をだしたら遅れてきたお前がやれと言われた記憶があります。部長は、様々な意見を持つ部員をまとめる大変な仕事でしたが、この時の経験はその後の人生に役立っています。対局予定の作成、部誌（wood pushers）の編集（当時はガリ版で書いて輪転機で印刷していました）、合宿、文化祭の企画実行など当時の私にとって大変な仕事でした。

麻布祭では、思い出があります。チェス部の展示に偶然来校した女子学生と知り合い高校卒業まで文通をしていました。50歳をすぎたころに偶然彼女が海外の大学で教授になっているのを知りメールをだしたところ返事をいただきました。日本で調べ物をするとのことで来日した時に一度だけお会いしましたが、30年以上たっていても一目会うとわかるものです。人間とは不思議なものです。

大学では、チェスとはまったく無縁のサッカー部に入部しました。東京12チャンネルのダイヤモンドサッカーで知ったドルトムント所属の奥寺選手にあこがれ自分でもやってみようと思ったことや集団競技に挑戦し体を鍛えたかったこともありました。中高でチェス三昧だった私が活躍できるわけもなく、生涯あげたゴールは自殺点の1点のみという悲惨なサッカー部生活でしたが、マネージャとして活躍し体力と根性だけは向上しました。何事にも素質があるのでトップ選手を目指すことは難しいかもしれませんがその人なりに部活動ではたすべき役割はあるものです。腐らず少しずつ自分なりに上達する楽しみと日頃の努力の大切さを知りました。

50歳をすぎ、ストレスと運動不足から低音性難聴を患ったのを機にランニングを始めました。サッカー部の先輩からフルマラソンに誘われ東京マラソンを走ったのをかわきりに現在までフルマラソンを9回完走しています。チェスチャンピオンのカルポフも現役時代走っていたようですが、チェスにも体力が必要です。中高生の時期は、持久力を伸ばすのに最適な時期なので是非現役諸君も自分にあった運動を見つけ自分を磨いて欲しいものです。それから、トレーニングには休みや体のケアも大事です。無茶なトレーニングを続けても実力は一直線には伸びていきません。トレーニングの強度に緩急をつけること、楽しみながら長く続けることが何より大事なのです。

競技チェスのほうは50歳で全日本シニアチェス選手権に出場し5位になってからは公式戦を引退し、最近では天才棋士の藤井聡太竜王の試合をabemaTVで観戦しています。コンピューターのお陰で現時点での形勢判断、最善手リストをみながら天才棋士にマウントしながらネット観戦しています。試合後は、youtubeの解説動画を見るのが楽しみになっています。ここでも、チェス部で培った頭の中で盤面を考える能力が少しは役に立っているようです。将棋を観戦していて感じるのは、盤面の現状把握の難しさです。正確に読む力がなければ、たとえコンピューターの形勢判断が優勢でも勝ちに繋げることは出来ません。これからはコンピューターを使いながら自分の対局を再検討したり相手の対局を事前に研究して序盤の作戦をたてることが益々重要になってくるでしょう。そういうノウハウを研究するという意味では全日本チャンピオンのOBや部内に強いライバルをもつチェス部の諸君は大きなアドバンテージがあると思います。

最後に医師という職業について一言。シャーロックホームズの助手のワトソン君も医師でチェスを指していたと記憶していますが、先の展開を読んで計画をたて対処していく点で医療とチェスはよく似ています。母校の日本医科大学にも麻布学園出身者の麻布会があります

が、近年、麻布生の入学が減り残念に思っています。医師は、自分の興味を追求しながら人様の役にたてる素晴らしい職業です。是非後輩諸君の進学をお待ちしています。

以上、自身の回顧録のようになってしまいましたが、その時その時で興味のあることに自分なりに真剣に取り組んできた過程であり悔いはありません。私にとってその始まりが麻布学園チェス部であったことに誇りを持っています。

麻布学園チェス部に関わってこられたすべての皆様に幸あれ。

チェスを長く続ける秘訣

東芝 輝臣 (1991年卒)

麻布学園チェス部50周年おめでとうございます。50周年と聞いて、自分もちょうど50歳になったことを思い出しました。寄稿は20周年の時以来です。手元にあるのを読み返してみたら、ずいぶん大人げないことを書いていたようで。まあ、若気の至りということでお許しください。

思い返してみると、自分が中高生の時は、部員も日本のチェス人口も少なく、その中でまあまあ強かった私は、がむしゃらにチェスを指すのみで、勉強と言えばボロボロの辞書みたいなエンサイクロペディアを見る、部室にあったタクティクス、エンドゲームの問題集を解く位で、きちんとチェスを理解しておりませんでした。周囲の部員を見渡しても、それほど熱心に打ち込んでいるものがおらず、部の試合だけでは飽き足らず、JCAの大会はもちろんのこと、サンデートーナメント、タルの会という団体の例会などにも参加して、とにかく試合数をこなすというのが自分の中では大事なことだったようです。

幸か不幸か、1989年、高校1年のときに、後に日本人初のFMとなる渡辺暁さんを破り、日本ジュニアチャンピオンを獲得しました。このことで、当時の自分は有頂天となり、いずれ日本のトップ争いをすると考えていましたが、実際はレイティング2000の壁を破れず、またそれ以降1回も渡辺暁さんに勝てなくなりました。形式上でもトップを取ったことで、チェスを長く続ける原動力になったのと同時に、上達への必要なトレーニングなどについて考える機会を失い、棋力を向上させられなくなったのだと思います。この年は、自分の前の部長である佐野さんの手腕もあり、新入生が大量入部した年でもありました。この年代には、後に全日本チャンピオンとなる松尾や尾崎、田中など才能豊かなプレイヤーもいましたが、お世辞にもきちんと指導できたとはいえない状況でした。ただ彼らに交じってわいわいやるのが楽しく、結構充実した気分を味わっていた年でした。

麻布に在学していた1985～1991年頃というと、ちょうどカルポフとカスパロフが世界チャンピオンを賭けて死闘を繰り広げていた頃です。もし、そのマッチを少しでも興味を

持って、棋譜並べなどしていたら、もっと棋力がついたかもしれないですが、JCAの会報以外に全く情報も入りませんでしたし、日本語でのチェスの解説書は皆無、洋書も気軽には入手できない状況でしたので（いいわけ）、思いもよみませんでしたね…。ただ、汚いベニア板を打たれた部室の壁には「打倒カルポフ！」とデカデカと書かれていたのを覚えています。そんな努力している部員は一人もいなかったんですけどね（笑）。

麻布を卒業後、医師になりたかった自分は浜松医大に入学しましたが、東京から離れたことでチェスとも疎遠になりました。学生選手権も1度も出ないままでしたし、卒業後も10年ほどは静岡県でローテーションしていましたので、大会にも出られず、棋力も伸びませんでした。東京に帰ってきて、時間に多少余裕ができてから、ふと思いついて、当時日本トップに君臨していたIM小島慎也君にお願いして、月2回ほど手ほどきを受けることにしました。2014年のことですからもう8年の付き合いになります。

そもそも自分のチェスはとにかくタクティクス、マテリアル一辺倒で、局面評価やポジショナルプレイなどについてはほぼ理解が0で、エンドゲームでのルセナポジション、フィリドールポジション、キースクエアなどもほとんど理解しておりませんでしたから、人に教えてもらったことのない自分には新鮮に感じたのでした。棋譜並べも嫌いでしたので、全然やったことがありませんでしたが、ポイントを解説されながら試合を見せられると、なるほど〜という気分にはなりました。とにかく、自分に足らなかった部分がある程度わかり、またレパトリリーなども再構築し、その気になっていろんな大会に出ている結果、国内レーティングがピーク時で2100以上まで上がりました。やはり、何の競技でも、大事なポイントを教えてもらう、ライバルと切磋琢磨するというのは大事なことで、独りよがりの努力では限界があるのだと思います。

最近ではコロナ禍で大会が中止になったりして参加機会が減り、また、50歳になり思考能力が低下してきたものもあり、少しレーティングを下げてしまいました。昨年はシニア選手権にも出たりしましたが、残念ながら2位。ジュニア以来のタイトルを取りたかったのですが、なかなかうまくいきません。ただ、今後も当面の間、チェスをやめることはないのではないかと思います。上昇志向も大事ですが、何事もあまりガツガツ頑張りすぎないで気楽にやるのが長続きの秘訣かなと思います。

現在、練馬で皮膚科医院を開業して13年になりますが、チェス部の後輩も数人来てくれたり、大会に出たときにチェス部出身のプレイヤーと会って会話したりするのが楽しく、生活にアクセントを添えてくれています。チェス部出身ということやはり話しかけやすいですし、どこか垢抜けしすぎず、親しみやすい人が多く、気後れせずにすみます。そういうわけで、チェス部の存在は今でも大きく、大変感謝しています。

チェス部50周年の会誌の原稿ということで、本来は、チェス部に在籍していた頃の面白いエピソード、逸話が書ければよかったと思うのですが、30年以上前の話ですし、なか

なか思い出させません（以前の会誌にもそう書いていましたね）。まあ、今回は「チェス部最年長現役プレイヤー」ということで原稿を依頼されましたので、一人くらいこういう内容の記事を書いてもいいかなと思います。ご容赦ください。

チェス部に入ってよかったこと

松尾 朋彦（1994年卒）

チェス部には中1の4月から入っていたのですが、当時はチェス部と硬テ同との掛け持ちをしていて、特にチェスに強い思い入れがあったわけではありませんでした。チェス部に入った理由も特にこれとなく、新歓でビラを配っていた先輩のあごの長さが印象に残っていた程度で、この後30年以上もチェスと付き合うことになるとは思っていませんでした。

自分が入った頃のチェス部（88年）は、中2から高2まで全部で10人、中2には1人しかいない状況でした。当時部長だった佐野さんをはじめ先輩方は廃部を恐れ、その年の新入生勧誘活動には気合を入れたそうです。その熱意と先輩方本来の面倒みの良さも相まって、当時のチェス部は先輩後輩問わず、部員間の距離がとても近くに感じられる居心地の良い空間でした。もう一つの部活だった硬テ同での理不尽なまでに厳しい上下関係と比べると（これはこれで良い思い出なのですが）過保護とも思えるほどでした。そんな雰囲気をも自分の同級生達も感じたのか、この年の新入部員は10人以上も入ることになりました。帰宅時も上級生の帰りを邪魔することを主目的とした有栖川じゃんけんをしたり、おごりを迫ったり、駄々こねたり色々と甘えていたような気がします。一方硬テ同では、水鉄砲にコーヒーを入れた先輩方に意味もなくコーヒーをかけられていました。そんなこんなで次第とチェス部に通う回数が増え、月曜から土曜の放課後はもちろん、昼休みや授業間の10分休みのほとんども校舎2階にあった部室に行き、ブリッツしたりだべったりしていました。当時はチェスが好きだから、というよりはチェス部が好きだから部活を続けていたと思います。

また当時大学生だった後藤さんや社会人の渡会さんなど、チェス部OBの方々とも時々交流があり、渡会さんには休日に中野サンプラザでのチェスとシャンチーの会にも呼んでもらったりしました。それまで田舎の小学生だった自分には高校生の先輩に相手をしてもらえるだけで新しい経験だったのに、チェス部を通じてさらに外の世界へと繋がりが広がっていききました。

その後学年が上がって行くにつれ、チェス部の部員数も次第に増えてきて、1つ下の学年が5人ほど、2つ下は20人以上も入部することになりました。今度は逆に部室が手狭になり、当時の辣腕部長の大川さん（92年卒）はコアタイムの導入や部室でのマンガ読み禁止などいくつかの法律を制定して大所帯の運営をスムーズに行っていました（多分もっとあった気がします）。マスター戦やオープン戦などの公式戦も部室で行うのが大変に

なってきたので、公式戦を行う際には一般教室を借りるようになってきた記憶があります。また、この頃から部員が海外のチェス大会に参加する機会も増えてきました。自分も高1の時にアジアジュニア、高2でオリンピアドに参加し、その後も松浦（95年卒）、中村・田中・西尾・齊藤（96年卒）、赤塚（98年卒）などが日本代表として海外大会に参加していたと思います（抜けている方いたらすみません）。この頃のチェス部は廃部の危機なんか感じられず賑やかな毎日でした。

海外大会に関してですが、自分が初めて参加した時は吉田さん、小林中さんに続いてチェス部3人目の参加だということで壮行会を盛大に開いてもらったりしました。ただその間にも、実際には参加できなかったけど代表には内定していた先輩方もいました。自分の知る限り、松崎さん（90年卒）や東芝さん（91年卒）はそれぞれ88年マニラ、89年コロンビアの世界ジュニア大会の日本代表に内定していましたが、当時のマニラは若王子さん誘拐事件の記憶も新しく、コロンビアも遠く麻薬のイメージなどで高校生が1人で行ける治安状態ではない、ということで親御さんの反対等もあり参加を取りやめていました。東芝さんは、参加できなくてなんとなく残念そうにしていたのを記憶しています。そんな先輩方を見ながら、チェスをやっていると海外に行けるようになるのかな、と漠然とですが刺激を受け海外大会への憧れみたいなものが芽生えてきていました。とはいえ、当時はインターネットもメールも携帯電話もなく、英語もできないし海外旅行も初めてだったので、実際に参加権利を得た際も不安の方が大きかったです。ただ非常に幸運だったことに、大会開催国のUAE大使の米山さんが麻布の卒業生であることがわかり、顧問の加藤史朗先生や他の先生方が大使に連絡をとってくださりました。そして「何かあったらすぐに大使館に連絡するように」という心強い言葉をもらうことができ、安心して旅立つことができました。言葉だけではなく、米山さんは大会中2度も首都アブダビから開催地のドバイまで来てくださり、UAE国内や隣国オマーンにまで観光に連れていってもらいました。自分と大使には直接の面識は全くないにも関わらず、ただ麻布の先輩後輩というだけでここまで親切にしてもらえることを感謝しつつ幸運に思いました。チェス部や麻布の先輩方から受けた恩はいつかどこかでささやかでも返せたら良いなとは思っていますがどうなりますか。

さて、自分は麻布卒業後も濃淡の違いはあれど一貫してチェスを続けてきました。今でもチェスの大会に出ると、麻布の後輩です、こんちは、と言ってきてくれる人も多く、卒業後も年の離れた多くのチェス部後輩たちと知り合えることができました。同じチェス部だったというだけで何となく仲良くなれた気がして、新しく知り合えた人たちと一緒にご飯を食べに行くのは、今でもチェス大会に参加する楽しみの1つになっています。チェスの方は2018年にもオリンピアドの日本代表に選ばれ、40歳過ぎてもなお国代表に選ばれる競技に巡り合えたのは幸せだったなと思います。これまでを振り返るに、決してチェス中心でまわってきた人生ではないのですが、それでもチェスのおかげで色々な経験や人と知りあえることができ、自分の半生を鮮やかにしてもらえたことは間違いのないと思います。この場を借りて、チェスとの出会いの場をつくってくださった先輩方、それを半世紀も続けてきてくれた

後輩達、そしてチェス部を支えてくださった顧問の先生方に深く感謝いたします。自分はまだこれからも多分もう少しはチェス続けると思うので、今後もよろしく願いいたします。

チェス部の1回目の厄年

赤塚 威夫 (1998年卒)

私がこの文章を書くきっかけとなったのは昨年末に私がいただいた誕生日のお祝いメールからである。その内容は、私がこの部を続けていけるだろうと思わせていただいたきっかけを作ってくれた中村龍二さん、竹内剛さん二人の先輩方から、「お誕生日おめでとうございます」との連絡。うれしさがあつたつも次の文章、「ところで、チェス部50周年記念誌に寄稿する人物として推薦させてください」との文言を見て絶句。しばらくの間疎遠になっていた諸先輩方の突然のメール、警戒すべきだったにもかかわらず誕生日ということで油断してしまった自分が情けない。お祝いされる年齢でもないことを完全に忘れていた。何しろ、今年も自分の子供たちからですら何の言葉もなかったのだから。だまされたと思いながらも、今回併せて寄稿されると伺っている松尾朋彦さん、益本宇一郎さんの間を埋めるという役割を全うし、チェス部の歴史をつなぐためにも、また同時期に部に所属した皆様方が昔を思い出すきっかけとなつていただくためにも、駄文にお付き合いいただければ幸いである。なお、今回この寄稿に際し20周年誌、25周年誌、30周年誌と内容が重複する部分が多分出てくると思われるが、逆に昔の周年誌を読み返すきっかけと解釈してくれることを切に願いたい。また、私の記憶力の限界（というほど記憶容量を持っていないが）により実際の時期からのずれがあることもご容赦いただければと思う。

1992年度（野地部長→村田部長）

私がチェス部を知ったのは小学生の時に麻布の文化祭に来たとき。その際にルールを覚え、中学に入るとその時の記憶をもとにチェス部に入った。その年はちょうどチェス部が20周年を迎えようとしていた1992年であり、秋に見たこともない大人たちに囲まれて20周年を祝えたことを今でもしっかりと覚えている。今その時にお会いした初代の方々の年齢を、自分がとうに超えていることを知り愕然としている。当時のチェス部は野地部長のもと、部員も常時30名程度おり、また海外大会にも松尾さんや松浦さん、中村さんなどが多数参加され、一つの黄金時代であったと私は考えている。

一方でその頃の私といえば、諸先輩方に全く歯が立たず、当時M3であった竹内さんや森村さん、平野さんなどにチェス以外の遊びをいろいろ教わった。そのため実際、最初の「実力者」からのポイント奪取は、M1の春合宿での野地部長の次の代の部長となられた村田さんとの引き分けまで待たなければならなかった。村田さんからのこのポイントがあつたおかげでチェスの実力がなくあきらめかけていた私は長くチェス部を続けられた。後輩に自信を

つけるために村田部長から送られたプレゼントだと今でも思っている。実際、村田さんにはこれ以降公式戦でずっと負けなかった（かっこよくいったものの、勝てもしなかったが）。

パソコンが普及し始め、コンピュータとチェスをするということができるようになったのもこのころだったと思う。1992年の文化祭であったか、1993年の文化祭であったかコンピュータと対戦できる展示があったのではないかと記憶している。展示が終わった後、一番弱いレベルでコンピュータをいじめて、高いレベルで勝てなかった（というより、コンピュータの思考時間がかかりすぎて人間の待ち時間が長すぎた）憂さ晴らしをしていた記憶が残っている。当然、今となっては当たり前となりつつある（だろうと思われる）コンピュータに盤面を解析させるなどということはできようはずもなかった。このコンピュータがこの5年後、IBMのコンピュータが世界チャンピオンを負かすことと、それからコンピュータの能力だけでなくインターネットの普及により誰もがチェスを海外の人と楽しめることになるとは少なくとも私は、当時全く想像できなかった。

この年、もう一つ記載しなければいけない事件が、斎藤孝祐さんが亡くなられたことである。私の斎藤さんの記憶は、真摯にチェスに向かっている姿であった。当時海外の大会で勝ち越された最初のチェス部員でもあった。私自身、葬儀に参列したものの、現実のものとは思えなかった。私はM1であったが先輩方や加藤先生の悲痛な面持ちが忘れられない。それ以後本当に残念なことながら、50周年を迎えるまでに多数のチェス部出身者が亡くなられたことはまさに断腸の思いである。

1993年度（村田部長→中村部長）

この年は村田部長の御威光により後輩が多数入部し、部長は次代の中村さんに引き継がれた。過去の歴史を振り返ってみてもチェス部は極端な人数構成になりがちではあるが、この年H1とM1の人数が多く一つ上のM3と私の代のM2が3人ずつしかいないという状態であった。人数的にはアンバランスであるが、上級生の人数が多いこともあり、部員が和気あいあいと過ごせていたのもこのころの特徴だと思う。当時もチェス部における部活動の在り方について毎年議論が起きていたが、上級生が多かったため、強くなれるように努力する人、スポーツをして楽しむ人、楽しく会話する人など多様な人材を受け入れられるという余裕があり、後輩も自分のやりたいことができていた。特に、強制という言葉に反発する麻布生にとって、好きなことを自分のやりたいときに楽しむという自由がある空間を作れたことが、部員にとって居心地が良かったのではないかと想像する。

この年の大きな出来事は、顧問の加藤先生の尽力によるロシア大使館との交流戦である。ロシア側もまだ安定した政治状況ではなかった当時の状況で、大使館と日本の一つの学校のクラブが対戦するといった交流が行われたということは本当に驚きであった。相模湖記念室で行われたこの試合は、私自身実力が伴わずに試合にも出られなかったが、これまで海外大会に出たことのなかった私のような部員でもチェスが世界とつながれるものであること

を、世界との懸け橋になれるものだというのを、そして私がその後世界に出てみたいと思うきっかけとなった出来事であったのかもしれない。結果は、大人との試合は大使館側の全勝、子供側の試合は麻布側の全勝であった。現在の日本とロシアの関係は非常に難しい状況にあるが、このような民間の交流を通じて世界に争いが無い、子供たちが安心して生活できる環境を作ってほしいと思う。争いは、チェス盤の中でのみやってほしい。

思い起こせば、部の規約ができたのもこのころだったと思う。小さな部であったにもかかわらず、きちんとした規約が作られたということに対して、当時本当に驚いた記憶がある。現在まで当時のように残っているのかどうか分からないが、過去起きたトラブルの経験で規約を作ったことによって、その後内部での大きな混乱もなくチェス部が50年という長い期間存続できたのだろう。

ほかの思い出として、チェス部は合宿を含めた大会にOBが参加される機会が多かったと思う。後藤さん、東芝さん、田中海渡さんなどの面々（漏れている方ごめんさい）の記憶が残る。OBがここまで来ていただけるチェス部は素晴らしいと感じただけでなく、チェス部から離れた先輩方からの言葉は、自分が将来どうチェスにかかわっていくのか参考になったと記憶している。もちろん、日本ではACC以外でチェスをする環境があまりないことも影響しているのであろうが。私自身も、卒業後何度かチェス部の合宿に参加させていただいたのは、この時の記憶が大きく影響しているのは間違いない。一方で、その時見ていた素晴らしい先輩方の良い影響を私がOBとなって与えられたかどうかかわからず不安である。

1994年度（中村部長→越智部長）

夏に、中村部長から越智部長へ代替わりが行われた。私も副部長として責任を負う立場となったものの、部員の年代別人数のアンバランスさから運営が回っていなかったというのが正直なところであった。役職については、越智部長の代は、越智さん、大木さん、伊藤さんの3名、私の代は私と長島さんの合計5名であった。少ない人数の中、よく部が存続できていたと思う。一方で、執行部が少ない人数となったため、多様性に欠けてしまった感も否めない。部でブリッツをすることが棋力向上につながると信じていた私も、この時期部活にあまり人が集まらなくなっていたことから、初めて自分で棋譜を並べて勉強していた気がするし、JCAの大会に積極的に参加したのもこのころだったと記憶している。

当時は、日本でチェスの書籍を入手することは難しく、丸善や銀座のイエナ、後はJCAで購入するぐらいしかなかった。一方でチェスの洋書籍は高価で到底学生の小遣いでは購入できるものではなく、そのことが棋力の向上の足枷となっていたと感じていた。今では、Amazonなどでぼちっと購入できるが、当時親のクレジットカードを借りてイギリスのBatsford社に手紙を書き、書籍を購入していたことを鮮明に記憶している。よくもまあ、英語になっていない日本人の中学生の英語で購入できたものだと、またチェスの書籍のリストがBatsford社から送られてきたものだと、今もって不思議に思う。その時に購入した

Attacking the Kingという本を見て、チェスの棋譜を並べて初めて感動した（正直自分でチェスを勉強するのが遅すぎた）。

1995年度（越智部長→私）

1995年夏になると、私が部長となった。この前後の出来事といえば、部室の移動である。囲碁部や将棋部と違い部室の面で恵まれていたチェス部であるが、100周年記念棟の竣工に伴いバレーコート目の前の部室に移動することとなった。これまで広い部室の中でブリッツができていた環境からの大転換である。チェスをするにも、毎回教室を借りに行く必要があり、チェス部の良い点であった自習時間中や休み時間に気軽にチェスをさせるといった環境がなくなった。また、このタイミングで過去の部室にあった歴史ある壁の落書き、多くの宝物（ガラクタ？）が新部室への引っ越しの際に散逸してしまった。当時の壁の破片、写真など残しておくべき芸術（？）品を記録しておかなかったことは、一生の不覚である。残しておけば、ベルリンの壁ぐらいの値段で売れたであろうに。諸先輩方に謝罪してもしきれない。一方的に移動となった経緯は全くわからないが、新しい部室は休み時間に活動をすの部のことを全く考えていないような作りで、そこからの部の立て直しには相当苦勞した。

この時期の大きな話題としては、顧問の先生として廣瀬先生をお迎えしたことである。廣瀬先生は、2代前の中村さんの代の方々に熱心に勧誘していただいた後、私がチェス部の名簿を作成するときに先生の名前を勝手に加え既成事実化してしまった。以後、この変わり者の集まりであるチェス部を、加藤先生と二人で率いて行っていただけになった。2名体制となったことで、この後加藤先生の勇退時にも顧問の先生の引継ぎを混乱なく行えることになったのだと思う。私はすぐに引退してしまったが、廣瀬先生にはOBとして合宿に参加時にも多分にお世話になった。

私が部長となったときにはいろいろな事件があったと思うが、私の頭脳容量の関係上あまり覚えていない。当時の執行部としては途中から入部してくれた同期の立花さん、千秋さんにまた後輩にも文化祭の展示の担当も含め相当助けられ何とか次の世代にバトンを受け渡すことができた。引退の際に、ぜひチェス部からIMを出せるようにしてほしいと述べた記憶がある。この壮大な野望も、私が何か手伝ったわけではないが、実際に後輩の努力により実現できたことは本当にうれしい。

最後に

思い返してみると、私の代でチェス部を中学1年から高校2年まで続けたのは私一人と記憶している。また、私がチェス部に入った年がチェス部の20周年、引退した年が25周年と、部の歴史の中では厄年に当たる部分を担っていたことを考えると、いろいろ苦勞が必要な年に当たったのだと思う。実際に私自身がつい最近男の大厄を何とか乗り切ったことを考えると、そう思わざるを得ない。チェス部の最近の状況はほとんど存じ上げていないが、チェス部が50周年を迎えたということは何度も危機を乗り越えているのだと思うし、現在

もチェスを取り巻く環境を含めて危機が続いているのだと思う。しかし、ロスジェネ世代といわれた私自身が今まで何とか生きてきた中で、良いこと悪いことを凝縮したようなチェス部での5年間を経験できたことは非常に貴重であったと今になれば思うことも事実である。50歳を迎えたチェス部という一つの生き物が今後どのように生きていくのか、現役世代が今後も体現してくれることをOBとして楽しみにしていきたい。ここまで偉そうに私がチェス部にいたころの出来事を書いたが、ほかにもいろいろな出来事があった。例えば、合宿集合時に某氏が水泳帽をかぶって現れた事件があったり、中国将棋の駒の裏の模様を記憶するのが流行ったり、ボーリングでセミプロボーラーのようなスコアを出したりといろいろあったが、この辺りは実際の宴会の際のおつまみとしたい。

拙い文章の最後となるが、チェス部50周年おめでとう。

チェス部の思い出（1995－1999）

益本 宇一郎（2001年卒）

2022年の9月に原稿執筆の依頼を頂きましたが、私が麻布学園を卒業した次の年に30周年記念誌を発行しましたので、それからもう20年経つのかと、時の過ぎる早さを感じました。麻布学園を卒業後は東大チェスクラブに入部しましたが、あまり積極的に大会にでることもなく、チェスから離れていたのですが、子供がチェスをやりはじめ、チェス連盟の大会にも出るようになりましたので、これも何かのご縁かと思い、在学中の思い出を執筆させていただくことにしました。

私がチェス部に入ったのは、1995年の4月です。小学生の時に文化祭のチェス部の展示で、1年生などと対局し、周りの先輩からの助言などで勝って気をよくして麻布に入ったらチェス部に入ろうと決めていました（今でもそうかはわかりませんが、部員を勧誘する一つのパターンで、文化祭での重要ミッションでした。）。後で話を聞いたり、記念誌などを読むと、色々な問題があり、諸先輩が苦労されていた時期であったようですが、当時の1年生としては特に気づかず、チェスをやり、他のゲームやスポーツを好きな時に好きな人がやるという緩めの部活動を楽しんでいました。

夏合宿で執行部が交代し、高1の赤塚さんが部長となり、人数も出席率も高かった中3の方々とともに部を運営するかたちになりました。部室も旧部室から記念棟の今の部室に移動するなどの変化もあり、チェスにしっかり取り組む人が増えるなど、雰囲気は少し変わったと思います。私も色々な書籍を紹介してもらいながら指導してもらい、チェスに取り組み、JCA（日本チェス協会。今ある日本チェス連盟とは別の組織です。）の大会にも出るようになりました。今はオープニングについてオンラインのデータベースでいくらでも調べられますが、当時は詳しく調べるには、分厚い海外（確か英国）の本を輸入するしかなく、広い範

囲の定石が載っているBCO (Batsford Chess Openings) と私のメインラインのe4-e5のラインがのっているECO (Encyclopedia of Chess Openings) のC (確かAからEまでであった) を買って定石を研究し、大会でマイナーなラインを研究する時間などない社会人の相手に試したりしていました (今は逆の立場で、定石を忘れ序盤で失点することが多いです。)。

中2となり、人数はそう多くはありませんでしたが新入生も入ってきました。相変わらず部室に入り浸り、チェス、ゲーム、スポーツを楽しんでいました。夏には赤堀さんが部長になり、人数も多く、個性も豊かだった高1の方々がそれぞれの方向で活動を引っ張っていたため、昔の記念誌などを振り返ると、高1の方をまとめることなど、赤堀さんはかなり苦労されていたようですが、チェスを頑張る人 (高1では少数派だったかも)、ダブチェ・山手線ゲームなどをやる人、バレー・サッカーなどをやる人、アニメ・ライトノベルなど趣味に走る人など色々な人がいて、それはそれで活気があった時期だったと思います。私自身も上述した全てに何らか当てはまりつつ、好きなときに好きなことをやっていました。

中3となった4月には、本分であるチェスへの取組が弱いことや下級生の数が少ない (中1から中3までどの学年も安定的に来る人は5人いませんでした。) ことに危機感をおぼえた赤堀さんが勧誘に力を入れた結果、大量の新入部員を獲得でき、活動もさらに賑やかになりました。夏合宿で執行部が交代し、江端さんが部長になり、私も副部長になりました。高2の方々が抜け、高1の方でよく部室に来る人が少なかったので、江端さんは大変だったかもしれません。チェスについては、ブリッツが盛んに行われており、副部長として集計していましたが、週100試合以上の人もぼろぼろいるなど、かなりの数だったと思います。江端さんがスポーツ好きだったこともあり、外でバレー、サッカー、野球などをやることが増えた気がします。同じくボードゲームのオセロ部とサッカーをすることも多かったです。

高1になると、新入生勧誘、文化祭などのイベントがあり、執行部の一員として頑張ったような気がしますが、新入生は最初の仮入部などはそれなりにいたものの、定着した人は少なかったです。大量に入った次の代は、部室のキャパや多い代がかたまりがちになることもあり、少なくなりがちかもしれません (数年おきに大量入部する代がいるような気がします。)。夏合宿で江端さんの代が引退し、私が部長になりました。同学年からは岩崎くんがTD、黒川くんが会計、山岸くんが合宿、中3からは榎本くんが副部長になりました。私の代は、役職に入った4人が中1から入っており、途中で入部した重田くん (今のチェス部顧問)、塚中くんの6人で、人数は多くはないものの、それなりに出席率も高く、部の運営にも協力してくれたので、部長としては恵まれていた方かなと思います。榎本くんが副部長になるとき (井上くんと投票) や彼らが最高学年になるときの選挙については考えさせられるものもあり、その後榎本くんも含め苦労があったと思いますが、この頃まではあまり問題になっていなかったと思います。それまでと同じように、チェス、ゲーム、スポーツそれぞれを楽しみ、朝や放課後いつ来ても誰かがいるような部活になることを目標に運営していました。チェスについては、深い研究などはあまりされず、レイティング2000を超えるような人

は引退後に中2の代（馬場くん、中郡くんなど）が達成するまで出ませんでした。ブリッツは盛んでしたし、JCAの大会に出るよう積極的に勧誘し、私の代も引退時には1800代が3人になるなど、それなりに成果が上がったかなと思います。

高2では、前年度と同様、新入生勧誘などに努力しましたが、あまり人数を定着させることができませんでした。2年続けてあまり人数がいなかったのも、佐野くん（当時中2）や渡邊くん（当時中1）の代は苦労が多かったかもしれません。夏合宿で、榎本くんの代と一つ下の中3ながら3人が執行部に入った馬場くんの代に執行部をゆずり、引退しました。

その直後になるのですが、その前のジュニア選手権の成績で出場が決まっております、1999年9月にウクライナで開催されたChildren's Chess Olympic（16歳以下）に高2が3人（益本、岩崎、黒川）、中3から2人（中郡、山本）で出場しました。Artek¹⁶という場所で、クリミア南部の黒海に面した景色のいい保養地でした（ロシアのクリミア侵攻と現在のウクライナとの戦争でどうなっているのだろうと思ってしまいます。）。世界中からの代表とチェスを指したり（成績はぼろぼろでしたが）、交流することができ、非常に貴重な体験になりました。赤堀さんが部長のときにもロシア大使館を通じてロシアの子供とチェスをする機会もありましたが、このような国際的な体験をする機会がわりと手近なところにあるのがチェスの魅力の一つだと思います。これをもってチェス部の活動には顔を出さなくなり、実質上も引退しました。

振り返ってみると、中1から高2まであまりやってきたことは変わらず、部室に入り浸り、ブリッツをやったり、ゲームをやったり、スポーツをやったりしてずっと過ごしてきたのだなど、よく5年間同じようなことをやっていたなと思います。ただ、これは文字にしてみると同じようなことですが、当時の人たちがそれぞれの時のチェス部をよくしようとして活動していた結果、チェス部が私にとって居心地の良い場所になっていたということだと思います。

昔の記念誌などを読むと、それぞれの年代で問題が起こり、葛藤があったことがわかりますし、私自身も下の学年の結果を見て執行部選挙のあり方（ほとんど来ない人と主要メンバーが同じ1票でいいのかなど）に思うところがあったりしたこともあります。結果としてうまくいったことも、いい方向にいかなかったこともあったと思いますが、それが（狭い中高生だけの空間とはいえ）社会の現実です。生徒が自由に行動し、その結果について責任が伴うというのが麻布です。チェス部は、そういう意味でも麻布らしく、色々な関わり方をする人を広く受け入れる間口の広い部活で、浅く関わればそれなりに、深く関わればそれだけのものを得られる場所だったと思います。色々な結果を引くくめて、私はチェス部についてよかったと思いますし、中にはそう思えないような人もいるかもしれませんが、そのような人にとっても何らかの経験になっているのではないかと思います。

¹⁶ [https://en.wikipedia.org/wiki/Artek_\(camp\)](https://en.wikipedia.org/wiki/Artek_(camp))

今のチェス部をどのような場所にするかは今の人が関わって決めていくことです。小3の子供をつれて昨年の文化祭にお邪魔したときに、置いてあった部報をチラ見したら、色々と部の運営に関する思いを吐露するような寄稿もあり、なつかしく思いました。どんな方向にせよ、麻布らしく、自分たちの思いをこめていい場所にし、次の代に引き継いでもらえればと思います。

なぜオレはあんなムダな時間を・・・

篠田 太郎 (2008年卒)

麻布学園チェス部50周年、おめでとうございます。初代全日本チャンピオンが誕生したのは1968年、55年前のことだったと調べて知り、いち中高の部活動でありながらも、チェス部が日本のチェスの歴史の中でいかに大きな存在であるかを再認識させられています。また、毎年メンバーが入れ替わる部活動のバトンを50年にわたって繋ぎ続けてきた先輩、後輩の方々に心からの感謝と敬意を表したいと思います。

チェス部を引退したのはついこの前のような気がしていましたが、気付けば私も30代半ば、若い人と話す時には彼らにとって全然興味のない昔話や、古い人間の価値観の押し付けをしないように気を付ける年齢になりました。しかしながら、この50周年記念誌ではまさにその昔話を書いて欲しいというありがたいご依頼をいただきました。人々がOB会や同窓会を開きたくなるのは、ただ単純に久々に友人に会いたいというだけの理由ではないのだと理解できた気がします。せっかくの機会ですので、チェス部にまつわる私の三つの「ムダ」というテーマで、拙筆ながら当時のチェス部を振り返りたいと思います。

私は中1でチェス部に入りましたが、最初の一年間は活動にほとんど顔を出さない幽霊部員でした。何か理由があったわけではなく、ただ何となく行かなかったのです。中2になってクラス替えがあり、同じクラスになった池永くんが「お前チェス部だろ？一緒に行こうぜ」と誘ってくれました。何となく行かなかったチェス部はとても楽しく、すぐに毎日活動に参加するようになりました。当時のチェス部には電話連絡網があり、大会が近付くと家に電話がかかってきて出欠確認をしていました。チェス自体にもすぐにのめり込んだ私は、中2の6月に開催された快速選手権で大会デビューを果たしました。それから引退するまでの約3年間、麻布での生活はほぼチェス部一色となりました。チェス部に行かなかった中1の一年間が、私の一つ目の「シンプルなムダ」でした。ちなみに当時の麻布では全学年の全員の住所と電話番号が書かれた、今では考えられない電話帳が各年度の初めに配られていましたが、それを塾に売っている人がいるとかどうとかで、在学中に廃止されました。それに伴って、チェス部の電話連絡網も自然になくなったように記憶しています。

ところで、私は今もチェスを続けています。昔から変わらず、特殊な例を除けば、大学以降もチェスを続けるのは各代一人いるかいないかという感じです。ご存知の通りチェスの大会には年齢による出場制限がありませんので、大会では比較的年齢の近い先輩後輩から、チェス部の在籍期間がかぶらなかつた先輩後輩、何なら現役の方々とも接する機会があります。そのため、チェス部の関係者に会うというのは大会に参加する一つの楽しみです、中高の部活動の縁がこれほど長く残り続けるものはなかなか類を見ず、チェスの魅力の一つだと感じます。

チェスを今も続けている者として、一つの後悔があります。それはチェス部にいる間に、もっとチェスに打ち込んでおけば良かったということです。引退してから現在に至るまで、チェス部以上に恵まれた環境は見たことがないからです。現役時は毎朝7時40分頃に部室に着いて、始業時間の8時まで僅かな時間ですがブリッツを指しました。昼休みも部室でブリッツするために、毎日早弁していました。放課後もブリッツするか、マスター戦で長めの対局をしていましたし、帰宅してからもヤフーチェスやハンゲームでチェスに触れていました。歳も実力も近い人同士で毎日のように集まれるという意味で、チェス部は唯一無二の環境であり、全日本チャンピオンを多数排出するのも納得できます。当時は「ジュニア選手権＝麻布選手権」と言っても過言ではないくらい、チェス部以外では同世代のプレイヤーが少なかつたのですが、最近はチェス部以外のジュニアプレイヤーがたくさんいます。もっとももっとたくさんのかたを学べたのではないかというチェスプレイヤーとしての「痛恨のムダ」を感じると同時に、チェス部にはこれからもチェス界での存在感を發揮し続けて欲しいと願っています。

チェス部には「チェスが好きな人」と「チェス部が好きな人」が同居している、と当時よく考えていた記憶があります。毎日のように顔を突き合わせるわけなので、チェスが好きでもチェス部は好きじゃない、という人はどこかのタイミングでチェス部に来なくなっていたと思います。逆にチェスはそんなに好きじゃないけどチェス部が好きという人はたくさんいたと思っていて、では彼らはチェス部の何が好きだったのかと言えば、仲間たちと過ごすあまりにも不毛な時間だったのだらうと思います。

部室に来て全員がチェスをするわけではなく、またチェスをする人もその時間の長さはまちまちでした。さも熱心にチェスに打ち込んでいたかのように上で書いた私も例外ではなく、特に放課後の活動時間が長い土曜日は、人数が足りないもしくは下手すぎて繋がらないという理由でワンバウンドまでは認めるバレーボールもどきを楽しんでいました。ミスをした人がバレーコートを走って一周しなければならない「耐久バレー」も懐かしいです。他にもバレーコートでの思い出は多く、物理部無線班や生物部とバレーコートの陣取り合戦をしたことや、給水場の蛇口を引っこ抜いたせいで水が水平に噴き出していたのを、ビニール傘を盾代わりにして直そうとしていた人がいたことは今でも鮮明に覚えています。また、やたらと落ちているバレーボールを拾ってくる人がいたために、部室に10個くらいバレーボールがあつた時期もありましたし、サークル連合の部室監査をかいぐるため、部室の天井裏

にバレーボールを隠したり、他の部室に預かってもらったりしていました。前の人よりも大きな声でドラえもんとか叫ばなければ罰ゲームを受ける遊びや、有栖川公園の土管型の滑り台に何人詰まることができるかという遊び、一人の部員の周りを他の部員全員が手を繋いで囲んで走って回り、宇宙と交信するという遊びなど、どこからそんな発想が出て来るのか全くわからない奇行は枚挙に暇がなく、不毛という言葉すらもったいないほど不毛な時間でした。

「チェスクソゲー」が日常的に叫ばれる部室内でも、チェス部なのだからチェス以外は禁止すべきだとする「原理主義」と、チェスは飽きたから他のゲームをすることを認めろと主張する「世俗主義」のせめぎ合いが定期的に勃発していました。この紛争は合宿にも持ち込まれ、トランプやチェス以外のボードゲーム、携帯ゲーム機など、どこまでを合宿に持って行っていいかという、さながら「バナナはおやつに含まれるか」のような他愛もないトピックを真剣に議論していました。当時はカタンが流行っていて、麻布オープンの試合を怠慢ドロローにして「レッツカタン！」と叫びながら対局室を出て行った先輩の姿が懐かしく思い出されます。

他の世代の様子はよく知らないのですが、きっとチェス部設立当初から現在に至るまで、この不毛なイデオロギー闘争は世代ごとに優勢、劣勢を入れ替えながら続いているのではないかと推測します。そしてこれこそが、チェス部が50年も続いてきた秘訣なのではないかと思うのです。原理主義が世俗主義を駆逐してしまえば、人が集まらずどこかで代が途切れていたのではないかと思いますし、逆に世俗主義に飲み込まれてしまえば、「チェス」部である必要がなくなってしまうからです。現役の方々に何かを押し付けることはしたくないのですが、チェス部を潰さないで欲しいということだけは願っています。そのために、これからも不毛な闘争を続けてください。

どれをとっても喜と楽の感情だけで構成されているチェス部の思い出の中で、唯一しんみりするのが夏合宿で迎える「引退の辞」でした。4泊5日の夏合宿の最後の夜に、引退する高2が一人一人時間制限なく思いの丈を伝え、後輩はそれを正座して聞くというシリアスなイベントで、普段はおちゃらけている先輩の珍しく真面目な顔と、先輩たちがいなくなってしまう寂しさと足の痺れに多くの部員が涙するのです。最後に一つ、引退の辞に関する思い出をこの記念誌に刻み込んで締め括りたいと思います。

私は二つ上の先輩たちが大好きでした。彼らの代には特に面白い人が多く、他の部と兼部していたため最後の夏合宿に参加できなかった青木さんは、自分の引退の辞を何故か無地のジグソーパズルに書いて渡したため、彼らの代の引退の辞はまずそれを完成させるところからスタートしました。いなくなってしまう先輩が好きであるほど寂しさは大きくなり、加えて泣き虫だった私は、引退の辞が始まる前から既に涙ぐんでいました。引退の辞が始まる少し前、執行部の集まる部屋で、大西さんに引退すると寂しくなると伝えると、彼は近くにいた虫をパッと捕まえ、グラスを被せて言いました。「この虫を俺だと思って育てろ。」

かりました！と元気よく返事をし、引退の辞へ向かいました。二つ上の先輩たちは、一つ上の代（南條さんや小島さんたちの代）に部内タイトルを独占され、獲ることができなかった無念を語りました。疲れるほど泣いた引退の辞が終わり、部屋に戻ると、グラスの中の大西さんは既に息絶えていました。

この思い出には、私にとってのチェス部が凝縮されています。楽しさとしょうもなさの意味不明さと、ずっとは続かない寂しさと、各々が隠し持つチェスに対する真面目さ。この「あの頃にしか味わえないムダ」が、恐らく青春なのだと思います。あらためて、50周年おめでとうございます。麻布学園チェス部が、これからもずっと続いていきますように。

青春時代の思い出（+やらかし）

小林 厚彦（2011年卒）

チェス部設立50周年おめでとうございます。私の代は50周年記念時点で30歳になりますが、お父さんともいえる代からチェス部が続いていたことに改めて歴史の凄さを感じています。50年の内、私が知っているチェス部は5年とほんの一部でしかありませんが、私が在籍していた当時のチェス部の様子、思い出を一部写真も交えながら振り返っていきたいと思います。

まず簡単にチェス部入部の経緯をお話すると、私自身は小学校時代将棋中心で、麻布入学後も将棋部に入るつもりでしたが、入学後のクラス自己紹介で私の出席番号1つ前の小口くんが水泳部とチェス部に入りたいと話していて、私は将棋部だけで紹介するつもりでしたが、チェスもルールだけは知っていたので、将棋部とチェス部を見たいと自己紹介したのがそもそものきっかけでした。

1週目のレクリエーション期間で小口くんと部室を回ったのですが、将棋部の部室には将棋盤も出さずにトランプをやってる4人しかおらず、部室間違えたと思って隣の部屋の窓枠から覗いたのがチェス部で、そこには小島さんや南條さんを中心とした黄金世代の方々を中心に活気に溢れており、そんなこんな偶然も重なり、将棋部には入部せずチェス部だけに入部することになりました。

当時は毎日朝やお昼休みにも部室の鍵が開いていて練習できる環境にあり、また放課後の活動では部内ランキング戦のマスター戦が行われていて、教室を借りて真面目に試合をしていた記憶があります（一部の方はアーチェリー部がよく練習していた部室棟階段下の凹みで試合をしていました）。

チェス部に入った当初からチェスのオリンピック日本代表として戦う先輩を見てきていたこともあり、そこを目標に



頑張っていました。2022年のチェンナイオリンピックで初めて日本代表に選ばれて、試合ではGMを倒すこともでき、チェス部50周年の節目にようやく念願が叶う形になりました。

思い出話として入部当初衝撃的だったのが、活動内容をまとめて発行する部報で、初回が黄金世代の方々の引退部報だったわけですが、高2の石田さんの部報がほぼ2次元の巫女特集だったり、石田さんと同じ代で当時全日本チャンピオンの小島さんの部報がカスパロフと美少女アニメ「フルーツバスケット」のヒロインどっちが好き？という表紙で始まっていたりと個性豊かで面白い部報が多かったです。

さらに外せないのが、放課後でのサッカーやバレーボールで、今では部室前のバレーコートは体育館が建ってしまいましたが、当時はバレーコートが広々とあり、部室入口付近の箱や天井裏にはいつでも遊び道具が仕込まれていて、一時期はほぼ毎日外で遊んでいた気がします（生物部とチェス部のほうがバレーボール部よりバレーが上手いという噂もありました）。



またチェスの活動では、当時JCAの大会では麻布チェスクラブから10人以上が大会に参加していて、1年の時に初めて参加した大会でも、先輩から「JCAおじさんは時間落とせば勝てるよ！」という助言に従って、レート1700のおじさんに勝てたのは良い記憶です。

さらに大会後には毎回打ち上げに行っており、特に蒲田駅近くのサイゼリヤやポポ・ラ・マーマ、万豚記等によく行っており、お店側としては大変迷惑だったと思います。

例えばサイゼリヤでは、お店側も長居されては困るので、ゲーム禁止と書いてあるのですが、チェス部員は気にせずチェス盤を出し始めました。お店側も困った顔をしてゲーム禁止なのでと注意したところ、南條さんが「羽生さんと森内さんが将棋をしていたら止めるんですか？」という名言（迷言？）がとても記憶に残っています（店員に「ルールはルールなので」と言われ流石に片付けていました）。

私の代についても少しお話しすると、同期は10人在籍していて学年別でみても多いほうでした。歴代の先輩達はチェスが強い方が部長になることが多かったのですが、先輩達が抜けて私達が最高学年になるころにはチェスがチ勢よりは楽しんでやりたいという部員が多かったり、ライバルだった小口くんが親の赴任の都合で一時イギリスに行ってしまったのもあり、私は周りの反対を押し切って部室管理補佐（部室の掃除係）になり、部長にはイベントを開くのが得意な浅井くんに就任してもらってたりしていました（今回載せている写真も全て浅井くん提供で、私が部長だったら残っていたか怪しいので結果オーライと思っています）。

思い出に話を戻すとチェス部のビックイベントが年に春と夏に開かれる合宿でした。

当時はチェスにも遊びにも全力で、チェス面では90分+40手で30分加算とそれなりに長い時間でご飯等に間に合わない時は封じ手にするなど気合の入れようで、また同時並行で行っていたブリッツ大会は合宿参加者全員と戦うのですが、ブリッツやるくらいなら遊んでしまうので、半分くらいの試合を残して最終日になってしまいそこで全力で試合を消化していた思い出があります。一方の遊びでは夜にはみんなで集まって、カタンといったボードゲームやピコピコハンマーを使った人狼風ゲームの探偵でよく遊んでいて、夜中まで全力で遊んでいました。



合宿での印象的な思い出を振り返ると、中学1年の春合宿のチェス大会で私vs小口というライバル対決が組まれていて、その際に「負けたほうは川で泳ごう」という約束を冗談でしていてなんとか私が勝利しました。するとそれを聞いていた先輩方が気を利かして、1日自由時間のフリーデーで合宿地周辺を散策することになったのですが、コースに川があるところを選んでいて、みんなが「あれ小口泳がないの？」という空気になったところ、当時OBとして参加されていた石田さんがいきなり服を脱ぎだして泳ぎ始め、結局それに合わせる形で小口くんも3月の極寒の川の中をパンイチで泳ぐことになりました（なお小口くんはタオルや着替えも何も用意してないのに対し、石田さんは全て用意するという計画的犯行）、一步間違えると自分が泳ぐことになっていたのが危なかった。

また中学2年の夏合宿のフリーデーでは合宿地近くに牧場があると知った当時高1の先輩2人と中学2年の同期6人で向かうことになったのですが、途中で牧場への道を外れてしまい草の生い茂り方が膝下まできて、これはおかしいと思った私と同級生の加藤はそこで引き上げたのですが他の6人は突き進み、その後1時間後くらいに「遭難した地図を送ってくれ」と電話があった時はだいぶ焦りました（結局なんやかんや牧場にはたどり着いたようで数時間後に自力で帰ってきましたが、反省の儀として部長を引退したばかりの篠田さんにみんな仲良くピコピコハンマーで叩かれてました）。

そんな感じでなんとか危機回避していた私も中3の春合宿では失敗していて、いつものように夜までボードゲーム、探偵と全力で遊んでいたのですが、次の日の午前がとても眠かったので、試合1時間前に対局席の前で寝ていました。するとみんなの「10,9,8,7,6,5,,,」という声が聞こえるので飛び起きたら、既に寝てから2時間半経過していて、ちょうど時計が残り4秒（1手毎のインクリメントなし）という状況で、時間落ちで負けたこともありました（なんやかんや負けはその1敗のみで、大会自体は優勝しました）。

また合宿では毎朝7時起床で体操や灯台守をするのが日課でしたが、私達の代の引退&顧問の平野先生が定年退職といった合宿の最終日前日にみんなでお手製流しそうめんをやった

りと色々はしゃいでいたわけですが、次の日の朝には私含めた部員が全滅しており、起きたら8時といった状況で、みんなで平野先生に謝罪したのも今となっては良い思い出です（平野先生、その節は誠に申し訳ありませんでした）。

ここまで長々と思い出（とやらかし）を振り返ってきましたが、今でもチェス部の面々とは交流があり面白おかしく遊んでおり、かけがえのない仲間達と出会えるきっかけとなったチェス部に感謝しながら、今後益々の繁栄を願っています。



谷間の代から見る麻布学園チェス部史

堀 翔太 (2016年卒)

麻布学園チェス部の創立50周年にあたって記念誌を作成することによって、自分が在籍した2010年から2014年までのチェス部が如何様であったかを思い出せる限り書き連ねていこうと思う。

自分がチェス部に入部したのは麻布中学入学直後の2010年4月だった。入部した理由は「体力を使わない頭脳ゲーム的なものなら俺でもできそうだな」「でも将棋は入学時点ですでに経験のある奴が多そうだ」「チェスならそんなに気後れせずに続けられるだろう」くらいのもので、元々チェスに対し造詣が深かったわけでもなければ麻布学園チェス部が日本代表レベルの選手を輩出していることも知らなかった。当時の部長は36代の窪木さんだったが、入部から半年ほどで引退されてしまったので言葉を交わした思い出もあまりない。36代の引退の際、空気感の分かっていなかった自分は贈る色紙に何やらふざけた文言を書いてしまい、それを後々少し反省したのは覚えている。

37代の部長には渡辺さんが就任した。記憶する限りでは自分が現役の間に国際試合に出場した唯一の部員である。当然チェスが強い人だったはずなのだが、残念ながらその腕前を詳しくは語れない。当時の自分には部長の強さを実感できるだけの棋力は全く備わっていなかったからだ。その頃の自分といえはすっかり部室にも居つくようになり、盤を挟んで定跡やプロブレムについて話し合う先輩たちを横目に見ながら毎日過ごしていた。そして、自分もそのうちそんな風にチェスが分かるようになるのかなと他人事のように考えていたのだった。

続く38代は部長の森さんと会計の半田さんのツートップという印象が強い。どちらが言い出すともなく、様々な改革をふたりで実行していった。中でも最たるものはふたつある。ひとつは、参加者不足から形骸化して名前だけが残っていたマスター戦の正式な廃止であ

る。廃止とともにより部員が参加しやすいようなカジュアルな試合の機会を設けようということで、ジミー杯と呼ばれる新たな部内大会が開かれるようになった。もうひとつは部室の様相替えだ。それまでのチェス部の部室は土足で入れる場所であり、ほぼ密室ゆえに舞い立つ砂埃がどことなく不衛生な雰囲気醸成していた。ふたりはこれを対局のための環境として不適切だと唱え、カーペットや下駄箱を導入することでチェス用の空間と土足の空間とを明確に区切ったのである。

兵藤さんが部長となった39代は、直近の先輩として自分が最もお世話になった代だ。ことチェスにおいては、自分はその知識のほとんどをこの代の三井さんに教えていただいたと言っている。これまでの代に比べてOBとの関わりも多く、先輩へのリスペクトの大きさとチェス部への愛着の深さは後輩の自分からでも見て取れた。チェス部の最初期メンバーの息子だということが関係しているのかは分からないが、特に会計の松永さんはOBが遺したものを後輩に引き継ごうという意識が強く、部室の隅の隅に押し込まれて劣化していた過去の部報『Wood pushers』をスキャンしてデータ化することを計画し、『Wood pushers』自体も復活させて合宿の際に発行した。他の方々についてもとにかく同輩間の仲が良好で、積極的に活動に参加している人が多かったように思う。そのため人数は十分、平均的な棋力も高く、部内の役割の分担もきちりできているというかなり理想的な代だった。しかし、39代には直面している大きな問題もあった。

それは、後輩たちの棋力や意識の低下である。39代が理想的な代である一方で、40代はなんとなくチェス部に居場所を見出した奴らの寄せ集めといった具合で、自分も例外なくそんなふらふらした部員のひとりだった。アニメやカードゲームの話をするために放課後部室に寄り、先輩の放つ「ちゃんとチェスも指そうよ」という空気を感じ取って少しだけ対局して帰る、そんな部員である。もちろん我々より後輩にはチェスに真摯に向き合っている部員もいたが、次に部長を出す代がそんな体たらくなのでいい影響は与えていなかっただろう。

そんな代でも「比較的まし」とのことで自分が40代の部長を襲名する。つい最近まで部の棋力低下の原因だったような奴が、部長になった途端いっちょまえに部の意識向上を目指すぞと碌なことにならない。苛々が募るばかりで自身にとっても周囲にとってもあまりよくない1年だった気がする。この期間においてはチェス部の50年史に記すべき情報はないだろう。辛うじて部の体裁を保ちながら41代に引き継いだ。その後は42代の吉田や43代の小柴が徐々に部を立て直したと聞いている。

ここまでが自分が現役時代の頃のチェス部である。「そんなにチェスに真剣に向き合っていない、谷間の代の部員が書いたんだな」と思われただろう。実際、自分も引退したときには今後チェスに関わることはなさそうだと考えていた。しかし不思議なもので、その後自分は進学先の大学でチェスサークルを立ち上げることになる。他大学のチェスサークルに所属している麻布生と連絡をとって、今でも少しばかりチェスと関わっている。当時引け目でしかなかった棋力もほんの少しだけ改善し、大学からチェスを始めた後輩を偉そうに指導す

している。その中で「あ、ディレイド・アラピンだ。半田さんが指してたな」と思ったり「ダッチのストーンウォールを教えてもらったのは三井さんだったかな」などと思い返したりする度に、麻布学園チェス部が意外にも深く自分の中に根差していることに気付かされるのだ。そして、それは部が紡いだ半世紀の歴史の中に自分もいたことの証明なのだと思うと、自分のような部員でも麻布学園チェス部のOBであることを少しだけ誇りたい気持ちになるのである。

最後にはなったが、本来部長だった自分がすべきところを、代わりにOB会幹事を引き受け記念誌の作成に携わってくれた同輩の高田善雄に深く感謝する。



チェス部の歴史 2010年代後半編

松山 紘也 (2021年卒)

はじめましての方ははじめまして。2021年卒の松山紘也です。

私は2015年の4月、麻布の入学式の翌日、部活オリエンテーションのすぐ後にチェス部に入部したという、とてもチェスオタクな中学生でした。最終的に2018-2019年の部長を務めさせていただきました。

簡単な自己紹介はここまでにして、ここからは振り返りをしていこうかと思います。

2015年。当時の部長だった鈴木海登さんは、後輩思いの極みみたいな先輩でした。チェスをするのはもちろんのこと、文化祭準備期間中の暇な時間は、部員とジェンガをして罰ゲームで百味ビーンズを食べたり、文化祭後の打ち上げにバーガーキングを奢ってくださいたりしてくれました。同じく最高代の千葉さんは入部した私にすぐ「まっつん」というあだ名をつけてくれて、私に同輩がまだ少なかった中で、チェス部をとても居心地の良い空間にしてくれました。

当時のチェス部は（というかこれから紹介する年度もそうなのですが笑）、チェスの棋力向上というよりも部活の楽しさに重きをおいて、部活動の終盤は部室棟サッカーやボードゲームをするのがお決まりになっていました。少なくとも5時まではチェスをやれよ、という意味の「五時迄チェス」という格言は今でも壁に貼られたままだと思います。

2015-2016年。当時の部長である吉田晴貴さんはチェスも強く、クールな先輩でした。部長の吉田さんおよび当時副部長だった小柴怜朗さんの二人が全日本選手権に出場するとい

う嬉しいニュースがありました。一方、人手不足でその代の文化祭の出展をやめることになり、私も非常にショックでした。

チェスの練習に関しては、平日は不定期で15min+10s/手ほどのタイムコントロールで部内戦を行い、土曜の午後は毎週50min+30s/手の試合形式の対局を行っていました。他の対局は大体が3分2秒のブリッツでした。タクティクスはたまにみんなで解くということはありませんでしたが、定石研究はみんなでやるということはほとんどなく、やる気のある部員が本棚から本を持って帰って、家で勉強するという形でした。



部内戦の様子。(2016/11)

盤面を見ればわかりますが、部内ではe4プレイヤーが多い傾向にありました。

この頃、私は部室で同輩の宮城太一とともにアグリコラというボードゲームにハマっていた記憶があります。

2016-2017年。当時の部長である小柴さんは、チェスが強くてイケメンで気さくという化け物みたいな先輩でした。

当時の合宿は、昼間の対局が白熱するのはもちろんのこと、夜はボードゲーム、卓球、(麻雀)、スマブラなどで大盛り上がり。探偵は、後輩にあまり馴染まなかったのが残念でしたが、同輩には人気でした。また、OBの小島慎也さんに来ていただき、普段の練習では得ることができないようなレクチャーや、同時対局をしていただいていた。昼の部内戦は、いつも小柴さんが優勝していました。ただ、合宿先での引退の辞で、小柴さんが、当時の中一と関わりが薄かったと反省を述べていて、部のことをよく考えているのが伝わって、感銘を受けたことがとても印象に残っています。

2017-2018年。当時の部長である矢野祥睦さんは、かわいい先輩でした。文化祭での女装もばっちり似合っていました。ひとつ上ということもあり、とても仲良くさせていただきました。

この頃から徐々に部員の棋力・レーティングが上がってきた気がします。引退した吉田さん、小柴さんの最終レーティングがそれぞれ1700台、1800台だったのに対し、現役部員は

矢野さんの1400代が最高と、先輩の後に続いていけていませんでした。それが、私松山をはじめとして、一つ下の石川太一、二つ下の牛山創太郎、途中から入部した一つ下の長瀧航太が切磋琢磨しながら伸びていきました。最終的に引退時に私が1978、長瀧が1800台まで行き、一時期よりもチェスの強い部になったと思います。

2018-2019年。当時の部長である私は、どんな部長だったのでしょうか。本当のところは将来の記念誌を執筆する後輩に聞いてみないとわからないですが、なるべく後輩のしやすい空間、そして後輩にとって話しやすい先輩になることを心がけたつもりです。

この1年の思い出で大きいのが、文化祭でした。毎年文化祭は、お客さんにチェスのルールを教えた後対局するというものですが、その年はそれに加え、オリジナル部誌「チェッ壁」（名前は某英単語帳のパクリ）を販売することにしました。



チェッ壁を部員で製本する様子。(2019/4)

表紙の「72nd麻布学園文化祭」が「72th」になっているのは完全なミスです。

その試みもあって、展示審査は生物部に続いて一次審査を2位で通過できました。その後は同輩の宮城や森安などに助けられながら、部誌も見事完売することができました。文化祭期間の頃は、5、6日連続でサイゼリヤに打ち上げに行きました。

また、四つ下の新生がたくさん入部してくれたこともあり、引退合宿は普段15~20人程のところ、30人越えを記録しました。このせいで、朝起きてやる「全方位だるまさんがころんだ」の円が肥大化し、カオスと化しました笑

一方部長である私の1番の悩みは、「スマホに夢中な後輩をどう指導するか」でした。

スマホ自体は私が中一の頃から普及していましたが、部活中に携帯ばかりいじる同輩、一つ下、二つ下はいませんでした。それが、三つ下、四つ下の後輩になって、そういった部員が増えてしまいました。執行部のミーティングでもたびたび議題に上がりましたが、「うちらも中学生の時はきっと非常識なことやってただろうし、中学生なんだからしょうがない部分もある」といった意見の一方で、「ボードゲームは先輩後輩間の交流に有効だが、部活中にスマホをされたらどうしようもないし、厳しく注意すべきだ」と意見は交錯。私は後者の

意見で、中一に厳しくいうも、まともに聞かず。これは、「チェス部を居心地の良い場所に」という目標のもとで、上下関係をなるべく取っ払おうとしていた結果、先輩の威厳が損なわれていたチェス部の状況にも問題があったのかもしれない。結局この問題は私の代で解決できずに後輩へと引き継がれることになりました。スマートフォンという機器の扱いは今後も難しい課題になるかもしれません。。

私のチェス部の回想はここまでです。ただ、私が引退してから半年後、コロナウイルスが出てきて、思うように部活ができない状況が続いたそうです。部活動の停止によって新入部員の勧誘ができていなければ、部の存続すら怪しくなるかもしれません。どうか後輩たちには、この辛い状況を乗り越えて、この歴史を紡いでもらえれば、OBである私にとっても嬉しい限りです！



私の代の引退合宿。(2019/8)
この合宿を最後に、コロナで合宿が中止されたそう、、

チェス部の回想

朽久保 仁 (H1)

第49代目部長の朽久保仁です。今からチェス部に所属していた（今も所属しています）時の回想を自分が中一のころから順に書いていきたいと思います。

中1の1学期2学期に関してはあまり覚えていないことが多かったのですが、印象に残っていることとすれば、夏合宿と昼に部活をしていたことです。夏合宿で特に印象に残っているのは「探偵」というゲームと自分の対局です。どちらも少し苦い思い出です。まず対局についてです。45分+10秒（確か）で7戦対局しました。この時2ポイントしか取れなかったうえ、同級生にぼこぼこに負けてしまったのをよく覚えています。今でも時々思い出して本当に悔しくなります。

次に「探偵」というゲームの思い出についてです。探偵というゲームについて簡単に説明すると、トランプカードにより、真犯人と犯人、探偵という役職を決め、探偵が犯人と真犯人を当てるゲームです。。しかし、僕はカードと役職の組み合わせを間違えてしまい、探偵の役職であったのにもかかわらず、犯人の役職だと思ってしまい、犯人と真犯人の顔を見てしまいました。しかもそれを黙ったままにしてゲームを進めてしまったため、ゲームは台無しになってしまいました。これは今でも後悔しています。また、この頃は昼に部活をしていました。昼休みに部室棟にいて、チェスをするのがまだできていました。今はコロナの影響で部室が使えないためこのようなことができていませんが、この頃は昼の時間のほうが放課後に行うチェス部の活動よりもより活発的にチェスをしていたと思います。先輩から、簡単なエンドゲームのやり方を教えてもらったのはいまでもよく覚えています。

3学期に関しては僕はデュエマというカードゲームにはまってしまい、あまり部活に行かなくなってしまった時期でした。しかし同時に初めてチェスの大会に出たタイミングでもありました。きっかけは先輩に大会に出ることを誘われたことでした。初めて出た大会はクリスマスチェスパーティでしたが、5戦やったのにもかかわらずBYEでしか点を取ることができなかったという悲惨な結果でありました。それでも大会に参加をするきっかけになっていたのだと今では思います。その後も立川の大会などに参加してみましたが、結果は振るわなかったです。

そうして僕が中2に上がるころに新型コロナウイルスのパンデミックが起り始めました。そのため、学校は基本リモート授業でした。そのため、学校での部活動は行えていなかった上に、チェスの大会（オンラインを除く）は中止になってしまいました。しかし、そんな状況とは裏腹に僕はこの時期にオンラインでの対局でチェスにはまるようになっていきました。今までは部活があったのであまりやっていなかったが、リモートになって暇になったのでLichessやChess.comなどを用いてやり始めるようになりました。正直この時期がなければ今の僕のチェスの強さ（それほど胸を張って言えませんが）はないし、部長にもなっ

ていなかったと思います。当時、部活動はオンラインで行われようとしていましたが、チェス部が緩い部活であったことと、ボードゲームなどの他の遊びを行うことができないという点からあまり人が集まることがなく、一、二回ぐらいしか行われませんでした。やはり、直接学校に集まって部活をやるということが大切であると思います。

中3の前半のときもコロナの影響があり、部活が思うようにできなかった時や大会が流れてしまう時もありましたが、それでも中2のときよりは、かなり楽しんでいたと思います。部活では主に、チェスをしたり、カタンなどのボードゲームを中心に活動をしていました。後半になるとコロナ情勢も徐々に収まり、大会が通常通り開催されることが多くなりました。なので、僕も本格的に大会に出始めたタイミングでした。部活は少人数での開催が多くなったもののそれでも部活に参加していたため相当僕自身は楽しんでいたのでと思います。1点悔やむことがあるとすれば、このタイミングで後輩のだれかをチェス部の大会に誘うべきであったということです。大会に参加することはチェススキルを高めるのに必須なことであると思うので、こういうのを早めにやっておけばよかったと今では思います。

そうしていつの間にか高1になっていました。高1の前半の思い出として残っていることはやはり夏合宿と文化祭だと思います。コロナの影響で中2、中3と夏合宿をすることができなかったのですが、高1になって夏合宿をようやく、再開することができるようになりました。この夏合宿では長野の志賀高原に泊まりに行きました。例年は4泊5日なのですが、コロナの関係で3泊4日となりました。また、僕が中一の時参加した夏合宿の時にはかなりの大人数だった記憶があるのですが、今回の夏合宿では12人での参加と少し寂しい人数であったなと思っていました。しかし、他学年との交流するという合宿としての目的を果たせた楽しい合宿になっていたのではないかと思います。個人的にも対局で全勝することができて、前回の合宿での大会の屈辱を晴らすことができたのでその点は満足しています。

また、思い出として残っていることは花火です。毎年、夏合宿では花火をしていると思いますが僕としては久しぶりの花火であったので中1の時にした花火の事を思い出して懐かしい気持ちになりました。さらに、合宿で次の役職に当たる人を決めました。これまではGWの文化祭を経て、合宿で引退式を行ってききましたが、今季は文化祭が合宿のあとに来るので、引退式ができません。そこでこの時次期役職決めだけを行ったのですが、部長に立候補する際に少し緊張したのが印象として残っています。

また、文化祭も通常のゴールデンウィークでの開催はできなかったものの、お客さんを通常通りに入れての開催をすることができるようになりました。チェスは将棋・オセロと比較してもマイナーであると思っていたことと、中1の時以来の活動であるため、あまり多くの人に来るとは思っていませんでした。しかし、実際に来てみると文化祭に来ていただいたOBの方たちに協力してもらわないといけないぐらいの方にご来場いただきました。文化祭はある程度チェス部員が集まる目処をたてて臨まないといけないと感じました。

文化祭が終わった後に引き継ぎが行われ、僕は部長になりました。

部長として印象に残っていることは、近くにある西町インターナショナルスクールのチェス部に誘われて、チェスをしに行ったことです。きっかけは西町のほうに僕が大会で知り合った方がいて、その人に誘われたことでした。これはチェス部としておそらく初の試みだと思うのですが、チェス部は普通の高校だとあまりない部活なので、こういう交流はとても大切だと思っています。しかし、僕もその知り合った方も来年ぐらいには部活動を離れるので、連絡を取るのが難しくなると思いますが、続けてもらえるといいなと思っています。

現在、2023年の文化祭の準備も進めています。一次審査への応募も行いました。案を考えるのにとても苦労しました。実施する内容としては例年と変わらずチェスをするだけですので、展示内容の説明自体は簡単です。しかし、内装や外装とそれらのモチーフについて考えるのがとても大変で、おそらくこの点に考える時間の9割以上割いています。事前にこの点については部員と話し合っておいたほうが良いと反省しました。まだ結果が帰ってきていないので受かっているかどうかはわからない状況なのですが、いずれにせよ今年も参加する予定ですのでご来場いただくと幸いです。

特集「麻布の丘から世界へ飛び立つ」

「あの頃のチェス部」の中でも随所に言及があるように、歴代のチェス部員の中から世界へ雄飛したチェスプレイヤーは少なくない。ここでは早くから世界を見据えてチェスに取り組んでこられた中村龍二・小島慎也の両氏に、「麻布」と「世界」とのつながりが実は驚くほどシームレスであることを、ご自身の体験を踏まえて紹介していただいた。

麻布チェス部とチェスとロシア

中村 龍二 (1996年卒)

麻布チェス部50周年おめでとうございます。自分が現役のときに20周年の式典を実施したことを考えると時が経つのは早いなと月並みですが改めて感じました。改めて50周年の機会に、自分と麻布チェス部だけでなく、そこから広がっていったチェスに力を入れたことやロシアに留学したことを、20年以上の時が経ちますが振り返ってみようと思います。

麻布チェス部は、中学一年生の終わり頃に入部しました。クラスで一緒の竹内君に誘われて始めたものの、ブリッツでぼこぼこにされていました。暇で他にやることもなかったのと負けず嫌いだったこともあり、休み時間や放課後に部室に通い、ブリッツをひたすらやってみようとか強くなろうともがいていました。当時は、2年先輩の松尾さんが強かったこともあり、本格的にチェスをやるのならばJCA（日本チェス協会）に入会してチェスをするという流れが自然とできていた気がします。部室の黒板にはJCAのレーティングが上から書かれていて、いつかはこのリストに載りたいなと思いつつも見ていました。

JCAに入会したのは確か中1の終わり頃で、当時は池上にあるチェスセンターで開催されていたトーナメントに先輩に誘われて参加したのが初めてだったと思います。ここでも自分とはとにかく弱くて、よく負けていました。一番悲しかったのは、全日本ジュニア選手権に初めて参加した際に、Byeの0.5pt以外、全敗。この子には勝てると思ったのにと思われていた小学生の子にも負けて、周りからもまさか負けるとは思わなかったよと言われて、泣きながら帰り道を歩いていったのを今でもよく覚えています。

池上は自宅から近い（バスで30分以内）ということもあり、チェスセンターにはほぼ毎週のように通っていました。池上のチェスセンターの扉を開けると、ドアに付けられたベルの音になり、受付の方と挨拶を交わしたら、真っ先に右手にあるチェスの本のコーナーに行き、新しい本がないかなと探しながらひたすら立ち読みをする。しばらくしたら、佐藤善起さんや袴田栄治さんなどの常連の方と試合をして勝ったり負けたりを繰り返す。そんな週末を中学時代はずっと送っていました（チェスセンター受付の方には、毎週のように通っていたので良くしていただき、よく飲み物をごちそうしていただきました。）。

大会に出るようになるとチェスへの取り組みは、チェスの大会に出ることや自分でのトレーニングが中心となって、麻布チェス部での思い出で、覚えているのはみんなと雑談したり（毎晩のように恋人同士かというくらい竹内君や田中優毅君と電話していました）、バレーボールしたり、有栖川公園で遊んだり、文化祭の準備をしたり（全日本と毎年日程が重なるのでそんなに参加できなかったが）試験前で部活をしなくなるとボーリングや卓球をしたりとチェス以外のことを真っ先に思い出します。それはそれで非常に楽しく、ここでは書ききれないほどの思い出が沢山あります。。。

とはいえ、麻布チェス部でチェスをやっていなかったわけではなく、マスター戦と東麻戦の2つについては、とりわけ真剣に戦いました。マスター戦は日程調整が面倒だったものの（幽霊部員の人とは試合を設定するのが大変。。。）長い持ち時間で封じ手ありの本格的な棋戦でした。JCAの大会ではあたることがあまりない部員の人とも真剣な試合ができるのが楽しかったのを覚えています。東麻戦は、その当時チーム選手権がなかった中で麻布チェス部として対外的に戦う数少ない機会だったので気合が入りました。学生強豪の渡辺暁さんと試合ができる機会だったので、頑張って望みましたが、残念ながら暁さんには東麻戦では全然歯が立ちませんでした。

チェスの大会に話を戻すと、はじめは負けてばかりだったものの、タクティクスや序盤を勉強して少しずつ勝てるようになり、中3の頃には、レーティングも伸びてきて1600くらいになってきました。当時JCAは積極的にジュニアを海外大会に派遣する方針で、すでに松尾さんもアジアジュニアに参加しており、海外大会にいつか自分も参加したいという思いを持っていたところでした。その時に、自分と同級生だった西尾君、田中優毅君、斎藤孝祐君の4名が海外のジュニアの大会に派遣されることになり、無邪気に嬉しかったのを覚えています。派遣に向けては、フィリピンからIMのRamos Domingoや元日本チャンピオンの西村裕之さんにコーチとなってもらい毎週チェスセンターでトレーニングをしてもらい、試合の分析やおすすめの本を教してもらったり、夜ご飯をごちそうになってチェスの話を聞いたりチェス漬けの日々を過ごすようになってきました。

初めて出た海外大会はカタールのドーハで行われたアジアジュニア選手権、20歳以下と16歳以下の2つのカテゴリーがあり、自分が20歳以下に参加し、斎藤くんが16歳以下に参加しました。自分も斎藤くんも初めての海外だったものの、ドーハは直行便がなく、乗り換えのインド・ムンバイ（当時はボンベイ）の空港で12時間以上トランジットで待たされるという過酷な旅でした。苦勞してドーハにたどり着いたら、とにかく暑かったことが記憶にあります。周りは、全くわからないアラビア文字だらけ、数字さえ読むのが難しい状況だった中でショックを受けながら到着したホテルが、さすがは中東で超豪華なホテルだったのを覚えています（その後のジュニア大会の中で一番豪華なところでした）。大会で出会ったアラブのチェスプレイヤーの人は、民族衣装（白くて長い服）を着て、指には大きな石のついた宝石をして香水の匂いを振りまき、さらには髭をはやして、とてもジュニアのプレー

ヤーには見えなかったことなど。。。異文化に圧倒されたのを覚えています（でもその後ラブ世界を身近に感じるようになりました）。

チェスの大会は自分が出た20歳以下の部は、2400以上のプレーヤが何名もいたり、その時はURでも後にGMになるような人もいましたし、斎藤君が出た16歳以下の方はFIDEの世界チャンピオンになったKasimdzhannovも参加しているなど、今から思えば無謀とも思える挑戦でした。結果は、当然といえば当然で、自分はByeの1ポイントを除いて全敗、一方の斎藤くんは得意のSicilian Sveshnikov（当時はPelikanバリエーションと言っていた）で成績好調で勝率5割の好成績だったと思います。斎藤くんはこの大会の後、しばらくして中3から高1になる3月に亡くなってしまいました。生きていたら日本のトッププレーヤーになっていたと思う、本当に残念でならないです。

初の海外大会で惨敗を喫しましたが、その後もめげずにチェスの勉強を続け、高校二年生の時には、全日本選手権で運良く入賞することもでき、日本のレーティングも2100を超えて、再び海外大会に遠征する機会をいただきました。高2の時は、ハンガリーのセゲドで行われた18歳以下の世界ユースに参加し、成績は4勝5敗で自分にしては上出来の成績でした（優勝はセゲド出身のPeter Lekoでした。Lekoも当時は最年少GMでピーク時は世界4位でしたが、今はもう世界ランク90位前後。時代の流れを感じます。）。ちなみに1ラウンドで負けたMihajlo Stojanovic氏は、ここ最近10年以上日本チームのコーチをしており、2010年に参加したハンティマンシースクのチェスオリンピックでは15年以上ぶりに再会しました。チェスを長くやっているとこういう思いがけない再会があるのも嬉しいですね。全日本選手権の成績が良かったことから、その年、モスクワで行われたチェスオリンピックに推薦していただくことになりました。このあたりからチェスから始まった自分とロシアとのつながりが濃くなってきた気がします。

1990年代はまだチェスといえばロシアが圧倒的に強く（Kasparov全盛期）、チェスに真剣に取り組もうという人は何らかの形でロシアを意識していたのではないかと思います。それに加えて加藤先生が、当時、放課後に有志にロシア語を教えられており、自然とチェスとロシアという組み合わせに惹かれていった気がします。

ロシアと麻布チェス部という点でもう一つ触れておきたいのは、その当時日本のチェス界でシネリニコフさんというロシアの書記官の方がチェスの大会に積極的に参加されており、シネリニコフさんをリーダーとして、麻布チェス部のメンバと対抗戦を行ったことです。試合の内容とか細かいことはあまり覚えていないですが、シネリニコフさんのお嬢さん（姉妹だったはず）が大変可愛かったことはよく覚えています（確か当時の部室には当時の写真と記念に頂いた『Море зовёт』（海が呼んでいる）という本があったと思うがもうないだろうか。）。



モスクワのチェスオリンピックには加藤先生も引率として参加され、先生の知り合いのヴォリャークさんの家に連れて行っていただくなど、モスクワを案内いただきました。この大会では、その後も大変お世話になる、ロシア人のチェスコーチ、アレクサンドル・ルイセンコさんにも初めてお会いしました。当初の印象はふくよかで人のいいロシアのおじさんという印象だったのをよく覚えています。モスクワオリンピックでのチェスの結果も50%にあと一歩ということで、その後も4回チェスオリンピックに参加したがその中で最も良い勝率を上げることができました。シェレメチボ空港の薄暗さを除いて、初のロシア体験が楽しかったのがロシアとのつながりを強めていったのかもしれない。



モスクワオリンピック 2R Monaco戦
左は日本代表で名古屋の強豪、佐々木勝美さん 右が中村

大学に入ったあとも、ロシアとのつながりをもっと深めようと、ロシア語を第二外国語として選択しました。一方チェスのほうは大学生活の様々な誘惑もあり、伸び悩んでいました。大学在学中オリンピックや海外の大会に遠征するなど頑張っていたのですが、これは、一時期チェスをやめていた麻布チェス部の同級生の田中優毅君が非常に強くなっており、離されないようにしないとという気持ちで頑張れたのかなと思います。ライバルの存在は大きいですね！

大学の専門でも、ロシアの地域文化を専攻として選んだのですが、ここでも、実はチェス界との関わりがありました。麻布チェス部のOB・現役の方でもチェスの大会に出ている方だとお世話になっている方も大変多い、講談社の塩見亮さんが自分の2年先輩で同じ学科にいらっしやったのです。塩見さんは将棋の強豪で大学からチェスを始められたものの、あつという間に日本のトッププレーヤーになり、ロシア（ソ連）はなぜチェスが強いのかというテーマで卒論を書くため、ルイセンコさんと連絡を取り、ルイセンコさんが住んでいるロシアのウラル地方にあるエカテリンブルグ（ロシア第4の都市）にチェスとロシア語を学ぶために留学をされました。なるほど、そんな道があるのかということがわかり、塩見さんが留学から帰ってきたあとに切り拓いていただいた道を、ほぼそのまま自分も進んで、1999年にエカテリンブルグにロシア語とチェスを学ぶために留学しました。

大学の研究室で留学前に
左が塩見亮さん 右が中村

ロシアでは朝は大学でロシア語の授業を受けつつ、大学が終わったら週4,5回ルイセンコさんのお家に伺う、もしくは自分が住んでいる寮にきてもらうという形で、結構忙しい生活を送っていました。大学は情けないことに、よく遅刻しそうになって白タクを捕まえる（手を上げれば自家用車が止まるので価格交渉して大学までつれていってもらおう。）というダメ学生だったものの、チェスの授業は一回もサボらなかつた（はず）です。

大学生活は、留学生向けの寮に入り、日本人の語学留学やバレエ留学できていた人や韓国、中国、チェコから来ていた人とよく飲み会をしていました。エカテリンブルグで日本語を勉強しているロシア人の学生の方とも交流があり、1999年-2000年の年越しを日本語教育センターでパーティーをしながら過ごしたのが一番の思い出です。当時2000年問題が騒がれている中で、ライフラインが止まるのではないかと心配していたものの、徹夜明けの澄み切った寒い朝に何事もなく世の中が動いていて安堵したのを今でもよく覚えています。むしろ、1999年12月31日にエカテリンブルグ出身のエリツィンが大統領を辞任して、プーチンが大統領代行に就任したことの方が、歴史上大きな出来事でした。

1999年-2000年の年越しパーティー@エカテリンブルグ
右奥から2番目のぼやけて判別がつかないのが中村

チェスの方はトレーニングを実施する以外にも、毎週土曜日にはチェス学校で行ってそこで行われている快速チェス大会に参加したり、IMノームトーナメントを開催してもらい、田中優毅君、松尾さん、塩見さんに日本から来てもらい一緒に大会に参加したり、今から思

えば夢のようなチェスライフを過ごしていました（これでもっと強くなっていたら言うこと無しですが。。。）。コーチのルイセンコさんには、お家で奥さん（チェスも強くてWGMの方です）に毎回ご飯をごちそうになったり、お兄さんのお家に誘って貰って、一緒のエカテリンブルグ市のテーブルホッケーの大会に出たりなど、家族同然にお付き合いをさせてもらいました。



ルイセンコさんのお兄さんの家で。手前が大会にも出たテーブルホッケー。
一番左がルイセンコさんの娘さんのマーシャと奥さんのタチヤーナさん
その隣がルイセンコさんのお兄さんの奥さんと娘さんと息子さん
一番右がルイセンコさんと中村



エカテリンブルグのチェス学校で行ったIMノームトーナメントでの田中優毅君

ルイセンコさんとは留学後にも、日本に呼んでコーチをしてもらおうという企画もして大学在学中に日本に来ていただきました。この時は、渡辺暁さんや東京の太田さん名古屋の佐々木さん、尾崎さんをはじめ、多くの方に多大なる協力をいただき、東京、名古屋、京都、大阪をめぐりながらチェスのレッスン会を行うことができ、自分も行ったことがなかった龍安寺と一緒にいき、石庭をしばらくの間一緒に眺めていたのを思い出します。ルイセンコさんとのつながりは、後輩の岩崎くんもロシアに留学して、またルイセンコさんを日本に招いてくれました。



金閣寺にて渡辺暁さんとルイセンコさんと太田俊二さん

とりとめもなく長くなってしまいました。振り返ってみると、自分の力で道を切り拓いたというよりは、周りの方や、環境に恵まれたなと感じます。海外遠征やロシアに留学するなど、自分一人ではなかなか実行できなかっただろうことを、麻布チェス部に所属したことをきっかけに体験できたのは本当に幸運でした。麻布チェス部とは直接関係ないことも書かせていただきましたが、自分にとっては、必然的に麻布チェス部からロシア留学までつながっていたとさえ感じます。

麻布チェス部は母なる港。麻布チェス部の後輩の皆さんも日本のチェス界、世界のチェス界、もしくはそこから全然違う世界でもいいので、麻布チェス部を出発点に広い世界に帆を広げて出航して行ってください！楽しいわくわくする世界が待っています。自分自身は、麻布チェス部だけでなく、日本、世界のチェスの皆様に暖かく見守っていただいたなと改めて思いました。また、同時に皆様に受けた恩を全く返せていないことにも改めて気づきました。自分が手助けできることもあれば力になりますので、ぜひ皆さんもチャレンジしてください！

最後に、今はなかなか競技チェスに参加できていないですが、チェスというゲームに今後どう付き合っていくといいのだろうか悩みます。負けると悔しいし、やるからには強くなりたいという思いがある反面、強さをキープするには時間と努力が必要な、なかなか酷なゲームだなと。自分が現役の頃は、チェスが強い方がチェスをやめちゃうのをみてもったいないなと思っていたのですが、やめる方の気持ちも今は共感できます。今後のチェスとどう付き合っていくか考えていき、60周年、70周年の際にまた報告できれば幸いです。

チェス部創立50周年を祝して

小島 慎也 (2007年卒)

プロフィール

1988年神奈川県逗子市生まれ 31期チェス部部长

2005,2006,2007,2008,2010全日本チェスチャンピオン

現在はチェスのレッスンを主な仕事とし、フリーのチェスプレーヤーとして活動

麻布学園チェス部OBおよび、現役の皆様、この度はチェス部設立50周年、誠におめでとうございます。チェス部が設立されたのは、フィッシャーがスパスキーを破り、アメリカから初の世界チャンピオンが誕生した直後と伺っています。現在と違ってインターネットもなく、海外でどのようにチェスがなされているかという情報源も少ない中で、中高生が学校にチェス部を作ろうと活動し、実現したことは純粋に驚くばかりです。また設立の代だけが情熱を持つだけでは団体が長く活動することは不可能で、活動を続けていく後進の存在が不可欠です。50年という長きに渡り、チェス部を継続させてきた全ての部員たち、そしてお世話になってきた顧問の先生たちに、あらためてこの場をお借りしてお礼申し上げます。

自分がチェスを始めた頃を振り返り、少し個人的な話をさせていただきます。チェス部が30周年を迎える直前の2001年、麻布の入学直前にたまたま自宅のパソコンでチェスを見つけた私は、すぐその魅力に取りつかれました。麻布学園には日本でも珍しいチェス部があると知り、すぐに部室を訪れ入部することを決めました。2001年春先のチェス部はトップの高2になる世代が鬼のように強く、人数も多い黄金世代でした。後に日本チャンピオンとなる馬場氏を筆頭に、現役でありながら2000を超えるメンバーが複数おり、彼らの引退まで数か月間という短い期間の付き合いでも、強烈な印象を私に残していきました。たまたま私の代も13人ほどと同期は多く、一緒に4代上のような黄金世代になれるよう頑張ろうと誓い合った...わけではないのですが、勝手に自分の心の中で思っていました。同期の南條くんは入部以前からアメリカでチェスをしていて、いきなり先輩に勝つような実力者であり、彼の存在からも刺激を受けて、ますますチェスにのめり込んでいくようになりました。

中学生の頃は、毎日のように部室で部員たちと指し、帰宅しては今はサービスを終了してしまったYahoo! Chess やハンゲームのチェスでオンライン対戦をし、国内大会には極力参加して、年間の試合数は100試合を超えていました。中1の春合宿で先輩2人を破って4位になったこと、中2の終わりの大会で1つ上の先輩に敗れ、初の全日本選手権出場の機会を逃したこと（同期は3人出場）、中3の夏に同期を訪ねてアリゾナに単身渡り、海外のチェスセンターや大学で初めてチェスを指せたこと、高1で初出場した全日本選手権でリストから大きく順位を下げる結果で苦渋をなめたこと、高2の全日本選手権で優勝し、当時の最年少記録を更新したこと。現役時代の思い出には枚挙にいとまがありません。そんな風にチェスで勝ったり負けたりし、悔しい思いも嬉しい思いもする中で、少しずつ成長できたと思っています。過去の記念誌でOBの先輩がたが述べていましたが、チェス部で育った、チェス部に育てられたという気持ちは私も同じです。チェス部引退後の高3の全日本選手権でも優勝し、その後4連覇まで達成した私は、先輩たちが断念してきた（そもそもそんなことは考え

ない?)、チェスのプロを志すことにしました。日本でチェスのプロは難しいだろうという周囲の声もありましたが、大学卒業後にハンガリーでのチェス留学を経て、現在はチェスレッスンを中心に、チェスに関わる監修や執筆の仕事をしています。コロナ禍でこの数年はストップしていますが、重田先生がチェス部の顧問に就任以降、チェス部の春夏の合宿にもコーチとして顔を出させていただいています。プレーヤーとして、まだ日本で誰も取得していないGrandmasterのタイトル取得を自身で目指しつつ、チェスの普及活動、後進の育成にも努める毎日です。

そろそろ私個人の話から、チェス部全体の話や、日本のチェス界の話に切り替えていこうと思います。私が入部した当初、ジュニアで強いプレーヤーといえば、チェス部の現役生がほとんどでした。そもそもジュニアでは麻布生以外に大会にでてくるプレーヤーが少なく、初めて参加した20年以上前の全日本ジュニア選手権は、チェス部のメンバーで参加者のほとんどが占められ、まるで部内戦のようでした。私より上の世代でも、同じような情景を懐かしく思い浮かべるかたは多いのではないのでしょうか。また大学生、社会人の強豪プレーヤーもチェス部のOBが多かったと記憶しています。チェス部の現役、OBからは、多くの全日本ジュニアチャンピオン、全日本チャンピオン、海外ジュニア大会の日本代表、そしてチェスオリンピックの日本代表が輩出されています。チェスオリンピックに限って言えば、1992年のマニラオリンピックから30年に渡り、チェス部の現役生、OBが日本代表チームに1人以上入り続けています。チェス部のメンバーが長きに渡り、日本のチェス界を牽引してきたことは間違いありません。個人のタイトルで言えば、2014年の8月には同期の南條くんが、遅れて2015年の1月には私が、日本籍で第1号、第2号となるInternational Masterのタイトル取得条件を満たしました。25周年誌を読み返していて、20期部長の中村氏が「いつかチェス部出身者からIMが出る日を夢見ています」と述べられていることを見つけ、あらためてIM誕生は長く日本のチェス界の目標であったことを実感しています。

一方で近年の国内大会を見ますと、昨年の全日本ユース選手権(かつての全日本ジュニア選手権)では、チェス部からの参加者は少数で、麻布以外の参加者が圧倒的多数でした。Chess.comやlichessといった、オンラインでチェスを学び、海外のプレーヤーと気軽に指して腕を磨けるサービスが普及したことで、チェス部のような団体に所属しておらずとも、ジュニア時代から1人でチェスに取り組み、力をつけるプレーヤーが圧倒的に増えたと感じています。また私が高校を卒業する頃からは、海外でチェスを学び、日本に戻ってきた帰国子女や、日本での大会参加のために海外から一時帰国して活躍するような子供たちも見受けられるようになりました。現役生にはもっと積極的に大会に参加して活躍してほしいと願う反面、日本のチェス大会もグローバルになり、チェス部以外の子供たちを大会で見るようになったこと、誰もがやる気さえあれば力をつけやすくなった環境の変化を、私は喜ぶべきことだと捉えています。

世界のトップを見ても、フィッシャー以降の1970年代から2000年代まで、世界チャンピオンの座は再びソ連勢の手に戻りました。しかし2008年以降はインド、ノルウェーと今ま

で世界チャンピオンを取ったことのない国のプレーヤーが王座につきました。現在世界最強のノルウェー人、マグヌス・カールセンは、10年間王座を保持した後、2023年に防衛戦を拒否し、世界チャンピオンの座から降りることになります。次のチャンピオンは再度ロシア人になるか、はたまた初めて中国からチャンピオンが生まれるかが、現在チェス界で注目的となっています。今後はどこの国から天才的な才能を持つプレーヤーが誕生し、世界チャンピオンの座につくか、予想のできない群雄割拠の時代が続くでしょう。規模こそ違いますが、世界のチェス界でソビエト一強の時代が終わったことと、日本のジュニア世代でチェス部一強の時代が終わったことは、偶然ではないと思っています。

こうして海外を見てもチェス界に変化がある中、2019年の頭には日本チェス協会（JCA）が活動を停止し、代わりに日本チェス連盟（NCS, National Chess Society of Japan）が日本を代表するチェス組織となりました。まだ活動は日が浅く、規模も大きいとは言えませんが、組織としての運営は格段に良くなり、初心者向け大会、オンラインでのチェス講座、オリンピアードのクラウドファンディングなど、多くのかたに様々な形式でチェスを楽しんでもらえるような、新しい試みも行われています。都内でもチェスクラブやカジュアルなチェスの集まりも増えていますので、チェスから離れて久しいOBのメンバーたちも、気が向いた際はチェス部の懐かしい思い出とともに、チェスに触れる機会を探していただければと思います。

最後に現役の皆さんへ。時代によって世界のチェス情勢から国内大会の様子、チェスの勉強方法からチェス部の方針など、様々な変化があることが分かるでしょう。1997年に世界チャンピオンだったカスパロフが、コンピュータソフト、ディープ・ブルーに破られたことはチェス界を揺るがす大事件でした。それから25年経った現在は、手元のiPhoneにディープ・ブルーを超える強さのチェスソフトを無料でインストールでき、子供でも気になるポジションをすぐ解析できる時代です。そんな便利さもある反面、この数年はコロナ禍でチェス部の部員勧誘や合宿の開催、普段の部活動までもが難しく、上の世代が分からないであろう苦勞も多く抱えていると耳にしています。多くのOBから過去の話聞きつつも、今どのようにチェスと関わり、チェス部で過ごしていくかは皆さんの自由です。この時代に生きる現役生たちによるチェス部の51年目を、ささやかながら応援しております。

チェス部の今とこれから

先生方とOBからの寄稿に続いて、ここでは現部長にチェス部の現在の活動状況を紹介してもらった。また、現役部員に一言ずつのコメントを書いてもらった。書かれた内容や書いてくれた人数を見ると読む者によって種々思うところを生じるかもしれないが、これもまた現在のチェス部がおかれた状況を率直に反映したものであると受け止めたい。

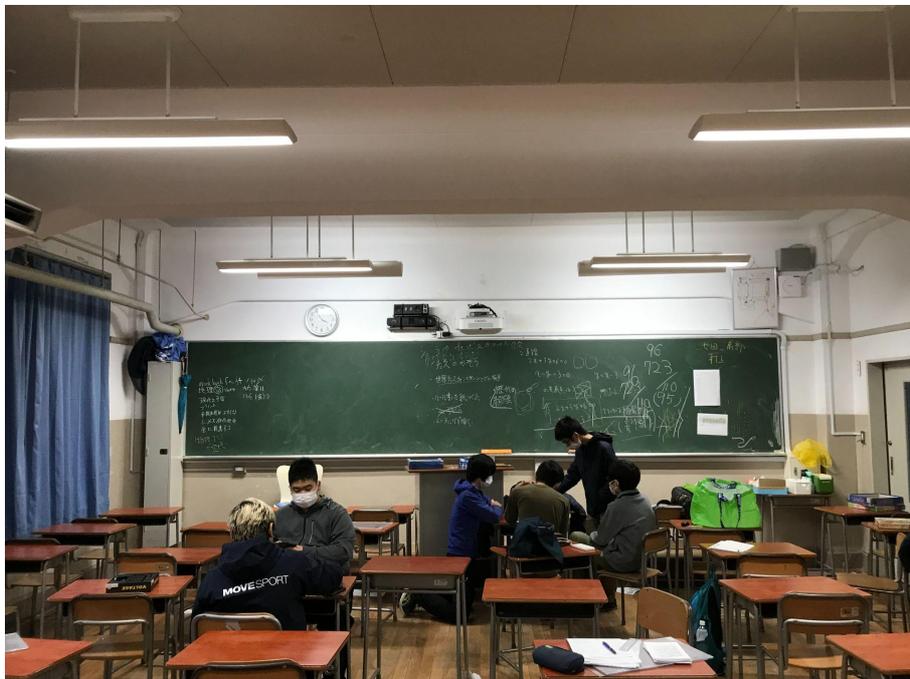
チェス部の現在

朽久保 仁 (H1)

改めましてもう一度自己紹介させていただきます。49代目部長朽久保仁です。今回は、現在のチェス部の活動状況について書いていきたいと思えます。

現状のチェス部の活動はここ数年の傾向と変わらず、少しチェスをした後にみんなでボードゲームをして遊ぶといった形でとても緩くやらせてもらっております。

活動場所としては前述したとおり部室棟が新型コロナウイルスの影響で使えないため、以下のように教室を借りて放課後をメインに活動しております。



普段の部活動の様子

この写真の時は僕含めて7人来ているので比較的参加人数も多い時となっております。普段だともう少し少なくて、参加人数は4人や5人が最も多い印象です。人数としては少なかりつつありますが、部活をするのに必要な最低人数は来てくれています。主要なイベント時

にのみ部員が増えるという状況で、全体としてチェスの強さの底上げをどう図るかが最重要課題となっております。

次に大会の話に移りたいと思います。残念ながら、大会に参加している部員は僕以外居ないという現状です。そのため、チェス部の大会での成績として書けることがないのですが、次の初心者用の大会に出てくれる後輩がいるので、この流れで、大会に参加してくれるようになればいいなと思っております。

また、部活として初めて挑戦したことという、前述したように西町インターナショナルスクールのチェス部に伺って、実際に対局をしてみたことだと思います。前述したとおり、コラボするのが何年も続くとは考えにくいのですが、チェス部は日本だと存在自体が珍しいので他校のチェス部とコラボしていきたいとは思っています。

現在報告できることは以上です。現状をこうして書いてみると、コロナであまり活動できなかったにしてはあまり悪くない状態なのかなと感じております。しかしまだ、コロナの分でなくなってしまいつつあるチェス部の伝統を完全に引き継いではいないという現状です。なので、緩く楽しい部活という形を残しながら、コロナ前のチェス部のように活動的な部活にしていきたいと思います。OBの皆さまには温かい目で後輩を見守りつつ、ご支援・ご助言のほどよろしくお願い申し上げます。

現役部員一言集

後藤 圭大 (M3)

チェス部50周年ということで、半ば幽霊部員と化してきている僕も寄稿させていただきます。おそらく昔は違ったことだろうとは思いますが、僕の中でのチェス部のイメージは、ただチェスを一局指した後、ボードゲームかカードゲームのどちらかをしているだけ、というそう云うものでした。中1の頃は毎日部に顔を出していた僕ですが、4つ兼部し、そのうち1つの部の会計も務めることになり、今では文化祭だけ手伝いをして人手不足の間だけチェスを指す、とだいぶチェスからも疎遠になってしまいました。しかし、暇な時にチェスを指すという選択肢が追加されたという点において特にこの部に入ってよかったな、そう思います。

和田 涼太郎 (M1)

僕は麻布にチェス部があることを、小学5年生のときに学校のホームページで知り、チェスに興味を持ち始めました。そこからルールを覚え、たまに弱いコンピューターと対戦するぐらいにチェスを楽しんでいました。麻布に入学後、友達を誘ってチェス部に入部しました。今はさらにチェスを楽しんでいます。

熊井 健博 (M1)

幽霊部員が多いが、人数が多いと緊張してしまう僕にとっては、そんなチェス部に入って良かったです。50周年を迎えましたが、チェス部はこれからも続いてほしいと思います。

OBからのメッセージ

本編の最後に、50周年を迎えた麻布学園チェス部に対してOB有志から寄せられた祝辞の数々を掲載する（年次順・五十音順）。

大和田 哲生（1978年卒）「ドローの境地を求めて」

チェス部の歴史が半世紀に達しましたことを創部に参加した者として、また20周年記念事業に携わった者として感慨深く受け止めています。

チェスの探求は初歩的段階にとどまってしまった私ですが、幸いにもチェス部を通じて知り合えた方々との卒業後も長く続く交遊関係に大いに恵まれました。私が50歳の時に大病を経験した際には、加藤史朗先生と数人の同輩が会食の場を設けて下さり、暖かい励ましを頂きました。旧知の方々との再会に心が大いに和むとともに、制約の多かった私の事情に合わせて会場や食事内容にご配慮下さった細やかなお気遣いが心に深くしみ入りました。

そのおかげもあって小康を保ちつつ60代に至りましたが、次第に持病が増え健康維持のハードルは年々高くなっています。チェスの局面に例えれば、現状は終盤に入って形勢不利な状況と言えるかと思います。

勝利は望めないまでもせめてドローに持ち込みたいと手を尽くして健康維持に日々励んでいます。チェスでは体得に至らなかったドローの境地に擬似的ながらも実生活を通じて近づいてみたいと願う今日この頃です。

喜多見 淳一（1978年卒）「チェス部創立50周年に寄せて」

麻布学園チェス部の創立50周年、誠におめでとうございます。あの部室で仲間と過ごした時代から半世紀もの時が経ったことに感慨を覚えるとともに、今でもその頃の記憶がまざまざと蘇ることに自分のことながら驚きます。

20年前、30周年記念誌に“授業が早く終わり、誰もいない鍵のかかった旧部室の間仕切りによじ登って天井とのわずかな隙間から中に忍び込み誰か仲間が来るのを待っている”との思い出を書かせていただきました。同朋とともに熱い議論を戦わした夏合宿の場面もさることながら、こちらがまず頭によぎるのはそこが自分の存在を確かめる居場所として心地よかったからでしょうか。チェスは単なる建物としての校舎ではなく自分が確かにそこにいる集い場としての麻布の風景を記憶させてくれています。

現役の頃、少しでも強くなりたくてそのヒントを求めて定跡や名人の棋譜を勉強しました。日本語の参考図書も少なく、書籍の通販サービスもなかったその時代、今は無き銀座の

「イエナ書店」で洋書を立ち読みしながら目当ての本を見つけ、なけなしの小遣いをはたいて買った本を抱えて家に帰りました。初めて買ったのは青いペーパーバックの”Morphy’s Games of Chess”でした。それは今でも本棚にあります。また、当時チェス部で流行っていた中国象棋（シャンチー）の専門書を見つけに神保町で中国書店巡りをしたことも思い出されます。こうした街の記憶もチェスとともにあります。

麻布を巣立ってから、チェスをする場面はめっきり減りました。そんな中でも、社会人となって海外に駐在していた時は旅の先々でチェスセットを物色したりしていました。ユニークで印象深かったのはロシアのサンクトペテルブルクの道端の露店で求めたセットです。米・露の指導者たちが駒に扮して対峙しており、米側にはクリントンとヒラリー、露側にはゴルバチョフとエリツインの姿が見られます。ごく安いものでしたが、ともすれば薄れることも多い旅の記憶の中で、その時に家族が何を買ったかまではっきりと思い出せるので宝物にしています。チェスは旅の思い出をたどる糸口にもなっています。



人を相手にチェスをしなくなったのはもう20年ぐらい前のことでしょうか。中学からチェスを始めた息子に負けた時です。その息子も今は人の親となり、4歳になる孫がチェスを覚え始めたようです。いつか孫に負けて自分のように肩を落とす時が来るのでしょうか。チェスは苦くも楽しい思い出を紡ぎます。

華甲から2年を過ぎ、昨年5月に沼津で行われた「江原素六先生 生誕180年 没後100周年」のイベントに参加しました。麻布の歴史を復習しながらも、やはり脳裏に浮かぶのはチェス部、そしてそこで多感な時期を共にした同輩、後輩との思い出ばかりでした。自分の居場所となり、貴重な経験をさせてくれたチェス部という集まりに心から感謝したいと思います。

竹田 数章（1978年卒） 「チェス部創立時の思い出」

チェス部創立50周年おめでとうございます。創立にかかわった一人として、記憶が定かではないところもありますが、思い出に触れたいと思います。

1972年、中学1年生の時、クラスメートの小林君からチェスの同好会を作りたいと、僕と小嶋君などに提案がありました。当時から囲碁・将棋部は強く、それら以外の外国のボードゲームであるチェス等を楽しもうという主旨でした。

設立にあたり、担任だった近藤祐康先生に顧問をお願いしました。近藤先生は国語と書道を教えておられ、正義感の強い、情熱的な先生でありました。過日お亡くなりになり、とても残念です。心からご冥福をお祈り申し上げます。

1972年は日中国交正常化の年で、中国象棋（シャンチー）もやろうということになりました。自分はチェス以上にシャンチーを指しておりました。日本語のチェスの本は少なかったのですが、シャンチー関連本はもっと少なく、シャンチーの駒や盤も入手しにくい状態でした。中国書籍を扱う店や物産店、横浜中華街にも行き、駒と紙製の盤を入手し、中国の専門書を買いました。大陸の本は簡体字で書かれているので、簡体字を調べながら読んで、定跡や棋譜を研究していたのも懐かしい思い出です。このように創立からしばらくはシャンチーも指されていた時期がありました。

わたしはその後、部室にはたまに顔を出す程度になりましたが、部室に行くともったりとした居心地の良さを感じておりました。部員の雰囲気良かったのだと思います。

近頃はオンライン対局などでチェスとシャンチーを楽しんでおります。日本でのシャンチーの競技人口は少ないですが、皆様の中でシャンチーに興味がある方はご一報ください。

先日、私の医院にチェス部の後輩が診察に訪れてくれたことがあり、奇遇に驚きました。私がチェス部に関わったのはわずかでしたが、継続して発展していることが、眩しく、誇らしく思います。チェス部が今後益々発展されることを期待しております。

仙川耳鼻咽喉科院長 竹田数章

齋藤 亮（1979年卒）「麻布学園チェス部への感謝の気持ち」

麻布学園チェス部創立50周年おめでとうございます。あのチェス部が50周年とは驚きの時間の経過であり、感慨深いものがあります。

わたしにとって麻布学園のチェス部は、諸先輩方や同期、後輩のみなさんと結びつけてくれた、貴重な空間でした。わたしはチェス自体に対していい加減で、全く不真面目な部員でしたが、あの当時のチェス部には、なんでも受け入れてくれる寛大さと多様な世界の奥深さを教えてくれる懐の深さがあり、そのような環境にひたり恩恵を享受して過ごせた、落ちこぼれの生徒のわたしには、まさに中学高校での助けられた空間でした。

それはチェスをしない顧問の加藤先生と多彩なキャラクターを揃えていた諸先輩方の魅力によること大ですが、そんな先輩方が引退した後も、そのような場を麻布に無くしたくない

と、当時、部の存続をкаろうじて後輩に託したチェス部が50周年とはうれしいかぎりです。また、今や50年という立派な伝統と輝かしい戦績を誇る麻布学園チェス部の、かつて一員であったことを誇りに思うとともに、改めて心の底から感謝の気持ちで胸が熱くなります。

最後になりますが、麻布学園チェス部がますます隆盛するとともに、麻布生にとっての大切な空間となることを願っています。

片山 拓史 (1981年卒)

チェス部50周年、おめでとうございます。

設立学年が抜けた後のチェス部を持続可能にした中興の祖！と自画自賛している身ですが、あ那时的組織が今なお残っていて、歴史の中で多くの活躍を生んだと聞くのは本当に嬉しい限りです。ここに至るバトンを繋いでくれた後輩の皆さん、誰ひとりとして先人のために動いたわけではないのに、こうしてワクワクを老身に与えてくれます。感謝とともに、今後の発展を祈っています。

石井 誠 (1982年卒) 「麻布チェス部の思い出」

この度は、麻布チェス部50周年を迎え、誠におめでとうございます。

昭和50年、ついこの前まで小学生だった私が麻布学園に入学して数日後、まだクラスで友達といえる人もいない中で、チェス部の部室に足を踏み入れました。すると、チェス部を創立された10人以上の高校2年生の方々が、部室で楽しそうにチェス以外の話で盛り上がっていました。私にとっては、それは大人の世界で、興味津々でした。そして、私の代は私一人だったので、先輩たちはとてもやさしくしてくれた記憶があります。ただ、高1から中2までの先輩は私の代と同じように、部員がわずか、この高2の方々が卒業した時どうになってしまうのだろうと頭をよぎりました。

それから1年後、新入部員が2人入りました。創立メンバーは高3で、来年には卒業します。私は高2の斎藤先輩に何とかしなければと相談したところ、“石井がそんなにもチェス部のことを思っているとは感激だ。もうそれだけで十分だ。”と言って泣いてくれました。やはり、先輩も同じく危機を感じていたんだと思います。ところが、その次の年、ミラクルが起きました。20人あまりの新入部員が入ってきました。でも、次の年は1人でしたが、とりあえず、私が卒業するまでは、チェス部はあるだろうと思いました。

私の1学年下の吉田君が、西ドイツのチェス世界大会の出場が決まり、私が部長だった時に入部してきた小林君が、その後フランスの大会に出場と聞いて、これはチェス部はあり続

けるんじゃない?と期待しました。2000年代は私はカルフォルニアに住んでいたのですが、その時、小島君が麻布学園在学中に日本チャンピオンになった記事を見て、どうするとそんなことになるのか、ただただ感激していました。一度お会いしたいと思いました。

そして、4年前のOB会に参加させていただき、生チャンピオンとお会いでき天にも昇る気持ちでした。そして、そのOB会で、後輩のある方が、何故、あの時20人もの部員が奇跡のように入部したかの謎を解いてくれました。それは、加藤先生が中1の担任を受け持つと、沢山の部員が入ってくるというカラクリでした。その後もそれが続いたそうです。そして、チェス部はチャンピオンを出し今も発展し続けています。

私は勝手に現状だけ見てチェス部の明るい未来を見ることができませんでしたし、明るい未来を目の当たりにしても、加藤先生の存在に気づけませんでした。今回、たまたま、加藤先生のような救い主の存在を気づかせていただけましたが、気付かずにうまくいってしまう事もきっと沢山あるのだと思います。それを思うと、私のこれからの人生、これからの日本の将来、世界の平和など、現状だけでは輝いて見えない場合でも、加藤先生のような偉大な方が陰で助けてくれる可能性があることを感じて、いつまでも希望をもって生きて行けそうです。ありがとうございました。

秋本 真彦 (1989年卒)

麻布学園チェス部創設50周年、おめでとうございます。後輩の方々がずっと歴史をつないでいただいたこと、感謝申し上げます。自らが所属していた部がいまも活発であることは、私の誇りです。

伊藤 哲也 (1992年卒)

この度は麻布チェス部50周年、おめでとうございます。

1986年入学1992年卒業で、大川君を部長に擁した私たちの学年もまだまだ若い思いながら、卒業して30年以上の年月が経ってしまいました。私自身は、大学でもチェスサークルに所属したものの、結局その後はチェスを指す機会はほとんどなくなってしまいました。麻布在学中に兼部していた天文部（こちらはもう消滅）から、天文学への興味で大学院に進み、今は国立天文台で技術職員をしています。また、昨年2月より南米チリにある国際的な電波望遠鏡プロジェクトである、ALMA観測所へ単身赴任しています。このため、今回の50周年イベントには参加できず、大変残念です。同僚の9割はチリ人ですが、チェスを指す人もいるようで、観測所の同僚に仲間を見つけてまた始められたらと思います。

顧問の加藤先生には、麻布チェス部で兄の賢一とともに兄弟で大変お世話になりました。本当にありがとうございました。以前一度、札幌で天文教育に関する研究会が行われた

ときに、加藤先生の岩内のご自宅にお邪魔させていただく機会がありました。その時は一人で伺ったのですが、そのうち、家族で岩内に伺うことができたかと考えています。その時にはどうぞよろしく願いいたします。どうかお体にお気をつけて、お元気にお過ごしく下さい。加藤先生はじめ、チェス部の皆様にまたお会いできるのを楽しみにしています。

大川 隆男 (1992年卒)

チェス部50周年おめでとうございます。半世紀にもわたって、歴代の部員や顧問の先生方の想いがリレーされて、今日まで続いていることに深い感動を覚えるとともに、自分もこの流れの一部であったことを誇りに思います。

私もチェス部とほとんど同じ年齢で、今年で50歳を迎えます。中高生の時には、自分が50歳になることなど想像もつきませんでした。時の流れは止まらないものです。人生はあっという間だと思ふ今日この頃です。

なお、私、チェス部で部長を務めましたが、今また、部長と呼ばれる役職を務めております。30年ぶりぐらいに、再び部長と呼ばれるようになったのは、不思議な感覚でした。

改めまして、チェス部50周年おめでとうございます。次の50年間もチェス部が連綿と続いていくことを祈念しております。

田中 海渡 (1994年卒)

麻布チェス部創立50周年おめでとうございます。

と言いましても、お祝いの言葉があるわけでもありませんので、個人的なエピソードをいくつか連ねて、今後ともチェス部の活動が続いていくように祈念する次第です。

中1の夏休み明け、それまで所属していたバレーボール部の体育会気質に嫌気がさした私は、同じクラスで仲が良かった友人が多く所属していたチェス部に入部を決めました。当時としてはめずらしくルールを一応知ったうえでの入部でした（ニコリというパズル雑誌に掲載されていたのを読んだ記憶があります）。私は気が短いほうでしたので、専らブリッツ専門みたいな感じになっていました。その後中3の頃（高1だったかもしれません）快速選手権で5位に入賞し、上位者が全員辞退したことからアジア快速選手権の代表になります。JCAの人によればジュニアで初めてのシニア大会の代表だったということでした。会場はカタールのドーハで、サッカーで悲劇と称される前にかの地を訪れた数少ない日本人だったかと思います。人見知りもあって他国のプレイヤーとは仲良くなれなかったのですが、親切にしてくれたアフガニスタン人のおじいさんがどうなったのかは時々気にかかるころでした。

その後、1学年上の某氏がご乱心あそばし、これに対抗するために自分は予算委員会事務局長になり親友の菅原宰を同議長にして対抗するなどという、今にして思えばどんでもない茶番もありました。チェスの面では同級の松尾朋彦に逆立ちしても勝てないのですが、運よく当時マスターだった彼に挑戦する機会を得たものの、上述の乱の真っ最中で複雑な気持ちであった記憶があります（実力的には私よりは同期の宮本のほうが挑戦者にふさわしかったとは思いますが）。

その後大学へ進学し、学生選手権継続の危機にあたって奔走したりとか、近年にいたっては著しく健康を害したところを同窓に励ましてもらったりといったこともありました。

人格を陶冶すると言いついすぎかもしれませんが、それこそ揺りかごのようなACCが今後も健在であることを祈るばかりです。現役の皆様、ぜひ未来への懸け橋となられるよう、期待しております。OBの皆様も、何かの折に集まったり、現役をサポート出来たりできるといいですね。

石渡 竜也（1996年卒）

創設50周年おめでとうございます。在学中、中3のときに20周年記念がありましたが、ちょうどそのころはプログラミング、ゲーム等に熱中しており、あまり真面目にチェスをやっておませんでした。チェス部は必須のリーグ戦と、ときどきブリッツをして遊ぶ程度の参加でした。そのようにしていたので自分の棋力にまったく関心がなかったのですが、高1になるころ、ある試合で2年下の後輩（確か立花君）に負け、どういうわけか大きなショックを受けます。このままではいけない、なんとかして棋力を上げようと思うようになりました。

そこから、実力をつけるための模索の日々が始まりました。当時部長だった村田さんに相談すると「だったら試合に出るのがいいよ」というアドバイスをもらいます。それまで部内の試合も最低限しかやらなかったのに、早速JCAの大会に参加するようになりました。最初についたレーティングは1200程度。部員のレーティング表では同級生は低くて1400、高い人は2000ぐらいになっておりだいぶ差がついていました。試合のないときはブリッツをこなすとともに、本を読んで棋力向上を図りました。部にあったECOの必要な部分のコピーを取り、オープニングを研究。ミドルゲームの攻撃力が足りないことを感じていたので『Attacking the King』という英文の本を買い、ECMで問題を解きました。エンディングは（確か斎藤君のご家族の寄付で）そのころ部に入った問題集を活用させてもらった覚えがあります。こうすることで学期ごとに行われる部内リーグでC、B、Aと昇級しAリーグ優勝、最後の夏合宿で1位となりました。夏合宿の優勝賞品としてTDの伊藤君にもらったリスト（掲示用の大きなスコア表）は実家の押し入れにまだあるかもしれません。

自分にとっては、なにかを目指して努力するというのはこれが最初の大きな体験で、そのやり方を学び自信をつけた経験でした。このような場を与えてくれたチェス部には大変感謝しております。

一方、チェスをやる以外でも楽しい日々でした。夕方になるとバレーボールをやりに出たり、ダブルチェスやとられチェスなど変則ルールのゲームをやって遊んでいましたが、特にダブルチェスが大好きで毎日やりたいと思ったものです。お昼に那須飯店で食事をしたのもいい思い出です。肉定食が人気な中で自分は麻婆麺や麻婆定食が気に入っていましたが、いまでは麻婆豆腐は得意料理です。

卒業後も意外なところでチェス部と縁がありました。大学で大石先生にドイツ語の授業を必修で受けたのですが、当初OBと知らず挨拶もせず終わってしまいました。大変申し訳ありません。東芝さんにはOB会でご自身の医院の名刺をいただきました。何年かたった後に実は近所だと気づいて診察にうかがうと「あれ？君はたしか・・・」と仰っていただき、その後ながらくお世話になっております。

このように大変思い出深いチェス部がいまでも存続しているのは大変うれしく思います。創設からいままで運営にかかわった先輩、先生方、歴代の部員のみなさまに感謝いたします。

赤堀 一成 (1999年卒)

麻布チェス部の創設50周年おめでとうございます。50年にわたる歴史を積み重ねるまで、顧問の先生の方々や、チェス部を創設された先輩の方々から現役部員の皆さんに至るまで、多くの方々のご尽力があったことと思います。皆様のご努力に深く感謝するとともに、私としても感慨深いものがあります。

30年前の1993年の春、私はチェス部に入りました。ある日の放課後に旧部室での部活動を見学して、これは面白いと思い、すぐに入部を決めたのです。

チェス部で過ごす日々はとても刺激的でした。日々の部活動でのブリッツや公式戦、春と夏の合宿、大会への参加など、チェス部をめぐる思い出は数えきれません。多くの先輩、同級生、後輩と出会えたことは、大きな財産です。

特に、1996年秋から1997年夏まで部長を務めて得られた経験は、とても貴重なものでした。部長として、楽しいこともありましたが、悩ましいことも多くありました。しかし、総じて言えば、苦勞を乗り越えながら、喜びも味わうことができ、今では部長を務めたことを誇りに思っております。

部長を引退した直後の1997年9月に25周年記念式典を開催したことも、懐かしい思い出です。大先輩の方々とお会いできたのはとても嬉しく、チェスを対局したほか、新しい部室にご案内しました。

振り返れば、入部したとき、前年に編集された「20年のあゆみ」を渡されたことが、後に25周年記念式典を企画するきっかけとなりました。それから25年が経ち、時の流れの速さを実感します。この50年間でチェス部を取り巻く環境は大きく変わったでしょうが、それでも存続しているというのは、世代を超えて引き継がれる伝統があるためだと思います。

今でも趣味は何かと聞かれれば、チェスと答えています。海外に行って、現地のチェスクラブを訪れたことや、街でチェスをしたことがあります。ただ、日本では10年ほど前に大会に参加していましたが、最近はたまにオンラインでチェスをする程度であり、何とか復帰したいです。

最後に僭越ながら、現役部員の皆さんに向けてメッセージを送ります。チェス部はこれまで、日本を代表するチェスプレイヤーを多数輩出してきました。たった一度の人生のなかで、しかも中学生・高校生としての貴重な時期をチェス部で過ごすのであれば、その恵まれた環境を思う存分に活かしてください。そして、後から振り返って、「ああ、チェス部に入って本当に良かった。自分はここで充実した時間を過ごせた」としみじみと感じられるようにしてください。

今回の50周年記念イベントが、チェス部のさらなる発展につながるものとなることを願っております。皆様にお会いできることを心より楽しみにしております。

井上 祥（2002年卒）「チェスに、そして何より麻布学園チェス部に感謝」

麻布学園チェス部創設50周年、本当におめでとうございます。また、50周年記念イベント実施に向けてご尽力された有志の皆様には深く感謝申し上げます。

以前、寄稿させていただいた30周年の時の文章を改めて読むと、駿台で浪人中だったことを思い出しました。あれから20年、麻布学園チェス部出身者からIMを2人、FMを2人、そして何人もの全日本王者、日本代表を輩出しています。そんな名門麻布学園チェス部のOBの一員であること、誇りに思います。

私の20年間で言えば、2003年から2015年までの12年間にわたりチェスをプレーしました。浪人生活を終えた大学1年の時に、ふとしたきっかけでチェスを再開しました。引退から3年、一気にインターネットが普及していました。現役世代はAIやデータベースを使いこなし、Yahoo!チェスやICCで対局をしていました。自身が現役だった頃にはAIを使っている人はごくわずかでした。インターネットが我が家に開通したのも高校2年生の頃で、Fischer

の『My 60 Memorable Games』の棋譜を並べながら勉強したものでした。デジタルの力が一気にチェスの世界を変えたことを肌で感じていました。

先述した2人のIMである南條遼介くんや小島慎也くん、FMの馬場雅裕くんとは何度も対局し、一緒に海外遠征も行きました。中学生だった南條、小島両名が実力を伸ばし、IMになるところを横で見ることができたのは本当に幸運でした。一つ後輩の馬場くんが全日本王者に3度も輝いたのも大変嬉しいことでした。同じく一つ下でFMの中郡慧樹くんは気付けば麻雀のプロになっていました。

自身も日本代表として2008年の北京頭脳五輪／World Mind Sports Games に出場、マレーシアの IGB Open やフランスの Cappelle la grande などにも参加しました。GM Nakamura Hikaru との同時対局では2手メイトまで追い込むことが出来ました（が、結局見えずにその後大逆転負けを喫しました…笑）。2015年のクラブ選手権には麻布学園OBチームとして松尾朋彦さん、馬場くん、佐野富くんに助っ人としてTUCC OBの塩見亮さんを加えたメンバーで全勝優勝をすることができました。中村龍二さんとも何度かクラブ／チーム選手権で一緒に参加させていただきました。FIDE、JCA（当時）ともにレイティング2000も達成することが出来ました。現役時代のパツとしないプレイヤーであった自身からすると信じられないことです。チェスのおかげでたくさんの思い出があります。

この8年間はほとんどプレーができておらず、観戦専門となっています。チェスをやっているけど負けが続いたり、結果が出なくて悔しい思いをすることが多々あります。人間は（私は？）都合が悪いことは忘れてしまうようです。この8年間のブランクで悔しい記憶が幸いにも消えているので、楽しい思い出ばかりなのでしょう。

チェスを強くなることは本当に大変なことです。大学4年頃から病院実習のため、金沢八景に下宿をしておりました。小島くんがたまたますぐ近くの逗子が実家で、よく泊まりにきてくれて一緒にチェスをしました。小島くんのチェスへの情熱と深い理解、局面の的確な言語化、説明する力には本当に感服しています。IMになることと、IMからポイントを取ることがいかに違うことか、他ならぬ小島くんが教えてくれました。日本初のプロチェスプレイヤー、小島くんが歩んで行く先をこれからもとても楽しみにしています。

プレーしていない8年間でJCAはNCSに変わりました。NCSの篠田太郎くんのオンライン配信を楽しませてもらっています。配信は画期的ですが、継続することには相当な苦勞があるのでしょうか。ご縁があつてNCSアンチ・ドーピング・チーティング委員会の委員も拝命しています。JCAの時にも仁川アジア大会でアンチ・ドーピングを担当させていただきました。プレーせずとも、こうしてチェスと関われることはとても嬉しいことです。

麻布学園チェス部のおかげで、現役時代も引退後も本当に楽しい思い出がたくさんあります。世代を超えた先輩や後輩や麻布関係者以外にもチェスを通して交流させていただくことができました。チェスのおかげで、私の人生はとても彩り豊かなものになりました。仕事や

子育ての中で、この8年すっかりチェスからは遠ざかってしまっています。またいつかプレーしたいという気持ちも実はあります。

め切ギリギリになりましたが、記憶が薄れる前にこの20年間のことを記録に残しておきたいと思い、筆をとらせていただきました。書いているうちについ楽しくなってしまう、たくさん書きすぎてしまったかもしれません。

これからの益々の麻布学園チェス部の発展、そしてGMが輩出されることを心より祈っています。いつしか、シニアチェス選手権で皆さんと一緒にプレーができますように。

馬場 雅裕 (2003年卒)

チェス部50周年おめでとうございます。思えば、私が入学したのが25周年記念の年でした。それから25年。時が経つのは本当に早いものです。この25年、チェスプレーヤーであり続けられたのも麻布チェス部の存在あつてのものです。

2018年より中国勤務になったため、残念ながらこの度の50周年記念イベントには参加できません。現役時代の先輩である重田先生には近況をお伝えしました。このイベントを機に、多くの方が日本チェス界に復帰されることを期待しております。

私も日本に戻ったらまたプレーに復帰したいと思っていますし、ゆくゆくは息子もチェスに興味を持ってくれたら、とも思っていますが、こちらはあまり芽が無さそうです。。。

私と疎遠になっている方々はFacebook、Twitter、メール等どんな方法でも良いですから気軽に連絡を下さい。また、もし私とチェスで対戦希望という方がいらっしゃいましたら、いつでもお受けいたします。

最後に、私のチェスの原点であるチェス部がいつまでも末永く続くことを祈っております。

第27代部長

FIDE Master

2006・2011・2015全日本チャンピオン

馬場雅裕

資料編

まずチェス部の歩みを内外のチェス界の動向や世相と共に年表形式で示し、ついで部員・OBが参加した公式戦・海外棋戦の実績を把握が可能な限り採録した。なお、過去の記念誌では部内大会や東京大学との対抗戦の結果も記録していたが、50年という対象期間の長さに鑑み、本誌では割愛することとした。

年表で見るチェス部の歩み

年次ごとに歴代部長、合宿地、トピックス、チェス界の動向、世相を抽出し年表化することで、50年間の歩みを一覧できるようにした。ただし30周年以降の20年間についてはまとまった情報が入手できず、空欄となっている箇所が多い。本誌発行後の情報提供による充実を期待したい。

年	部長 就任年で表示	合宿地 実施年で表示	チェス部のトピックス	世界と日本の チェス界の動き	世界チャンピオン	世相
1972	小林正純		学バスの中でチェス部誕生 / 初代顧問は近藤先生		ボビー・フィッシャー	あさま山荘事件 / 沖縄本土復帰 / 日中国交正常化
1973			文化祭に参加			オイルショック
1974			部室獲得 / 日本チェス協会のトーナメントに初参加			
1975	安藤信之 松永保	木曾	加藤先生が顧問に就任 / 初合宿		アナトリー・カルポフ	ベトナム戦争終結
1976	篠原研一	松代温泉 / 鴨川				
1977	片山拓史	木曾	「冬の時代」現役が中学生5人			
1978		新潟 / 伊豆	東京大学と対抗戦（以後「東麻戦」として定例化）			
1979	石井誠	越後湯沢 / 奥多摩				
1980	吉田哲郎	筑波	世界ジュニア選手権に吉田哲郎参戦=チェス部から初の海外派遣			
1981	小野瀬裕之	奥多摩 / 赤城				
1982	亀井雄也	千葉 / 高山 / 金沢				
1983	佐藤周一	伊豆				
1984	加藤富久	赤城 / 西湖				初代Macintosh発売
1985	衣川正雄	福島 / 南伊豆			ガルリ・カスパロフ	
1986	古川雄一郎	静岡				

1987	佐野喜彦	戸隠 / 南千葉				
1988	東芝輝臣	千葉 / 山中湖	「とりあえずよけとくか」事件			
1989	大川隆男	勝浦 / 南箱根				平成改元 / ベルリンの壁崩壊
1990	林聡史	いわき / 鹿島				
1991	野地晃宏	旭 / 八ヶ岳				バブル崩壊の始まり / 湾岸戦争
1992	村田義治	笠間 / 安中	20周年記念イベント			
1993	中村龍二	秩父 / 千葉			アナトリー・カルポフ	EU発足
1994	越智正和	飯綱高原 / 精進湖	ロシア大使館との親善試合 / チェスオリンピック (モスクワ) に加藤先生同行			
1995	赤塚威夫	九十九里浜 / 精進湖	部室が現在の位置 (百周年記念館) に移動 / 廣瀬先生が顧問に就任			Windows95リリース / 地下鉄サリン事件
1996	赤堀一成	滑川 / 野栄町				
1997	江端大裕	筑波 / 赤城山	25周年記念イベント	IBMのDeep Blueがカスパロフに勝利 (2W1L3D)		山一証券廃業
1998	益本宇一郎	富士 / 水郷	加藤先生退職 (愛知県立大学へ) / 平野先生が顧問に就任	羽生善治将棋四冠がJCA公式戦初参加→全日本チェス百傑戦優勝		Google設立
1999	榎本彰人	福島 / 茨城			アレクサンドル・カリフマン	
2000	馬場雅裕	茨城 / 入間			ビスワナサン・アナンド	
2001	佐野富	千葉 / 妙義山				アメリカ同時多発テロ
2002	渡邊公夫	鹿野山 / 赤城山			ルスラン・ポノマリョフ	
2003	伊丹將人			ヒカル・ナカムラ15歳でGM獲得		
2004	小島慎也			ポビー・フィッシャー成田入管で拘束→翌年まで	ルスタム・カシムジャノフ	Facebook運用開始
2005	篠田太郎				ベセリン・トパロフ	
2006	佐藤智治				ウラジミール・クラムニク	
2007	田中寿樹				ビスワナサン・アナンド	iPhone発売
2008	浅井友輔					リーマンショック
2009	窪木俊雄					
2010	渡辺敬介	日光	重田先生が顧問に就任			
2011	森七海	(中止) / 日光				東日本大震災
2012	兵藤壮亮	熱海 / 日光	40周年記念イベント			

2013	堀翔太	日光 /			マグヌス・カール	
2014	鈴木海登	/ 白子町	高橋先生が顧問に就任	南條遼介氏IM獲得	セン	
2015	吉田晴貴	山中湖 / 鬼怒川		小島慎也氏IM獲得		
2016	小柴怜朗	日光 / 草津				プロ棋士藤井聡太誕生
2017	矢野祥睦	湯河原 / 熊谷				
2018	松山紘也	/ 河口湖				
2019	長瀧航太	白子町 / 潮来		JCAからNCSへ		令和改元 / COVID-19始まる
2020	仲佐勇祐	(中止)		COVID-19のために各種大会が中止に		東京オリンピック
2021	上田佳風人	(中止)		同上		
2022	栃久保仁	志賀高原				
2023			50周年記念イベント			

日本チェス協会主催公式戦記録（優勝者）

日本チェス協会（JCA）のアーカイブに掲載されている主要公式戦（全日本選手権、ジャパンオープン、ジャパンリーグ、全日本快速選手権、全日本百傑戦、全日本学生、全日本ジュニア、全日本シニア、全日本クラブ）の優勝者を抜粋し、麻布学園チェス部出身者を強調表示（**赤太字**は現役～卒業年の3月まで・**黒太字**は卒業生）した。

なお、JCAは全日本選手権の優勝者に全日本選手権開催日の翌年度の全日本チェスチャンピオンの称号を与えていたが、ここでは全日本選手権開催日が属する年で表示している。また、2019年以降はこれらの大会が一部名称や内容を変更しつつ日本チェス連盟（NCS）に引き継がれている。

年	全日本選手権	ジャパンオープン	ジャパンリーグ	快速	百傑	学生	ジュニア	シニア	クラブ
1968	宮坂幸雄								
1969	宮坂幸雄								
1970	宮坂幸雄								
1971	宮坂幸雄								
1972	権田源太郎								
1973	権田源太郎					片山幸一 (同大)			
1974	浜田健嗣					小檜山清之 (慶大)			
1975	権田源太郎					黒田ポール (ICU)			
1976	権田源太郎					竹本寛 (慶大)	仲野美佳		
1977	権田源太郎	権田源太郎				紙谷和広 (日大)	柘植浩之		
1978	権田源太郎	多賀康夫				奥田司 (京府医科大)	増田信次		
1979	権田源太郎	権田源太郎				金子誠也 (早大)	寺田美秋		
1980	小田講文	権田源太郎				園田慎二 (武蔵大)	吉田哲郎		
1981	小田講文	白木和之				青山恵昭 (日大)	西村裕之		
1982	西村裕之	竹本寛			白木知之	西村裕之 (東大)	西村裕之		
1983	西村裕之	尾崎行孝			権田源太郎	石井正八 (慶大)	吉田哲郎		
1984	西村裕之	権田源太郎				吉田哲郎 (東大)	小林中		
1985	権田源太郎 / 黒田ポール	権田源太郎			黒田ポール	神戸川実 (東工大)	鈴木知道		

1986	Jacques-Marie Pineau	春山郁雄			Jacques-Marie Pineau	鈴木知道 (東大)	小林中		
1987	鈴木知道	Loren Schmidt			権田源太郎	鈴木知道	松崎政紀		
1988	Loren Schmidt	Loren Schmidt		Loren Schmidt / Joselito Sunga	Joselito Sunga	鈴木知道	永井広美		
1989	権田源太郎	権田源太郎 / Loren Schmidt / 竹本寛		Loren Schmidt	権田源太郎	加藤富久 (東大)	東芝輝臣		
1990	Joselito Sunga	Loren Schmidt		松本貴志	Joselito Sunga / Powell, D	加藤富久	渡辺暁		
1991	Mats Anderson	権田源太郎		Loren Schmidt / Mohamadreza	鈴木知道	岡野浩行 (東大)	渡辺暁		
1992	Domingo Ramos	Domingo Ramos	Igor Sinelnikov	Igor Sinelnikov / 渡辺暁	Jacques-Marie Pineau	渡辺暁 (東大)	松尾朋彦		
1993	Jacques-Marie Pineau	Ricardo De Guzman	Igor Sinelnikov		Jacques-Marie Pineau	渡辺暁	中村龍二		
1994	西村裕之	Domingo Ramos	中村龍二 / 松尾朋彦 / 田中優毅	Domingo Ramos	西村裕之	松尾朋彦 (東大) / 岡野浩行	松尾朋彦		
1995	Domingo Ramos / 竹本寛 / 松尾朋彦	権田源太郎	西村裕之	Domingo Ramos	権田源太郎	松尾朋彦	越智正和		
1996	権田源太郎	権田源太郎	松尾朋彦	Domingo Ramos	権田源太郎 / 渡辺暁	松尾朋彦	田中優毅		
1997	権田源太郎	権田源太郎	佐々木勝美	杉本公一	渡辺暁 / Jacques-Marie Pineau	松尾朋彦	松沢太輔		
1998	渡辺暁	渡辺暁 羽生善治 杉本公一 Jacques-Marie Pineau	渡辺暁	Domingo Ramos	羽生善治	中村龍二 (東大)	森俊文		
1999	渡辺暁	渡辺暁	渡辺暁	田中優毅 Daniel Kohama	渡辺暁	塩見亮 (東大)	増本宇一郎		
2000	渡辺暁	渡辺暁	田中優毅	杉本公一	渡辺暁	三阪晋 (慶大)	馬場雅弘		

2001	権田源太郎	Dexter Thompson / 松尾朋彦 / 馬場雅裕 / Simon Bibby / 南條遼介	佐々木勝美 / 中村龍二	権田源太郎 / Dexter Thompson	渡辺暁	三阪晋	シーグリスト大地 / 佐野富		麻布学園OB
2002	Simon Bibby	Simon Bibby	渡辺暁	権田源太郎	中村龍二	中郡慧樹(慶大)	高橋礼二 / 南條遼介		麻布学園A
2003	塩見亮 / 酒井清隆	権田源太郎 / Peter Varley	Simon Bibby	Dexter Thompson	塩見亮 / 酒井清隆 / 松尾朋彦	岩崎雄大(東大)	中郡慧樹 / 南條遼介		慶應大学
2004	酒井清隆	馬場雅裕	南條遼介	Dexter Thompson	羽生善治	佐野富(東大) / 馬場雅裕(早大) / 岩崎雄大 / 高橋礼二(桃学)	南條遼介		麻布学園A
2005	小島慎也	南條遼介	南條遼介	南條遼介	三阪晋 / 小島慎也	馬場雅裕	小島慎也		東京大学A
2006	小島慎也 / 馬場雅裕	南條遼介 / 池田惇多	中村光	Ralf Grosshans	南條遼介 / 馬場雅裕	中郡慧樹	小島慎也		麻布学園OB-B
2007	上杉晋作 / 小島慎也	小島慎也	中村光	権田源太郎	塩見亮	小島慎也(慶大)	上杉晋作 / 小島慎也		慶應大学
2008	小島慎也	南條遼介	中村光	小島慎也	小島慎也	山田弘平(埼大)	上杉晋作		東京大学A
2009	Sam Collins	佐野富 / 南條遼介 / 塩見亮	中村光	南條遼介	小島慎也 / 野口恒治	山田弘平	上杉晋作		東京大学OB
2010	南條遼介 / 小島慎也	小島慎也 / 南條遼介	小島慎也	山田弘平 / Alexander Averbukh	南條遼介	佐藤要(東大)	酒井響 / 建内瑛貴	権田源太郎	松戸A
2011	中村龍二 / 馬場雅裕	小島慎也	南條遼介 / 小島慎也	南條遼介	山田弘平	南條遼介(慶大)	酒井響 / 唐堂 / 建内瑛貴	佐々木宏	慶應大学・日吉
2012	南條遼介	Alexander Averbukh	渡辺暁	Gonzalez Diego	羽生善治	佐藤要	建内瑛貴 / Epiphany Peters	権田源太郎	麻布学園OB
2013	池田惇多	南條遼介	小島慎也 / 南條遼介	南條遼介	Averbukh, A / 小島慎也	小林厚彦(慶大)	阿部真大 / 建内瑛貴	浜根謙一	慶應大学OB-1
2014	南條遼介	小島慎也	中村龍二	山田弘平	南條遼介 / 松尾朋彦 / 桑田晋 / 権田源太郎	佐藤要	福住公輝	権田源太郎	麻布学園OB
2015	馬場雅裕	南條遼介	小島慎也	青嶋未来	塩見亮	Yalcin Alparslan(東大)	Lin Gary / 大多和優斗 / 小柴伶朗	権田源太郎	麻布学園OB-A
2016	Tran Thanh Tu	馬場雅裕 / 東野徹男	Lu Shanglei	Alexander Averbukh	Tran Thanh Tu	小林厚彦	田中泰良	田畑譲	麻布学園OB-B

2017	野口恒治	山田弘平 / 松尾朋彦 / 南條遼介 / 大多和優 斗 / 小島 慎也	馬場雅裕	Tran Thanh Tu / Alexander Averbukh	山田弘平 / 小林厚彦	唐堂（慶 大）	大多和優 斗	田畑譲 / 真鍋浩	麻布学園 OB-B
2018	Tran Thanh Tu	Tran Thanh Tu	小島慎也	青嶋未来	Tran Thanh Tu	平尾聡至 （阪大）	遠藤晴人	真鍋浩	大阪チェ スクラブ
2019	青嶋未来	南條遼介	南條遼介	青嶋未来	青嶋未来	三津井理 公（筑 大）	中原鑑	松田竜	8×8 Blunders
2020	Tran Thanh Tu		Samuel Asaka		（中止）	三井峻也 （慶大）	（中止）		
2021	（中止）	小島慎也	（中止）	（中止）	小島慎也	三井峻也	中原鑑	（中止）	（中止）
2022	青嶋未来	小島慎也	Tran Thanh Tu	Tran Thanh Tu	小島慎也	三井峻也	奥野凜音	義之岳史	8×8 Blunders

注1：2019年以降の棋戦名称変更は次の通り。

- ・ ジャパンリーグ→ジャパンチェスクラシック
- ・ 全日本快速選手権→全日本ラピッドチェス選手権
- ・ 全日本百傑戦→東京チェス選手権
- ・ 全日本ジュニア選手権→全日本ユース選手権

注2：2020年度の全日本学生チェス選手権は2021年3月14日に全日本学生オンラインチェス選手権として実施。

ちなみにこのときの第3位は、麻布学園チェス部50周年記念イベント幹事の一人である高田善雄（2016年卒・筑大）。

注3：2021年度の全日本学生チェス選手権の第3位は、麻布学園チェス部50周年記念イベント幹事の一人である森安悠一郎（2021年卒・東大）。

全日本選手権（参加者）

前記公式戦のうち全日本選手権について、麻布学園チェス部から現役で出場した選手のリアルタイム結果（★＝優勝）を掲載する。前表に示したように、2000年代に入ってからにはチェス部出身者による優勝争いが常態化しているが、一方で2010年以降は現役の参加が見られなくなっている。

なお、この記録を整理する過程で権田源太郎氏（表中には掲載していない）が資料中にそのお名前を確認できる2015年までの大会のすべてで半分以上のポイントをあげておられることがわかり、あらためて「レジェンド」の姿を認識することとなった。

年	R	出場者・ポイント				
1968						
1969						
1970						
1971						
1972						
1973						
1974						
1975						
1976						
1977						
1978						
1979						
1980	14	吉田哲郎(H1) 7				
1981						
1982	13	小林中(M3) 5.5				
1983	14	小林中(H1) 8.5				
1984						
1985						
1986						
1987						
1988						
1989	13	東芝輝臣(H2) 5.5				
1990	13	松尾朋彦(M3) 6	尾崎至弘(M3) 5.5	宮本正則(M3) 2.5		
1991	13	松尾朋彦(H1) 7.5	田中海渡(H1) 4.5			
1992	13	松尾明彦(H2) 7	松浦敬(H1) 5.5	田中優毅(M3) 5 西尾龍太郎(M3) 5	中村龍二(M3) 4.5	斉藤孝祐(M3) 4
1993	13	中村龍二(H1) 6				
1994	13	中村龍二(H2) 9	田中優毅(H2) 7.5			
1995	13	竹村航(M3) 6.5	越智正和(H2) 6 赤塚威夫(H1) 6			
1996						
1997	13	松沢太輔(H1) 7				

1998	13	岩崎雄大(H1) 5.5	黒川裕一(H1)				
1999	13	岩崎雄大(H2) 6	馬場雅裕(M3) 5.5				
2000	13	中郡慧樹(H1) 7 馬場雅裕(H1) 7					
2001	13	中郡慧樹(H2) 9	内田紀之(H2) 6.5 田島諒(H2) 6.5				
2002	13	佐野富(H2) 7	南條遼介(M2) 6.5				
2003	13	南條遼介(M3) 8.5	小島慎也(M3) 6.5 汐口達也(M3) 6.5	桑田晋(M3) 5.5 伊丹将人(H1) 5.5 田中未来(H1) 5.5	中村聡介(H1) 4		
2004	13	南條遼介(H1) 9	汐口達也(H1) 7	小島慎也(H1) 6.5	中村聡介(H2) 6		
2005	13	小島慎也(H2) 10★	南條遼介(H2) 9	汐口達也(H2) 7 桑田晋(H2) 7			
2006	13	小島慎也(H3) 9.5★	南條遼介(H3) 8.5	佐藤要(H1) 7	池永哲也(H2) 6.5 佐藤智治(H1) 6.5		
2007	13	佐藤要 (H2) 7.5					
2008	13	小林厚彦(H1) 7.5	田中寿樹(H2) 7				
2009	11	小林厚彦(H2) 5.5	田中寿樹(H3) 4				
2010							
2011							
2012							
2013							
2014							
2015							
2016							
2017							
2018							
2019							
2020							
2021							
2022							

全日本ジュニア選手権（参加者）

続いて全日本ジュニア選手権（2019年以降は全日本ユース選手権）について、麻布学園チェス部から出場した選手のリザルトを掲載する。本表に関しても後日のアップデートが期待される。

年	優勝	2位	3位	4位	5位	6位以下	他校優勝者
1976		篠原研一(M3) / 松永保(H1) / 喜多見淳一(H1)					仲野美佳(M1)
1977							拓殖造之
1978							増田信二(H2)
1979			長岡司(H1)				寺田美秋(M2)
1980	吉田哲郎(M3)		片山拓史(H2)	長岡司(H2)	渡會直也(M3)		
1981		吉田哲郎(H1)	小林中(M1)	泉陽太郎(M3)			西村裕之(H2)
1982		吉田哲郎(H2) 小林中(M2)			小野瀬裕之(H1)		西村裕之(H3)
1983	吉田哲郎(H3)	小林中(M3)	佐藤周一(M3)		矢田洋一(M3)		
1984	小林中(H1)	小野瀬裕之(H3)		中沢俊吉(M3) 柏村恒(M3)			
1985		小林中(H2)	加藤富久(H1)	高迫登(H2) 古川雄一郎(M2)			鈴木知道(H3)
1986	小林中(H3)	沼野井淳(M3)	松崎政記(M2)				
1987	松崎政紀(M3)						
1988		高木謙(H1)	松崎政紀(H1)				劉静波
1989	東芝輝臣(H1)		松尾朋彦(H1)		高山敏典(H1)		
1990		尾崎至弘(M2)	東芝輝臣(H2)		松尾朋彦(M2)		渡辺暁(H2)
1991		東芝輝臣(H3)	松尾朋彦(M3)		田中海渡(M3) 西尾龍太郎(M1)		渡辺暁(H3)
1992	松尾朋彦(H1)	松浦敬(M2)	西尾龍太郎(M2)	田中海渡(H1) 小松晴夫(M3) 中村龍二(M2) 田中優毅(M2)			
1993	中村龍二(M3)	田中海渡(H2)	保坂範之(M3)	松浦敬(H1) 越智正和(M2)			
1994	松尾朋彦(H3)	中村龍二(H1)	田中優毅(H1)	保坂範之(H1)	森村哲雄(H1)	田中海渡(H3)	
1995	越智正和(H1)	小口一造(M2)		竹村航(M2)	村田義治(H3)		
1996	田中優毅(H3)	中村龍二(H3)	竹村航(M3)	赤塚威夫(H1) 平野順大(H3)		森村哲雄(H3)	
1997	松沢太輔(M3)	益本宇一郎(M2)	黒川裕一(M2)		岩崎雄大(M2)		
1998							
1999	益本宇一郎(H2)						
2000	馬場雅裕(H1)	中郡意樹(H1)	森田瑛(H2)		井上祥(H2) 山本俊介(H1) 田島諒(H1) 金子幸佑(M3)		
2001		佐野富(H1)		南條遼介(M1)			シーグリスト 大地

2002		南條遼介(M2)		金子幸佑(H2) 伊丹将人(M3) 大西連(M3)		小島慎也(M2) 桑田晋(M2) 千原剛(M2) 田中未来(M3)	高橋礼二(H3)
2003	南條遼介(M3)		小島慎也(M3) 中村聡介(H1)		汐口達也(M3)	桑田晋(M3) 篠田太郎(M2) 千原剛(M3) 池永哲也(M2)	
2004	南條遼介(H1)	小島慎也(H1)	篠田太郎(M3)	中村聡介(H2)	桑田晋(H1) 水谷享平(H2)	佐藤要(M2) 下田和佳(M2) 佐藤智治(M2) 柴田新(M2) 上村倫央(M2) 牧野裕希(H1) 黒澤友貴(M2)	
2005	小島慎也(H2)	南條遼介(H2)		池永哲也(H1)	篠田太郎(H1)	伊藤雅博(H1) 熊埜御堂武志(H1) 柴田新(M3) 権田夏月(M2) 田中寿樹(M2) 寺崎裕基(M2) 佐藤智治(M3) 津崎盾哉(H1)	
2006	小島慎也(H3)	佐藤要(H1)	汐口達也(H3)		佐藤智治(H1)	小林厚彦(M2) 伊藤雅博(H2) 池永哲也(H2) 権田夏月(M3) 田中寿樹(M3) 小口直紀(M2) 中田雅浩(H2)	
2007	小島慎也OB		佐藤要(H2) 小林厚彦(M3) 田中寿樹(H1) 小口直紀(M3)			権田夏月(H1) 寺崎裕基(H1) 大和田智之(M2) 柴田新(H2)	
2008		小林厚彦(H1) 田中寿樹(H2)				大和田智之(M3)	
2009		田中寿樹(H3)					
2010							
2011							
2012							
2013							
2014							
2015	小柴伶朗(M3)						
2016							
2017							
2018							
2019	飯塚創太(H2) U-18の部優勝 / 長瀧航太(H1) U-16の部3位						
2020							
2021							
2022							

海外遠征記録

麻布学園チェス部出身者（現役は**赤太字**）の海外遠征記録を掲載した。ただし、30周年記念誌の資料編と日本チェス協会機関紙『CHESS通信』からの抜粋とで木に竹を継いだため、大会名の表記の揺らぎや実績の抜け漏れがありうる。読者からの指摘を得ての加筆を期することとしたい。

開催年月日	大会名	開催国	参加者
1980.08	17歳未満選手権	フランス	吉田哲郎
1980.08	世界ジュニア選手権	西ドイツ	吉田哲郎
1983.08	世界ジュニア選手権	フランス	小林中
1987.08.04-16	第7回アジア国対抗チーム選手権	シンガポール	渡会直也
1989.07.18-29	第8回アジアオリンピック	マレーシア	加藤富久
1991.08	アジアジュニア選手権	アラブ首長国連邦	松尾朋彦
1991.08	アジア快速選手権	カタール	田中海渡
1992.06	チェスオリンピック	フィリピン	松尾朋彦 松浦敬
1992.06	世界チェスフェスティバル	ドイツ	西尾龍太郎 田中優毅
1992.09	アジアジュニア選手権	カタール	斉藤孝祐 中村龍二
1992.10	世界ジュニア選手権	アルゼンチン	中村龍二
1994.08	世界ユース選手権	ハンガリー	中村龍二
1994.09	世界ジュニア選手権	ブラジル	田中優毅
1994.11.30-12.16	第31回チェスオリンピック	ロシア	松尾朋彦 中村龍二
1995.12.13-23	第11回アジア団体選手権	シンガポール	松尾朋彦 赤塚威夫
1996.08.12-27	アジアジュニア選手権	マカオ	田中優毅
1996.09.15-10.02	第32回チェスオリンピック	アルメニア	松尾朋彦 中村龍二
1996.11.08-22	第35回世界ジュニア選手権	コロンビア	中村龍二
1996.12	アジア団体選手権	シンガポール	赤塚威夫
1997.07.13-28	第36回世界ジュニア選手権	ポーランド	松沢太輔
1997.09.25-10.07	アジアジュニア選手権	インド	田中優毅
1998.08.10-20	第5回世界学生チェス選手権ユニバーシアード	オランダ	松尾朋彦
1998.09.26-10.12	第33回チェスオリンピック	ロシア	中村龍二 田中優毅

1998.12.08-18	世界選手権予選3.2aゾーン選手権	ミャンマー	松尾朋彦					
1999.09.09-21	子供チェスオリンピック	ウクライナ	益本宇一郎	岩崎雄大	中郡慧樹	山本俊介	黒川裕一	
2000.10.29-11.12	第34回チェスオリンピック	トルコ	松尾朋彦	田中優毅	中村龍二			
2002.10.25-11.11	第35回チェスオリンピック	スロベニア	南條遼介	岩崎雄大				
2003.06.20-30	世界選手権予選3.2aゾーン選手権	ベトナム	岩崎雄大					
2004.10.14-31	第36回チェスオリンピック	スペイン	南條遼介					
2004.11.18-30	第43回世界ジュニア選手権	インド	南條遼介					
2005.02	Capele La Grande	フランス	佐野富	馬場雅裕				
2006.05.20-06.04	第37回チェスオリンピック	イタリア	南條遼介	小島慎也	佐野富	岩崎雄大	中郡慧樹	
2006.12.01-15	第15回アジア競技大会	カタール	南條遼介	小島慎也				
2006.11.07-16	2006アジアジュニア選手権	インド	小島慎也	佐藤要				
2007.08.04-12	世界ユース16歳未満チェスオリンピック	シンガポール	小林厚彦	田中寿樹	小口直紀			
2007.10.26-11.03	第2回アジアインドアゲームズ	マカオ	小島慎也	南條遼介	岩崎雄大			
2008.08.02-16	世界ジュニア選手権2008	トルコ	小林厚彦					
2008.11.12-25	第38回チェスオリンピック	ドイツ	小島慎也	馬場雅裕	佐野富			
2008.10.18-31	世界ユースチェス選手権2008	ベトナム	小林厚彦					
2009.10.31-11.07	第3回アジアインドアゲームズ	ベトナム	小林厚彦					
2010.09.20-10.03	第39回チェスオリンピック	ロシア	小島慎也	南條遼介	中村龍二			
2010.11.12-27	第16回アジア競技大会	中国	小島慎也					
2011.08.12-25	第26回ユニバーシアード	中国	佐藤要					
2011.08.18-25	マレーシアオープン	マレーシア	小島慎也	篠田太郎	渡辺敬介			
2012.08.27-09.10	第40回チェスオリンピック	トルコ	小島慎也	南條遼介	岩崎雄大			
2012.08.19-26	世界大学チェス選手権2012	ポルトガル	篠田太郎					
2013.06.29-07.06	第4回アジアインドア&マーシャルアーツゲームズ2013	韓国	小島慎也	南條遼介				

2014.08.01-08.14	第41回チェスオリンピック	ノルウェー	南條遼介	小島慎也			
2014.08.18-24	第13回世界大学チェス選手権	ポーランド	小林厚彦	田中寿樹			
2016.09.01-14	第42回チェスオリンピック	アゼルバイジャン	小島慎也	南條遼介			
2016.09.22-10.03	世界ユースチェス選手権	ロシア	野口崇哉	吉田晴貴			
2018.8	東アジアチェスユース大会		松山紘也				
2018.09.23-10.06	第43回チェスオリンピック	ジョージア	小島慎也	南條遼介	松尾朋彦		
2020	(この年のチェスオリンピックは延期のち中止)		南條遼介	小林厚彦	小島慎也		
2022	第44回チェスオリンピック	インド	小島慎也	小林厚彦			

編集後記

伊勢神宮において20年に一度行われる式年遷宮には、社殿と神宝を新調することにより神威を瑞々しく保つだけでなく、宮大工や神宝職人の技術を伝承するという意味合いがあるそうです。今回の50周年記念誌も前回の30周年から20年目に当たりますが、さすがに1300年の歴史の中での20年おきと50年の内の20年のブランクとでは隔絶の度合いが比べ物にならず、せめて今から10年前にその時点までの情報を整理してくれていれば、と思う場面が多々ありました。この意味からも、本誌制作に際し「底本」とした20周年記念誌の見事な仕事ぶりにあらためて敬意を表すると共に、今後この事業を引き継ぐ世代の人たちには日々記録を蓄積し、後日の参照に耐えるよう定期的に整理することの重要性を強調しておきたいと思います。そして将来の記念誌制作の役目を担う方々に対し、今からエールを送ります。がんばって、そして楽しんで下さい！

安藤 信之 (1978年卒)

個人的な友人でもある安藤さんからチェス部が創立50周年を迎えると教えていただいてから数か月、主に謝恩会企画の幹事として携わってきました。麻布のOBとして、学園生活はかけがえのないものであるのは皆さん同じであると思いますが、チェス部のOBの方々はチェス部員としての経験・記憶が、それをいっそう熱い（熱かった）ものとして持ち続けているのだと感じました。記念誌への先生方、OBの方々からの寄稿が届くたびに、その情熱に絆されて、またチェスの駒を並べてみようとの思いが湧いてきました。ホームカミングデイに合わせて（チェス部に限らず）クラブのOB会を同時に行うというのも、アイデアとしてアリかと思います。同期の平校長に掛け合ってみよう！

金子 寛明 (1979年卒)

ひよんなことから50周年記念イベントの幹事に入れていただき、少しお手伝いするだけのつもりが、結構どっぷりつかることになりました。20周年誌の編集を担当し完成した時には、「やりきった感」があったのですが、まさか30年後にまた似たような気持ちを味わえるとは。記念イベントに携わったお蔭で、何十年ぶりに懐かしい方々とやりとりしたり、部室に入れてもらって宝探しをしたり（45年前の「自己満ファイル」が出てきたのは感動！）、色々楽しめました。今回、近藤先生の情報くれた同期のI君から「書道部は消滅してしまって悲しい。チェス部がうらやましい」と言われ、日本ではマイナーなゲームであるチェスが、メンバーが入れ替わる中高のクラブとして50年続いたのは、改めて奇跡的なこ

とだと思いました。バトンをつないでくれた全ての後輩諸君と歴代顧問の先生方に感謝すると共に、次の50年も麻布チェス部が続き、さらに発展していくことを祈ります。

吉田 哲郎 (1983年卒)

前回2019年のOB会の幹事を務めさせていただき、引き継ぎをしなければと思いつづけていたら、あれよあれよと50周年の記念OB会の幹事団も務めさせていただくことになりました。安藤さん、金子さん、吉田さん、片山さん、森安の多大なるご尽力により、麻布チェス界、ひいては日本チェス界の歴史に残るような記念誌が完成したことをとても嬉しく思います。個人的な都合により、幹事の業務を疎かにしてしまうときもありましたが、その時に他の幹事の方に助けていただいたことに対しては、これから幹事として窮するであろう後輩たちの力になることで恩返ししていきたいです。麻布チェス部とその部員の更なる発展と活躍を願っています。

高田 善雄 (2016年卒)

2021年の12月に行われた学生選手権で高田さんからOB会の幹事の話をしていただいてからもう1年以上が経ち、気が付いたらその間にこれほど大きいプロジェクトの幹事団の末席を汚していることには驚いています。この記念誌に寄稿されている偉大な先輩方のひとつひとつのエピソードに50年という歳月の蓄積を身をもって感じるとともに、自分も微力ながら51年目の世代にバトンを渡すために今回の経験を引き継いでいく心づもりです。

森安 悠一郎 (2021年卒)

五十年の歩み

— 麻布学園チェス部 設立五十周年記念誌 —

2023年2月23日 初版発行

2023年3月20日 第2版発行

編集人：安藤 信之 / 金子 寛明 / 吉田 哲郎 / 高田 善雄 / 森安 悠一郎

初版から第2版への変更点

初版 ページ	箇所	変更前	変更後
2	森安悠一郎氏の卒業年	2020年卒	2021年卒
12	本文3段落目	2019年3月に臨時休校	2020年3月に臨時休校
19	本文1段落目	1995年の春	1995年の夏
24	近藤祐康先生の命日	2023.08.25	2022.08.25
25	本文5段落目	観る人に創造してもらう	観る人に想像してもらう
27	「近藤祐康先生の教え」の後		「恩師近藤祐康先生から頂いたお手紙」を追加（以後ページ番号が変わる）
28	権田源太郎氏の命日	2023.11.10	2022.11.10
61	松山紘也氏寄稿本文1行目	2020年卒	2021年卒
93	2003年度部長名	伊丹将斗	伊丹将人
98	全日本シニア選手権優勝者 (2017年)	田畑譲	田畑譲 / 真鍋造
98	同上 (2019年)	真鍋造	松田竜
98	森安悠一郎氏の卒業年	2020年卒	2021年卒
100	2003年出場者	(記載漏れ)	伊丹将人(H1)5.5 田中未来(H1)5.5
100	2004年出場者	中村聡介(H1) 6	中村聡介(H2) 6
103-104	複数箇所	(行の高さが足りず文字が隠れているところがある)	(行の高さを調節)
107	森安悠一郎氏の卒業年	2020年卒	2021年卒